地下運動の声

—共産圏教会の内幕—

リチャード・ウォムブランド 著
栗　原　督　枝 訳

いのちのことば社

TORTURED FOR HI, FAITH

by Richard Wurmbrand

©1967 by Hayfield Publishing Co.. Japanese translation rights arranged through Kaigai Hyoronsha, Tokyo.

著者について

リチャード・ウォムブランド先生は、福音主義教会の牧師であるが、祖国ルーマニアで十四年間にわたって共産党政府により投獄され、拷問を受けた人である。先生は、ルーマニアで最も有名なクリスチャン指導者、著作家、教育者のひとりである。実際、彼ほど母国で名が知られている人は少ないだろう。

一九四五年、共産主義者がルーマニアを征圧し、教会を共産主義の支配下に置こうとした時、ウォムブランド先生は、奴隷化した国民とソビエトの侵略兵に対して、精力的な「地下」伝道を始め、成果をあげたのである。彼は、一九四八年、妻のサビネといっしょに逮捕された。サビネは奴隷労働者として三年間働かされ、彼は三年間独房につながれた。その間、共産党政府の拷問者のほかに、だれにも会わなかったと言う。三年後集団刑務所に移され、五年間拷問を受けた。

ウォムブランド先生は国際的に知られたキリスト教界の指導的人物であったので、外国大使館の外交官たちは、共産政府にその安否を尋ねた。ところが、彼はルーマニアから逃亡したという

通知があった。彼と同室で、釈放された囚人である、という偽装秘密警察官は、収容所の墓地で彼の葬式に列席したと夫人に告げた。ルーマニアにいる彼の家族と外国の友人たちは、もう死んだのだから、彼のことは忘れるようにとの通知を受けた。

八年後、彼は釈放された。そしてただちに地下教会の働きを再開した。しかし二年後の一九五九年に再び逮捕されて、二十五年の刑を宣告された。

一九六四年の一般恩赦の時釈放された彼は、再び地下活動を続けた。三度目の強制収容の危険が大いにあると見てとったノルウェーのクリスチャンたちは、共産政府の権威筋と交渉して、彼のルーマニア追放を請願した。ちょうど共産政府は政治犯の「身売り」を始めたところであった。囚人ひとりの「時価」は、当時八百ポンドであったが、彼の場合、二千五百ポンドだった。

一九六六年五月、彼は、ワシントンのアメリカ上院で行なわれた国内安全保障に関する小委員会の席で証言した。彼が上半身をぬいで見せると、そのからだに十八か所の深い拷問の傷跡が見られた。この証言は、新聞紙上に報道され、アメリカ、ヨーロッパ、アジアから全世界に伝えられた。一九六六年九月、ルーマニア共産軍による暗殺計画が決定されたという警告があった。

しかし、彼は、死の脅迫者たちの面前でも沈黙していない。彼こそ、「地下教会の声」と呼ばれ、多くのキリスト教指導者から、「生ける殉教者」とか、「鉄のカーテン下のパウロ」と言われ

てきたその人なのである。

序

私が初めてルーマニアを訪れたのは、一九六四年十二月であった。ルーマニアは、ヨーロッパ中で、アルバニアを除いて、私が行ったことのないただ一つの国であった。何か月もの間、私はルーマニアに行かなければならないと、神から明確に示されていた。それで私は、ジョン・モーズリといっしょに、ハンガリー国境からルーマニアに入国したのである。

入国してすぐに気づいたことは、ルーマニアがほんとうに共産主義国家であり、私たちが権威筋の厳重な監視下にあるということであった。このような状況であったが、ルーマニアのクリスチャンたちは、私たちを暖かく歓迎してくれた。アドベント（待降節）の第一主日の夕、ブカレストのドイツ系バプテスト教会に行った。私たちは、それぞれ、あいさつとあかしをするよう求められた。集会後、何人かの人が話しかけてきたが、その中に、背が高く顔色の悪い人が、私たちを見つめて立っていた。彼は、私たちに、「いっしょに話せますか」と聞いてから、「もし私の家に来てくださるなら、少しぐらい危険を冒してもかまいません」と言った。そこで私たちは、

その晩おそく十時ごろ、リチャード・ウォムブランドが、その夫人と息子のミハイと住む家（一番上の階の狭い屋根裏の部屋に彼らは住んでいた）に向かった。

そっとはいって行くと、うわさだけは西ヨーロッパでよく聞いたあの牧師がいて、獄中生活十四年の驚くべき体験と救出のことを隠すところなく話してくれた。その間、まず息子が、それからサビネ夫人が道路をのぞきに行ったが、ふたりとも、家が警察に囲まれており、警察の車が家の向こう側に待機していると報告した。どのくらいの時間、彼らは見張っているつもりだろう。このあとどうなるのだろうか。

リチャード・ウォムブランドがあかしを結んで、私たちは共に祈った。神のしもべたちが守られるように祈った、忘れることのできない祈り会であった。彼のからだにある拷問の跡を見て、身の毛のよだつような当時の恐怖が、今さらのようにまざまざと心に浮かび上がってきた。しかし投獄と苦難の暗黒の物語から輝き出て消えない光、それは栄光と愛の光であった。神は私たちの祈りを聞いてくださった。ようやく私たちが道に出た時、そこにはもう警察はいなかった。

彼は、まさに英雄的なイエス・キリストの証人である。初めてこの神の家族に出会ってからというもの、私たちふたりは、以前と同じ人間ではいられないと感じた。それゆえ、私は、この本の紹介を依頼されたことを名誉に思う。神が多くの人々の心を動かして、東ヨーロッパの各国民

への愛を与えてくださるように、また心の開かれた応答があって、イエス・キリストのために苦しんでいる人々に、具体的な援助の手がさしのべられるように、キリストのからだなる教会のために、その肉体にキリストの苦難を負っている人々の背後にあるものが解決されるように切に祈るものである。

ヨーロッパ・クリスチャン・ミッション代表

W・スチュアート・ハリス

献辞

E・C・M（ヨーロッパ・クリスチャン・ミッション）のロンドン本部代表、W・スチュアート・ハリス師に本書をささげる。師は、一九六四年、私が釈放された時、西ヨーロッパのクリスチャンから送られた最初のメッセンジャーとしてルーマニアに来てくださった。あらかじめいろいろと警戒策をこうじたあと、私たちの家に来てくださったハリス師は、それまで耳にしたこともなかった愛と慰めのことばをかけてくださり、クリスチャン殉教者の家族へ救援の手をさし出してくださった。殉教者の名において、私たちの感謝をここに表わしたい。

この本を書く理由について

鉄のカーテンに隔てられた地下教会から、自由諸国のクリスチャンのおひとりびとりにメッセージをお伝えしたい。

「私が長い間指導して来た地下教会は、私があらゆる方策を尽くして自由世界に行き、あなたがたに緊急メッセージを伝えることを決定しました。これから読もうとしておられる記録の言語に絶した悪の世界から、奇蹟的に助かって生きのび、自由世界に到達しました。私はこの本を通して、共産主義諸国の忠実な苦難の地下教会からゆだねられたメッセージを伝えます。

読者の皆様が、この地下教会からのメッセージに接して深く思いをめぐらし、緊急事態への洞察が与えられますよう心から願いつつ、まず私のあかしと地下教会の働きについてお話しします。」

目次

1 キリストを求めてやまないロシア人……一三
2 これよりも大きな愛はない……四七
3 自由諸国での働きのために……七三
4 キリストの愛によって……九九
5 働き続ける地下教会……一二九
6 勝ち進むキリスト教……一五九
7 自由諸国のクリスチャンにできること……一九三

1　キリストを求めてやまないロシア人

無神論者がキリストを見いだす

私が育った家庭には、宗教は何もなかった。もちろん幼いころから宗教教育を受けたことはなかったし、十四才のころにはすでにコチコチの無神論者になっていた。不幸な幼年時代の経験からそうなったのである。私は生まれて何年もたたないうちに孤児となり、第一次大戦の困難な年月を貧困のうちにすごしたのであった。十四才になったころ、私は自分が無神論者であるという確信があった。ちょうど現代の共産主義者と同じように、それまでに無神論に関する本を何冊も読んだ。でも、神やキリストを信じないというのではなかった。ただ、そういう概念は、人間の理性を毒するものと考えて毛ぎらいしていたのである。こうして私は、宗教に対して冷たい気持ちを持ったまま成長して行った。

しかし、あとから考えてみると、私には、わけはわからないが、神の選ばれた民のひとりとなる恵みが与えられていた。それは決して私の人格によるものではない。私の性質は全く悪い状態にあったからである。

無神論者でありながら、何かわけのわからないものにひかれて、いろいろな教会へ行ってみた。教会の近くを通ると、そのまま通りすぎることはできなかった。とは言っても、教会の中でどんなことが起こっているのか、さっぱり理解できなかった。説教は聞いたけれど、まるで心に訴えるものがなかった。神はいない、私はこう固く信じていた。神は、服従しなければならない主人のようなものだという概念がいやだったのだ。私の心に描いた誤った神についての考えを私はきらっていたのである。この宇宙の真中のどこかに愛の心が存在しているということを、しきりに思いめぐらしていた。幼少年時代の喜びをほとんど知らない私は、どこかに私のために高鳴るハートがあるということにあこがれを感じていたのである。

神はいないと知りつつも、私はこういう愛の神が存在しないことを悲しく思った。あるとき私は、内面の霊的な戦いをおぼえながら、カトリック教会にはいって行ったことがある。ひざまずいた人たちが何やら言っているのを見た。私もいっしょにひざまずいて、みなが言っていることを聞き、祈りをくり返して、何かが起こるのか、みようと思った。「恵みに満ち満てるマリヤ

よ、彼らは聖処女への祈りをとなえていた。私もあとについて行き、何度も何度もそのことばをくり返し、聖処女マリヤの像を仰いだ。でも何ごとも起こらず、私は落胆した。

ある日、私は確固とした無神論者でありながら神に祈った。その祈りは、次のような内容のものだった。「神よ。あなたは確かに存在しないことを知っています。でも、万一あなたが存在するようなことがあったとしても、私は異議を申し立てます。私には、あなたを信ずる義務などありません。あなた自身を現わすことこそ、あなたの義務です」と。私は無神論者であったが、無神論は私の心に平安を与えてくれなかったのである。

この内的な混乱の時期に――これもあとになって知ったことだが――ルーマニアにそびえ立つ山脈の山奥の村で、ひとりの年老いた大工さんがこんな祈りをささげていたのである。「わが神よ。私はこの世であなたに仕えてきました。ですから、天国だけでなく、この地上でも報いをいただきたいと思います。それは、イエスさまがユダヤ人でしたから、死ぬ前にユダヤ人をひとりキリストに導きたいのです。でも私は貧しい年寄りの病人で、出かけて行ってユダヤ人を捜すのはむりです。私の村には、ひとりもユダヤ人はおりません。どうか私の村へユダヤ人を連れて来てください。そうすれば私は、その人を全力を尽くしてキリストに導きます。」

何か抗し難いものにひかれて、そこで何をするという当てもなく、私はその村へ行った。ルー

マニアには一万二千もの村があるのに、その村に行ったのだ。その大工さんは、私がユダヤ人だとわかると、どんな美しい女の子でも今まで受けたことのないような態度で、愛のことばをかけてきた。彼は、私が祈りの答えであることを知り、聖書を読むようにと言って与えてくれた。以前にも、教養のために何回か聖書を読んだことがあった。ところが、彼のくれた聖書は、それと全く違う種類のもののように感じた。あとでわかったことであるが、彼は妻といっしょに、私と私の妻の回心のために何時間も祈ったという。だから、彼がくれた聖書は、文字で書かれたものというより、祈りによって点火された愛の炎によって書かれたものだった。私はとても読み進むことができず、ただ泣くばかりだった。イエスの生涯に比べ、何と私の生活は悪いものだろう。キリストのきよさと私の汚れ、キリストの愛と私のうちにある憎しみを知らされた。そして、キリストは私を受け入れて、ご自身の民のひとりとしてくださったのである。

続いて妻も回心した。彼女は他の魂をキリストに導き、その人たちも、さらに何人かを導いたので、ルーマニアに新しいルーテル教会ができた。

やがてナチ政府の時代となり、私たちは多くの苦しみに会った。ルーマニアでは、ナチは極端な独裁制をしき、ユダヤ人もプロテスタントの人々をも迫害した。

私は正式に任命される前、まだ伝道牧会の準備をする前に、事実上、教会の指導者となってい

た。その働きを始めた者として責任を持っていたのである。妻も私も何度か逮捕され、ナチ裁判にかけられ打ちたたかれた。ナチの脅威は恐るべきものであった。しかし、それもきたるべき共産党政府のテロの序曲にすぎなかった。息子のミハイには、殺されるのを防ぐために、ユダヤ人らしくない名前をつけなければならなかった。

ロシア人伝道

かつて自分が無神論者だったという悲しい経験から、私は回心したその日からロシア人にあかしをすることを切望した。ロシア人は、子どもの時から無神論で育った国民である。私の願いはかなえられた。その始まりはナチ時代であった。ルーマニアでは、何千人ものロシア人が戦争犯罪人として投獄されており、彼らの間でキリストを伝える働きができた。

それは、劇的な、しかも感動的な働きであった。初めてロシア人の囚人に会ったときのことを忘れることができない。彼は技術者だと言っていた。私は「神を信じていますか」と尋ねてみた。彼が、「いいえ」と答えたとしても、私は別に驚きはしなかったろう。信じるか信じないかは、すべての人の自由な権利であるからだ。ところが、神を信じるかと聞いた時、彼は顔を上げ

て、けげんそうに私をじっと見つめて言った。「信じるという軍事命令は出ていません。命令があれば信じます。」

私のほおを涙が流れた。まさに心臓が張り裂けんばかりの思いであった。今、私の前に立っているのは、心の死んだ人間、神が人類に与えられた最大の賜物——自分が一個の人格を持った人間であるという特権——を喪失した人間なのだ。信じるか信じないかは命令一つという、共産党の手で洗脳された一個の道具なのだ。もはや自分で考えるということができない、実に、共産主義の支配下に何年もおかれてきた結果生まれた典型的ロシア人なのだ。共産主義が人間にしたことをまのあたり見たショックから、私は生涯をこういう人たちにささげますと神に誓った。彼らに、個人の人格を取りもどさせ、神とキリストへの信仰に導くために——。

ロシア人に伝道するためには、ロシアまで行かなくてもよかった。一九四四年八月二三日を皮切りに、ルーマニアに百万のロシア軍が侵入し、まもなく共産主義者が政権を握るようになった。ナチ時代の苦難も物の数ではなかったと思えるほどの悪夢のような日々が始まった。

当時ルーマニアの人口は千八百万で、共産党員は一万人しかいなかった。ところが、ソビエト連邦の外相ビビンスキイは、国民の敬愛を一身に集めていた王ミハイ一世のオフィスにどなりこみ、テーブルをこぶしでたたきながら、「共産主義者を内閣に任命しなければだめだ」と言った。

ルーマニアの軍隊と警察は武装解除され、暴力によってみんなからきらわれていた共産主義者が代わって権力を握った。そのことは、当時のアメリカやイギリス政府のあずかり知らぬことだったとは言えない。

神の前においては、個人的な罪だけでなく、国家にも責任がある。すべての捕囚の国の悲劇は、アメリカやイギリスのクリスチャンの心に課せられた責任である。アメリカ人も、時には、無意識のうちに、ロシア人が殺りくとテロの制度を私たちにかぶせてくるのを支持したのだということを知らなければならない。アメリカ人は、このことのためにも、捕われの民がキリストの光のもとに来るように助けることによって、その罪をつぐなわなければならない。

愛のことばと誘惑のことばは同じ

共産主義者はいったん権力を握ると、巧みに教会に向かって誘惑の手をのばして来る。愛のことばと誘惑のことばは同じである。ある女性を妻にしたいと望む者も、一夜の慰み者にしてあとで捨ててしまおうとする者も、共に、「私はあなたを愛しています」と言う。イエスは、誘惑のことばと愛のことばを聞きわけるように、羊の毛をかぶった狼とほんとうの羊を見わけるように

と語られた。

共産党政権が成立したとき、多くの司祭や牧師は、この二つの声をどのようにして識別するかを知らなかった。

共産党政府は、議会会場に、全キリスト教団体評議会を召集した。全教派から、司祭、牧師、伝道者が四千人集まった。この四千人は、ヨセフ・スターリンを同評議会の名誉会長に選出した。スターリンは、一方では無神論運動、クリスチャン集団虐殺運動の会長でもあったのだ。司祭や牧師は、議会でひとりずつ立ち上がって、共産主義とキリスト教は基本的には同じものであって両立すると宣言した。牧師たちは、次々に共産主義への賛辞を述べ、新政府に対する教会の忠誠を誓った。

私は妻と共にこの議会に列席していた。そばにすわっていた妻が言った。「リチャード、立って、キリストの御顔に塗られた恥を洗い落として！ みんなで、主の御顔につばをはきかけてるじゃありませんか。」私は言った。「もしそんなことをすれば、おまえは夫を失うことになるよ。」妻は答えた。「臆病者を夫にしたくありません」と。

そこで私は立ち上がり、クリスチャンや殺りく者を賞賛することをしないで、キリストと神を賛美しながら、議会に語りかけた。そして、私たちの忠誠は、まずキリストに対してささげられ

なければならないと言った。この議会の演説は放送されたので、共産党政府議会の演壇から宣言されたキリストのメッセージを、全国民が聞くことができた。あとで、このために大きな代価を払わなければならなかったが、その値打ちは十分あった。

正教会とプロテスタント教会の指導者は、競って共産主義に譲歩した。ある正教会の監督などは、その服に槌と鎌を描いて、主教たちに今後「同志」の監督と呼んでくれるようにとたのんだほどである。レシスタの町のバプテスト評議会――赤旗の支配下にある評議会――に出席したことがあるが、そこでは、全員起立でソビエト連邦国歌を歌っていた。バプテスト連盟の会長は、スターリンは、神の命令を遂行してやまなかったと公言した。スターリンが偉大な聖書の教師であるとほめちぎった。パトラスコーやロシアヌという司祭のごときは、もっと直接的に共産主義のために働いた。彼らは秘密警察の将校になったのである。ルーマニアのルーテル教会の監督代表は、神学校で次のように教え始めた。すなわち、神は三つの啓示を与えられた。第一はモーセを通して、第二はイエスを通して、そして第三はスターリンを通してである、と。しかも、第三の人は第二の人にまさるとまで言った。

私が深く愛している真のバプテスト信者たちは、こうしたことに同調することなく、キリストに忠実であったし、多くの苦しみを受けたことは理解されなければならない。しかしながら、共

産主義者が指導者を選んだので、バプテストの人たちは受け入れるほかなかったのである。今日も、事実、最高の宗教指導者は同様な状態にある。

キリストのしもべとなる代わりに共産主義のしもべとなった人々は、協力しない兄弟たちの告発を始めた。

ロシア革命以後、ロシアのクリスチャンが地下教会を作ったように、ルーマニアでも、共産政権のもとに多くの教会の公式の指導者が裏切りを行なうようになって、私たちもまた、地下教会を作らざるを得なくなった。この教会こそ、伝道に忠実であり、福音を説き、子どもたちをキリストに導く教会であった。共産党政府は、すべての地下教会を禁止し、公認の教会はそれを承認した。

他の人々といっしょに、私は地下の活動を開始した。そのころ、私は、表面的には高い社会的地位についていた。実際の働きである地下伝道とは何のかかわりもなかったけれど、それがかくれみのとして役立った。私は、ノルウェー・ルーテル・ミッションの牧師であると同時に、ルーマニアのWCC（世界教会協議会）代表としても働いた（ルーマニアでは、この組織が共産主義者と協力するものだなどという考えは少しもなかった。当時、ルーマニアのWCCは救済事業しかしていなかった）。この二つの肩書が、地下活動について知らない権威筋の手前、とてもよい

身分証明になった。

この働きは、二つに分かれていた。第一は、百万のロシア兵の間での秘密伝道、第二は、ルーマニアの奴隷化された人々への地下伝道であった。

飢えかわいた魂――ロシア人

ロシア人に福音を説くことは、私には、さながら天国だった。いろいろな国の人に伝道したけれど、ロシア人ほど福音を受け入れる国民を見たことがない。彼らは実に飢えかわいた魂なのだ。

友人である正教会の主教が電話をしてきた。ロシア人将校が来て告白したいと言ったので、ロシア語の話せる私の住所を教えたというのである。翌日、その人がやって来た。彼は、神を愛し、神を求めていたが、まだ聖書を見たことがなく、礼拝に出席したこともなかった（ロシアには、教会がとても少ない）。宗教教育も受けていない彼は、神についてのわずかな知識も持たないまま、神を愛していたのである。

私は、イエスの山上の説教とたとえを彼に読んであげることから始めた。彼は、その個所を聞

くと、狂喜して部屋中をおどり回って叫んだ。「何てすばらしいんだろう！　このキリストを知らずに、よく生きて来られたものだ！」と。キリストを知って、こんなに気が狂うほど喜んだ人を見たのは初めてだった。

そのとき私は一つのまちがいをした。何の予備的な話もしないで、キリストの受難と十字架のところを読んだのである。これは、彼にとって予期しないことだったのだ。キリストがむち打たれ、十字架につけられ、ついには死んだことを聞くと、彼はソファにかけたまま激しく泣き出した。救い主を信じたばかりなのに、もう彼の救い主は死んでしまったからである。

彼を見つめながら、私は、自分がクリスチャンだ、牧師だ、人を教える教師だと称していることが恥ずかしくなった。このロシア人将校ほど、キリストの苦しみにあずかったことがなかったからである。彼を見ていると、まるでもう一度マグダラのマリヤが十字架の下で泣いているのを見ているような、また、イエスが墓の中でしかばねとなった時、なお彼女が泣き続けているのを見るような気がした。

それから私は、復活のところを読んだ。彼は、救い主が墓からよみがえったことを知らなかった。このすばらしいニュースを聞いたとき、彼はひざをたたいて、あまり上品でない、でもたぶん非常に聖なる誓いのことばを発した。武骨な彼一流のことばで……。再び彼は喜びに満たされ

て叫んだ。「彼は生きている！　生きている！」彼はもう一度、幸福感に酔いしれて部屋をおどり回った。

私は彼に「祈りましょう！」と言った。彼は祈りを知らず、宗教的なことば使いなど知らなかった。私といっしょにひざまずいて祈った祈りは次のようなものだった。「おお神よ。あなたは何とすてきな人でしょう。もし私があなたで、あなたが私だったら、私はとってもあなたの罪をゆるすことはできない。だけどあなたはほんとにいい人です！　私は心の底からあなたを愛してます。」

天の御使いは、みんなその時していることをやめて、ロシア人将校の崇高な祈りに耳を傾けたに違いないと思う。この男は、キリストにかちとられたのである。

ある店で、ロシア人の大尉と婦人将校がいっしょに買物をしているのに出会った。いろいろな物を買おうとしていたが、ロシア語のわからない店員に話すのに苦労していた。私は通訳を申し出て、彼らと知り合いになり、昼食に招いた。食べる前に、私は「あなたがたがおられるこの家はクリスチャンの家です。私たちには祈る習慣がありますから」と言って、ロシア語で祈った。彼らはもう、フォークとナイフに手もつけず、食物にすっかり関心がなくなってしまった。神について、キリストについて、聖書について、次から次へと質問を始めた。実際のところ、彼らは何一つ知らなかったのである。

彼らに話すのは容易なことではなかった。百匹の羊を持っていて一匹を失った人のたとえを話したが、わかってもらえなかった。「百匹の羊を所有しているとは、いったい何のことですか。共産党の集団農場は没収しなかったのですか」と聞くのだ。そこで私は、イエスは王であると言った。すると彼らは、「すべての王は、国民に対して専横な政治をした悪い人間だったから、イエスも専制者に違いありません」と答える始末だった。ぶどう畑の働き人のたとえを話すと、「これは、ぶどう畑の持主に対して反逆するのに十分な理由があります。そのぶどう畑は集団農場にすべきです」というのだ。何もかも彼らには耳新しいことだった。イエスの誕生について語ったとき、西欧人にとって冒瀆とも言えるようなことを質問した。「マリヤは神の奥さんだったんですか」と。彼らと話しているうちに、また他の多くの人と話しているうちにわかったことは、長年共産政権の下にあるロシア人に福音を説くためには、全く新しい用語を使わなければならないということであった。

中央アフリカに行った宣教師が、イザヤ書の「あなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなる」という個所を翻訳するのに困ったそうである。中央アフリカでは、だれも雪を見たことがないので、雪ということばさえない。そこで次のように訳さざるを得なかった。「あなたがたの罪は……ココナッツの実のように白くなる」と。

私たちも、福音をマルキストのことばに訳し、わかりやすく表現しなければならなかった。私たちの力では及ばないことだったが、聖霊が私たちを通して働き、みわざをなしてくださった。

大尉と婦人将校は、その日回心し、あとで、私たちのロシア人への地下伝道の大きな助けとなった。

私たちはひそかに何千部もの福音書とキリスト教文書を印刷し、ロシア人に配布した。回心したロシア兵を通して、多数の聖書と分冊をロシアに持ち込むことができた。

ロシア人の手に神のことばを渡すためには、別の方法も使った。ロシア軍は何年も戦争をしていて、多数の兵士が祖国に子どもを残したまま、長い間会うこともなかった（ロシア人は、たいへんな子ども好きである）。私の息子ミハイと十才以下の幼い子どもたちが、街路や公園で、聖書や福音書、その他の文書をポケットにつめて、ロシア兵に近づいて行った。兵士たちは子どもの頭をなでて、何年も顔を見ていない自分の子どものことを思いながら、やさしく話しかけて来た。そして、チョコレートやキャンディを子どもたちにくれた。子どもたちはそのお返しに聖書や福音書をあげた。兵士は喜んでそれを受け取るのである。私たちが公然と行なうには危険すぎるようなことでも、子どもは全く安全にやってのけることがよくあった。彼らはロシア人への「若き宣教師」だった。その結果はすばらしかった。他に方法がないときにも、多くの兵士がこ

のようにして福音を受けたのである。

ロシア軍兵舎で説教をする

ロシア人の間で、個人的な働きをするだけでなく、小グループの集会を持つことができた。

ロシア人は時計が大好きである。彼らは、だれかれの別なく時計を盗んだ。町で呼びとめられると、必ず時計を渡さなければならなかった。ロシア人が両腕に何個も時計をはめているのがよく見られた。ロシア人の婦人将校が、首から目ざまし時計をぶらさげているのを見たこともある。それまで時計というものを持ったことがないので、もうこれで十分だということがないのだ。ルーマニア人で時計がほしいと思う人は、ロシア軍宿舎に行って、盗品の時計を買わなければならなかった。自分の時計を買いもどすこともよくあることだった。そんなわけで、ルーマニア人が、ロシア軍の兵舎にはいるのは、珍しいことではなかった。地下教会の私たちにも、そこにはいるのに、時計を買うという、かっこうな口実があった。

ロシア軍の兵舎で説教する手始めに、私は、正教会の祝日である聖パウロと聖ペテロの日を選んだ。時計を買うふりをして、私は軍の基地に行った。一つの時計は高すぎる、もう一つは小さ

すぎる、あとの一つは大きすぎるとか言っているうちに、数人の兵士が回りに集まって来て、何か買ってほしいと言いながら私を囲んだ。私は、じょうだんのように彼らに尋ねた。「皆さんの中に、パウロとかペテロという名前のかたはいませんか」と。何人かいた。そこで私は言った。「きょうは、正教会では聖パウロと聖ペテロの祝日ですが、知っていますか。」少し年輩のロシア人は知っていた。「では、パウロとペテロはどういう人物か知っていますか。」だれも知らなかった。私は、パウロとペテロのことを話し始めた。年輩のロシア兵が口をはさんだ。「君は時計を買いに来たんじゃなくて、信仰のことを話しに来たんじゃないか。それなら、いっしょにすわって話してくれ。でも気をつけてな。警戒しなくちゃならない人はわかっている。私の回りにいるのは、みんないい人間ばかりだ。私が君のひざに手をのせたら、時計のこと以外話すな。手をはずしたら、またメッセージを始めてよろしい。」かなりたくさんの人が私を取りまいていた。そこで私は、パウロとペテロのこと、彼らが命をささげたキリストについて語った。時々、あやしいと思われる人が近づいて来た。兵士が私のひざに手をおくとすぐ、私は時計のことを話し始め、その男が立ち去ると、またキリストについて説いた。クリスチャンのロシア兵の助けを得て、何度も訪問がくり返された。多くの仲間の兵士がキリストを見いだし、何千部もの福音書がひそかにくばられた。

地下教会の兄弟姉妹は何人も逮捕され、ひどく打たれたが、裏切り者は出なかった。

こうして働いている間に、ロシアの地下教会から来た兄弟たちに会って、その経験を聞くという喜びが与えられた。まず第一に認められたことは、彼らのうちに、偉大な聖徒の風貌が備わっていることだった。共産主義の理論をつめ込まれてきたその年月。何人かは共産主義の大学を出たのだが、ちょうど魚が塩水の中に棲息しても、その肉がからくならないように、彼らは共産主義の学校を卒業しても、その魂は、キリストにあってきよくけがれなく保たれたのである。

これらのロシア人クリスチャンは、何と美しい心の持主であったことだろう！　「私たちがかぶっている帽子の槌と鎌についている星は反キリストの星です。」彼らがこのように言うとき、とても悲しそうだった。彼らは、ロシア兵の間で福音を伝える私たちの働きをよく助けてくれた。

彼らには、クリスチャンの徳がすべて備わっていたということができる。ただし、喜びという徳だけは別であった。回心のとき喜びをいだくが、その後、消えてしまうのだ。私はほんとうに不思議に思って、あるとき、ひとりのバプテスト信者に尋ねてみた。「喜びを感じないのですか。」すると彼はこう答えた。「私が熱心なクリスチャンであること、また祈りの生活を送り、魂をかちえようとしていることを、自分の教会の牧師に隠さなければならないのです。それでどうして喜べるでしょう。教会の牧師は、秘密警察の通報者なのです。私たちは、次々とスパイされ

ます。牧者がその群れを裏切るのです。私たちの心の奥底には救いの喜びがあります。でも、あなたがたのように、表面に現わす喜び――それは、もはや私たちには持てないものなのです。」

「キリスト教が私たちにとっては実に劇的なものとなりました。あなたがた自由諸国のクリスチャンがひとりの人をキリストにかちうると、平和に生きる教会の一員をかちうることになりますが、私たちがひとりをかちうると、その人は投獄されるか、あるいは子どもが孤児になる可能性が十分あることを知るのです。だれかをキリストに導いたという喜びには、いつも払わなければならない代価があるという思いがまじっています。」

私たちは全く新しい型のクリスチャンに会った。それは地下教会のクリスチャンである。彼らの間には数々の驚くべきことがあった。

クリスチャンであると信じている人の中にも、実はそうでない人が大ぜいいるように、無神論を信じているというロシア人の中にも、実はそうでない人が多くいる。

あるロシア人夫婦が私のところに来た。ふたりとも彫刻家である。神について私が話すと、彼らは次のように答えた。「いや、神は存在しないですよ。私たちは、ベズボシュニキー（無神論）です。でも、私たちに起こったおもしろい出来事をお話ししましょう。」

「スターリンの像を作っている時でした。仕事をしながら妻が私にこう尋ねました。『あなた、

親指っておもしろいわね。足の指のように、親指をほかの指の方に折り曲げることができなかったら、金槌も木槌も道具も本もパンも持てないわ。この小さな親指がなかったら、人間らしい生活はできないでしょうね。でも、だれが親指を造ったのかしら。あなたも私も学校でマルキシズムを習ったから、天も地も自然にできたことはわかっているわ。神様が造ったのではないわ。そう習って、そう信じている。でも、神が天と地を造らなかったとしても、親指だけ造ったとしたら、この小さな物のためだけでも、神はたたえられる値うちがあるわ。』

『電燈や電話や鉄道などを発明したエジソンやベルやスティーヴンソンなどを賞賛するけれど、親指を造った人をなぜほめないのかしら。エジソンも親指がなかったら何も発明できなかったでしょう。親指を造った神様を拝むのがいちばん正しいことだわ。』

夫のほうはとても腹を立てた。妻が何か利口そうなことを言うと、夫はたいてい怒り出すものだ。「ばかを言うな。神はいないって習ったじゃないか。この家だって、だれが聞いているかわからないんだぞ。困ったことになるかもしれない。神はいないってことを、今のうちによく頭にたたきこんで忘れてはいけない。天には、だあれもいないんだよ！」

「でも、これはもっと不思議なことだわ。先祖たちが愚かにも信じた全能の神が天にいるとしたら、私たちに親指があるってことは、ごく自然なことじゃないの。全能の神なら何でもできる

から、もちろん親指だって造れるはずだわ。でも、もし天にだれもいないのなら、私は、心から親指を造った『だれもいない』を拝むことにきめたわ。」

そこで彼らは、『だれもいない』の崇拝者となった。時がたつにつれ、彼らの『だれもいない』の信仰は増し加わって、親指だけでなく、星や子どもや、この世の美しいものすべてを造ったかたとして信じるようになった。

まるでこの話は、むかしアテネで聖パウロが、「知られざる神」を拝んでいる人たちに会ったときのようである。

この夫婦は、彼らが信じていたことは正しいと聞いて、非常に喜んだ。まことに天には「だれもいない」、目に見えないかた、霊なる神がおられる。愛と知恵と真理と力の霊なるおかたで、そのひとり子をさえつかわして十字架の犠牲にされるほど、彼らを愛される神がおられるのだ。

彼らはそうと知らずに神を信じていたのだった。私は、彼らをもう一歩踏み出させる――救いとあがないの経験に――という大きな特権にあずかった。

ある時、町でロシア人の婦人将校に会った。私は彼女に近づいて行って言った。「道で見知らぬご婦人に話しかけるのは失礼だとは存じますが、キリストについてお話ししたいのですが……。私は牧師で、まじめな話です。」

「キリストをあなたは愛していらっしゃる人ですって?」と彼女は聞いた。

「はい、心から」と私が答えると、彼女はいきなり私の腕の中に飛び込んで来て、何度も私のほおに接吻した。これは牧師としてたいへんな赤面のシーンとなってしまったので、通行人が、親戚同士だと思ってくれればよいがと願いながら、私も接吻を返した。

彼女は大声で「私もキリストを愛しています」と叫んだ。私は彼女を家に連れて帰った。全く驚いたことに、彼女はキリストについて何も知らなかった、ほんとうに名前のほか何も知らなかったということがわかった。それでキリストを愛していたのだ。彼が救い主であることも、救いがどういう意味なのかも知らなかったのである。どこで、どういうふうにしてキリストが生き、また死んだのかも知らなかった。キリストの教えも、その生涯も、伝道についても知らなかった。彼女は、心理学的に興味をそそられる人だった。ただ名前しか知らない人を、どうして愛することができるだろうか。

質問に答えて、彼女は次のように説明した。「子どものころ、アはアヒル、イはイヌ、ウはウシというように、絵を見ながら字の読み方を習いました。……高校生になった私は、自分の尊い務めは、共産主義の祖国を守ることだ、と教えられました。でも、尊い務めだとか、道徳とかいうものがどんなものかわからなかったのです。私には絵が必要だったのです。私たちの祖先は、

あらゆるこの世の美しいもの、ほめられるべきもの、真実なものを表わす絵を持っていました。私のおばあさんは、いつも絵に頭を下げて、これはハリストス（キリスト）というおかただと言っていました。それで私は、その名前そのものが好きになったのです。この名前は私にとってほんとうにリアルなものでした。この名前を口にするだけで、すばらしい喜びがあるんです。」

彼女の話を聞いているうちに、ピリピ人への手紙の中に、キリストの御名にすべての者のひざがかがめられると書いてあることを思い出した。反キリストが、世界から一時的に神の知識を消し去ることがあるいはできるかもしれない。しかし、単純なキリストという名に力があるのである。そしてこの名が人々を光に導くのである。

彼女は、私の家で、喜びをもってキリストを受け入れた。その名を愛してきた、そのおかたご自身が、彼女の心に住んでくださるようになったのである。

ロシア人と共に生きた一こま一こまは、詩情に富み、深い意味を含んでいる。

鉄道の駅で福音を伝えたひとりの姉妹が、求めている将校に私の住所を教えた。ある晩、彼が私の家にはいって来た。背の高いハンサムなロシア人中尉だった。

「何かお助けできることがあるでしょうか」と私は尋ねた。「光を求めて来たのです」と彼は答えた。私は、聖書の最も重要な部分を、彼のために読み始めた。彼は私の手にさわって言った。

「お願いですから、私を迷わせないでください。私は暗やみにおかれて来た国民のひとりです。これは、ほんとうに、まちがいなく、神のことばであるのか、言ってください。」私はまちがいないと答えた。彼は何時間も聞き入り、そして、キリストを受け入れた。

宗教上の問題で、ロシア人は決して上すべりで浅薄な人間ではない。宗教に反対して戦うにしても、あるいは宗教に賛成してキリストを求めたとしても、とにかく全精力を投入する。ロシアでは、クリスチャンがひとり残らず魂をかち取る宣教師だというのは、そういうわけなのだ。ロシアほど、福音宣教の働きのために色づいて実り多い国は世界中にないというのも、このためである。彼らに積極的に福音を伝え続けるならば、世界の方向を変えることができよう。

ロシアの国とその国民が、他の何よりも神のことばに飢えかわいているのに、たいていの人が、その負債を帳消しにして感じていないということは、まさに悲劇である。

ある時、列車の中で、ロシア人将校と向かい合ってすわった。キリストについて二、三分話したあと、彼の口から怒濤のように無神論の論議がほとばしった。マルクス、スターリン、ボルテール、ダーウィン、その他聖書に反発する引用文が次々に流れ出た。私に反論する余裕を与えなかった。ほとんど一時間しゃべりまくって、私に、神が存在しないことを確信させようとした。彼の話が終わった時、私は尋ねた。「神がいないのでしたら、なぜ困ったときに祈るのですか。」

彼は盗みの最中におどかされたどろぼうのように、どぎまぎして答えた。「私が祈るってことを、どうして知っているんですか。」私はもう彼をのがさなかった。「私が最初に質問したのです。なぜ祈るか、答えてください。」彼は頭をうなだれて、しぶしぶ肯定した。「前線でドイツ軍に包囲されたとき、私たちはみんな祈りました。どう祈ったらよいかわからなかったので、『神よ、母の霊よ』と言って祈ったのです。」――心を見られるかたの前には、きっとりっぱな祈りだったと思う。

ロシア人伝道は、多くの実を結んだ。

ピョートル（ペテロ）のことを思い出す。彼がロシアのどの監獄で死んだか、知る人はない。若い青年だった。二十才くらいだったろう。ロシア軍兵士としてルーマニアに来た彼は、地下集会で回心して、私に洗礼を願い出たのである。バプテスマが終わった時、私は、聖書の中で一番印象深い、またキリストに導かれる時に力があった聖句はどれかと尋ねた。

彼は、私が秘密集会でルカの福音書二四章を読んだとき、注意深く聞いたと言った。それは、イエスがエマオ途上のふたりの弟子に会った記事である。村に近づいた時、「イエスはまだ先へ行きそうなご様子だった。」ピョートルは言った。「私はイエスがなぜ先へ行きそうにされたか考えました。きっと弟子たちといっしょに泊まりたかったはずですのに。では、なぜ、もっと先へ

行こうとされたのでしょう。私の解釈はこうです。イエスは遠慮深かったのです。ほんとうに自分が望まれているかどうかを、はっきり確かめたかったのだと思います。そして、歓迎されていることがわかったとき、初めて彼は喜んで彼らといっしょに家にはいられました。共産主義者は礼儀を知りません。私たちの心に、精神に、暴力で押し入ります。朝早くから夜おそくまで、彼らの話を聞くことを強要します。学校で、ラジオで、新聞で、ポスターで、無神論の集会で、行く先々どこででもそうするのです。好むと好まざるを問わず、絶え間なく、神はいないという宣伝を聞かされます。イエスは私たちの自由を尊重されます。穏やかに戸をたたかれるのです。イエスは、その礼儀正しさによって私をかち取られたのです。」共産主義とキリストのあざやかなコントラストが彼を説得したのである。

イエスの人格に見られるこういう特徴に感銘を受けたロシア人は、彼だけではなかった（私は牧師でありながら、このように考えたことはなかった）。

回心してからのピョートルは、何度も身の自由と生命の危険を冒して、ルーマニアからロシアへキリスト教文書をひそかに持ち出して、地下教会を助けた。ついに彼は逮捕された。一九五九年に、彼が刑務所にいたことまではわかっている。彼は死んでしまっただろうか。すでに天に召されたか、地上で良い戦いを戦っているかわからない。今日、彼がどこにいるかは、神のみが知

っておられる。

彼と同じく、ただ救われたというにとどまらない多くの人がいた。ひとりの魂をかち得ることを決してやめるべきではない。しかし、それによって、あなたは半分の仕事をしたにすぎないのだ。キリストにかち取られた魂は、すべて魂をかち取る者にされなければならない。ロシア人たちは、回心しただけでなく、地下教会で宣教師となった。彼らは、キリストのためには、向こう見ずで大胆だった。彼らのゆえに死んでくださったキリストのために、自分たちにできることは取るに足りないことだ、といつも言っていた。

奴隷国家への地下伝道

私たちの働きの第二の分野は、ルーマニア人への地下伝道であった。

すでに共産主義者は仮面をぬいでいた。最初のうちは、教会の指導者を手なずけようといろいろ誘惑の手を使ったが、まもなくテロ行為が始まった。何千人もの人が逮捕された。ロシアでは前からそうであったように、私たちの間でも、ひとりの魂をキリストに導くことが劇的なことになり始めた。

後に、私自身投獄され、神がキリストに導くよう助けてくださった人々といっしょになった。キリスト信仰のゆえに、六人の子どもを残して監獄に入れられた人と同房になったことがあった。彼の妻と子どもたちは餓死寸前の状態にいた。彼はきっと再び会うことはないだろう。私は彼に尋ねた。「私があなたをキリストに導いたことによって、またそのために家族がこんな悲惨な目に会っていることで、私をうらんではいませんか。」彼は言った。「すばらしい救い主に導いてくださったことを、ことばでは表わせないほど感謝しています。ほかの生き方をしようとは思いません。」

新しい事態にあってキリストを宣べ伝えることはなまやさしいことではなかった。共産党政府のきびしい検閲の目をくぐり抜けて、数種のキリスト教パンフレットを印刷することに成功した。取り調べに対して、私たちは表紙に共産主義の創始者カール・マルクスの写真を印刷した小冊子を出した。本の題名には、「宗教は人民の阿片」とか、それに類したようなものにした。検閲官は、共産主義の本だと思って、許可の印を押してくれた。こういう本には、最初の数ページに、マルクス、レーニン、スターリンなどの、検閲官を喜ばせる引用文がいっぱいあり、そのあとに、キリストのメッセージを入れたのである。

地下教会と言っても、実際に、その全体が地下にもぐっているわけではない。氷山のように、

その働きの小部分は外で行なわれる。共産党の宣伝集会に行き、例の「共産主義」の小冊子を配布する。マルクスの絵を見て、共産主義者は、争ってその小冊子を買う。彼らが十ページぐらい読んで、ほんとうは神とキリストについて書いてあることがわかる。そしてそのころには、私たちは遠くまで逃げてしまっているのである。

新しい条件のもとでの説教も容易ではなかった。ルーマニア国民はひどく抑圧されていた。共産党政府は、みんなから何もかも取り上げた。農民からは畑と羊を、床屋や洋服屋からはその小さな店を取り上げた。資本家が没収されたばかりではない。ごく貧しい人も非常に苦しんだ。たいていの家で、家族のだれかが投獄されていて、極度の貧窮に陥っていた。人々は疑問に思った。「愛の神は、なぜこんなに悪が勝ち誇るのを許しておられるのだろう」と。

初代の弟子たちも、キリストが十字架につけられた金曜日、十字架上で「わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのですか」と主が叫ばれたとき、キリストを宣べ伝えるのは容易でなかっただろう。しかし、働きがなされたという事実は、それが神からのもので、私たちから出たものでないことを証明している。キリスト信仰は、このような疑問に解決を与えることのできるものである。

イエスは、哀れなラザロ――彼は死にかけ、飢え、その傷を犬になめられていたが、ついに御

使いがアブラハムのふところに連れて行った――のことを私たちに語られた。

地下教会の働きの一部が
地上でなされた状況について

地下教会の集まりは、個人の家や林や地下室など、できるところならどこにでも集まった。そこでは、ひそかに、しばしば地上活動の準備をした。共産党政府の下に、私たちは路傍伝道も企画した。だんだん危険が増し加わったが、この方法でなければ接することのできない多くの魂に近づくことができたのである。妻は活発にこの働きに携わった。幾人かのクリスチャンがそっと道ばたに集まり、歌い始める。美しい歌を聞こうとして人垣ができる。そこで妻がメッセージをするのだ。町の監視官が着くまでには、私たちはそこを去ってしまう。

他の場所で労していたある日の午後、妻はブカレスト市の大きなマラクサ工場の入口に立って、数千人の労働者を前にして説教した。神につき、救いについて語ったのである。翌日、この工場の労務者が、大ぜい共産主義者の不正に反抗したために射殺された。何と適切な時に、彼らはメッセージを聞いたことだろう！

地下教会であると言っても、私たちもバプテスマのヨハネのように、一般の人や役人たちに、あからさまにキリストのことを語った。

ある時、政府の建物の階段を、クリスチャンの兄弟がふたり、ゲオルギン・ディ首相に会見をするため急いで上った。彼らは、首相に、短時間のうちにキリストをあかしし、罪と迫害のわざを離れてキリストに立ち返るよう促した。この大胆なあかしのために、首相は彼らを監獄に送った。何年もあとに、首相が重病にかかった時に、彼らのまいた種が、ひどい苦しみを招いた福音の種が実を結んだのである。首相は重態になったとき、以前聞いたことばを思い出したのである。まことに聖書が言っているように、「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭い」のである。みことばが彼のかたくなな心を刺し貫いた。そして彼は、キリストに生涯を明け渡したのである。彼は罪を告白し、救い主を受け入れて、病床にあってキリストに仕え始めた。やがて彼は亡くなった。彼が新たに見いだした救い主のもとに行ったのは、ふたりのクリスチャンが進んで犠牲を払ったおかげだった。このような人たちが、今日の共産圏にいる典型的な勇敢なクリスチャンなのである。

このように、地下教会は、大きな集会や秘密集会で働いただけでなく、共産主義国の街路で、あるいは共産党政府の指導者の所で、大胆に、あからさまに福音を宣べ伝えたのである。そのた

めには、払うべき価があったが、その覚悟もあった。今日も地下教会は、犠牲を払う備えをしている。秘密警察は、地下教会を激しく迫害した。地下教会にこそ、唯一の有効な反抗力が残されていると認めたからである。もし妨害されなかったら、この種のレジスタンス、霊的反抗こそ、彼らの無神論思想の力をくつがえしたであろう。彼らは、悪魔のように自分たちに対する直接の脅威を感じた。キリストを人々が信じると、もはや、どうにでもなる理性のない者ではなくなることを見てとった。人を獄につなぐことはできるが、神への信仰を獄にしばりつけることはできないことも知ったのである。そこで、彼らはけんめいの戦いをいどんで来た。

共産政府の内部や秘密警察の中にも、地下教会の理解者やクリスチャンがいた。

クリスチャンを教育して秘密警察にもぐり込ませ、私たちの国で、最も憎まれ軽蔑された制服を着せた。それは、秘密警察の活動を地下教会に報告するためであった。地下教会の何人かは、信仰を隠して秘密警察にはいった。共産党の制服を着ていることで、家族や友人にさげすまれながら、ほんとうの使命について沈黙を守るのは簡単なことではない。しかも彼らは、よくその務めを果たした。実に大きなキリストへの愛であった。

私が路上で逮捕され、最も厳重な監視の下に置かれた時も、私の安否を知るために、ひとりのクリスチャン医師が秘密警察に加わった。秘密警察の医師として、全囚人の獄房に近づき、私を

見つける活動をした。友人はみな、彼が共産主義者になったと思って、彼を避けた。囚人服を着るよりも、むしろ虐待者の制服を身につけて歩き回ることのほうが、キリストのために払うもっと大きな犠牲である。

その医師は、私が奥の暗い獄房にいるのを見つけ、私がまだ生きていることを伝えた。投獄されて八年半の間、初めて私を見つけた友人である。彼のおかげで、私が生きているということが知れわたり、一九五六年、アイゼンハワー、フルシチョフによる和平会談の結果、囚人が釈放された時、クリスチャンが私の釈放を叫んだので、短い期間ではあったが私は自由にされた。

私を捜すためにわざわざ秘密警察にはいったクリスチャン医師がいなかったら、私の釈放はあり得なかったろう。彼は今、刑務所か墓の中にいるに違いない。

このような地下教会のメンバーは、秘密警察という身分を利用して、幾度も私たちに警告を与え、大きな助けとなった。今でも、秘密警察には地下教会のメンバーがいて、目前の危険からクリスチャンを守り、警告を与えている。共産党政府の高い地位についている人も何人かいる。彼らは自分のキリスト信仰を隠しながら、私たちをずいぶん援助している。今、彼らがひそかに仕えているキリストを、やがて天において公然と語れる日が来るであろう。とは言っても、地下教会の多くのメンバーは摘発され、投獄された。私たちにも、秘密警察に密告する「ユダ」がい

た。共産党政府は、むちや薬品を使い、脅迫とゆすりによって、兄弟の密告をする牧師や信者を捜そうとしたのである。

2　これよりも大きな愛はない

一九四八年二月二十九日まで、私はまだ地下で正式に伝道していた。それが起こったのは日曜日のことだった。――美しい日曜日、私は教会へ行く途中、路上で秘密警察に連行された。

聖書に出てくる「人を誘拐する者」がどんなことか、私は考えたことがあるが、共産主義が、その意味を私たちに教えてくれた。

当時、大ぜいの人がこのようにしてさらわれて行った。秘密警察の運搬車が目の前で止まったかと思うと、四人の男が飛び出して来て私を車に押し込んだ。こうして私は何年も捕われの身となったのである。八年間というもの、私が生きているか死んでいるか、だれも知らなかった。妻は秘密警察の訪問を受けた。彼らは釈放された同房の囚人を装い、私の葬式に列席したと話した。妻は悲嘆にくれた。

そのころ、あらゆる教派、教会から、何千という人が投獄された。牧師ばかりではない、信仰

のあかしをした素朴な農民や、若い青年男女までがつかまった。刑務所は満員だった。共産圏の国ではどこでもそうであったように、ルーマニアでも、投獄されることは拷問を受けることを意味したのである。

拷問は、時に身の毛のよだつようなものであった。私が経験したことを、多くは語りたくない。それは、夜、眠れなくなるからだ。それほど悲痛な経験なのである。

『神の地下にて』というもう一冊の本に、獄中で神と共にあったときの私たちの体験をすべて詳しくしるしている。

筆舌に尽くせぬ拷問

フロレスキュー牧師は、赤く焼けた鉄火箸とナイフで拷問された。また、激しく打ちのめされた。それから、彼の獄房に、腹をすかせられたねずみが、太いパイプから送りこまれた。彼は眠ることもできず、ずっと身を守り続けなければならなかった。ちょっとでも休むと、たちまちねずみが襲いかかってくるからだ。

彼は二週間、昼夜立ち通しを強制された。共産主義者は、兄弟を裏切ることを強いたが、彼は

がまん強く抵抗した。ついに彼らは、十四才の息子を連れて来て、父親の前でむちで打ち始めた。彼らの意に従うまで打ち続けるぞと言いながら――。きのどくな牧師は半狂乱になった。力の限り忍耐したが、もうこれ以上耐えられないと思って、息子に向かって叫んだ。「アレクサンデル！　彼らの思うように話すよ！　おまえが打たれるのを、もうがまんできないんだ！」息子は答えた。「おとうさん、裏切り者を親に持つなんて、不公平なことをぼくにしないで！　しっかりして！　もし彼らがぼくを殺せば、『イエスさまよ、祖国よ』と言って死にます。」共産主義者は、かっとなって子どもを打ち殺してしまった。刑務所の壁に血が飛び散った。少年は神を賛美しながら死んだ。愛する兄弟フロレスキューはこれを見てからは別人のようになってしまった。

内側にとがった釘のついた手錠が私たちの手首にはめられた。びくとも動かなかったら釘は刺さらないが、極寒の獄房で寒さに身ぶるいしても、手首が釘で裂かれるのだ。

クリスチャンはロープで逆づりにされ、ぶらんこのようにからだが揺れるほど強打された。また、「冷凍房」と言われる、冷たい霜と氷が内部をおおう冷蔵室にぶち込まれた。私自身、全くの薄着でほうり込まれたことがある。監獄つきの医師が、のぞき穴から見張っていて、凍死の症状が現われ始めたら合図をする。看視人が飛び込んで来て私たちを引き出し、暖める。すっかり暖まったと思うと、たちまちまた冷蔵室に入れて凍らせる――それを何度も何度もくり返すので

ある。とかしては、また死の一、二分前まで凍らせる。そしてまた外に出してとかす。これが終わることなく続いた。今でも、私は、冷蔵庫をあけるのに耐えがたい感じがすることがある。

私たちクリスチャンは、自分よりほんの少し大きい木箱に入れられた。動く余地が全然なかった。箱の中には、八方にとがった釘が何本も出ており、またかみそりのように鋭い金属が箱についていた。じっと動かずに立っていればだいじょうぶだった。私たちは、何時間も何時間もこの箱の中に立たされた。疲れてふらっとでもしようものなら、たちどころに釘がからだに突き刺さるのだ。筋肉を動かしたりねじったりすると——恐ろしい釘が責めて来た。

共産主義者がクリスチャンにしたことは、およそ人間の頭脳で考え得る可能性の範囲を越えたものである。

共産主義者がクリスチャンを拷問にかけているところを見たことがあるが、虐待者の顔は、恍惚とした喜びに輝いていた。彼らは、クリスチャンにリンチを加えながら、「おれたちは悪魔だ」と叫ぶのだった。

私たちが戦うのは、血肉に対してではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たちに対してである。共産主義が人間から出たものでなく、悪魔から出たものであることが私たちにはわかった。霊的な権力、悪魔の力である。さらに偉大な霊的な威力、すなわち、神の霊によってのみ

対抗できるのである。

拷問者に向かって私はよく尋ねた。「あなたがたには、あわれみの心というものはないんですか」と。彼らは、たいていレーニンのことばを引用して答えた。「卵のからを割らなければオムレツは作れない。こっぱを散らさなければ、木は切れない。」私は言った。「レーニンのことばは、私も知っています。でも、そこには違いがあります。木を切るのに、木は何も感じません。でも、あなたがたは人間を扱っているのです。ひと打ちごとに痛みがあり、そのために泣く母親がいるのです。」こう言ってもむだだった。彼らは物質主義者だ。彼らには、物質以外に何物も存在しない。人間も、彼らにとっては木や卵のからと同じなのである。このような信念をもって、彼らは信じがたいほどの残虐性の底に沈んで行くのである。

無神論の持つ残酷さは信じがたい。人間が善の報いと悪の罰を信じないなら、もはや人間性を持つ理由はないのだ。人間のうちに潜む悪の深みに陥ることに何のためらいも感じない。共産主義の拷問者はよくこう言った。「神は存在しない。死後の世界もない。悪に対する刑罰はない。おれたちは好きなことができるんだ。」拷問者のひとりがこう言うのさえ聞いたことがある。「おれの信じていない神に感謝するよ。心の中にある悪いことを何でも言えるようになった今の時まで生かしてもらったことをよ。」彼は信ずることができないような残虐行為と拷問を囚人たちに

加えた上で、こう言ったのである。

わにが人間を食ったら悲しい。でも、このためにわにをとがめることはできない。しょせんわにはわにであって、道徳的な存在ではないからである。同様、共産主義者を責めることはできない。共産主義が、彼らの道徳観を破壊してしまったからである。事実、彼らは、あわれみの心など持たないことを自慢しているのである。

私は彼らから次のことを学んだ。彼らの心にイエスを受け入れる余地がないように、私も自分の心のうちに悪魔を入れるどんな小さな余地も持つまいと決心した。

私は合衆国上院の国内安全保障に関する小委員会で証言したことがある。そこで私は、クリスチャンが、四昼夜、十字架にかけられたままでいた、という恐るべきことを語った。十字架は床に置かれて、何百人もの囚人は、十字架につけられた人々の顔やからだの上で用を足さなければならないのだった。そのあと、十字架をもう一度立て、共産主義者は「お前たちのキリストを見よ！　なんて美しいおかただ！　妙なる香りを天からもたらした！」とからかい、あざけった。ある主教が、気も狂いそうになるほど拷問にかけられた末、人間の排泄物と尿とを神にささげて、クリスチャンに聖餐を授けるよう強要されたことも私は語った。これは、ピテシチのルーマニア刑務所で起こったことである。私は、あとでこの主教に、こんなあざけり事に荷担するくら

いなら、どうして死んでしまわなかったかと尋ねた。彼は答えた。「どうか私をさばかないでください！　私はキリスト以上に苦しんだのです。」聖書に描かれている地獄もダンテの地獄篇にある苦しみも、共産政府の監獄の拷問に比べれば物の数ではない。

以上は、ビテシチの刑務所で日曜日に起こったごく一部分にすぎない。ほかのことについては、ただお話をすることが不可能である。そういう経験について、くり返して話すと気が変になりそうだし、とてもひどいことで、わいせつな事がらもあるので書き表わせない。しかし、こうしたことは、キリストにあるあなたの兄弟たちがくぐりぬけて来たことであり、今もまた体験しつつあることなのである！

ほんとうに偉大な信仰の英雄のひとりに、ミラン・ハイモビシイ牧師がいた。

刑務所は満員で、看視人は私たちの名前も知らなかった。獄内の規則を破ったかどで、二十五か所のあざを作るむち打ちの刑を受けるためにひとりの人が呼び出された。ミラン・ハイモビシイ牧師は、何回も数えきれないほど、他の人の代わりにむち打ちの刑を受けに行った。これによって、彼は囚人たちから尊敬をかち得た。それは自分自身だけでなく、彼が代表するキリストのためにも——。

共産主義者の恐怖と、クリスチャンの自己犠牲について全部を語り続けようとすれば限りがな

い。拷問のことだけが知られているのではない。英雄的な行為の模範が、自由な身分の兄弟たちに多くの励ましを与えたのである。

私たちの働きびとの中に、地下教会の若い女性がいた。彼女がひそかに福音書をくばり、子どもにキリストのことを教えているのを秘密警察が見つけた。彼らは、彼女を逮捕することを決めた。しかし、その逮捕をできるだけ苦痛に満ちたものにするため、彼女が結婚をする当日まで、二、三週間逮捕を延期したのである。結婚式の日が来て、彼女は花嫁衣裳で着飾った。若い女性の、生涯で最もすばらしい喜びの日！　突然、ドアが押し開かれて、秘密警察がなだれ込んだ。

花嫁は、秘密警察を見ると、両腕をさし伸ばして手錠をかけられた。彼らは荒々しく彼女の手首に手錠をはめた。彼女は愛する人の方を見た。そして鎖にロづけして言った。「結婚式の日に、主が私にくださったこの宝石を、天の夫なる主に感謝します。キリストのためにふさわしい者とされたことを感謝します。」彼女は、泣いているクリスチャンと花婿をあとにして引かれて行った。若いクリスチャンの女性が、共産党政府の看視人の手にかかるとどうなるかを、彼らは知らされたのである。五年後、彼女は釈放された――めちゃくちゃにされ、三十才もふけて見える女になっていた。花婿はその間ずっと待っていた。彼女は、キリストのためになすことのできる最低のことです、と言った。こういうすばらしいクリスチャンが地下教会にいるのである。

洗脳とはどんなものか

欧米の人々は、朝鮮戦争や、今はベトナムでの洗脳のことを聞いたことがあるだろう。私も洗脳を受けたが、拷問の中でもこれが一番恐ろしかった。

何年間も、一日に十七時間すわって次のことばを聞かされるのである。

共産主義はすばらしい！
共産主義はすばらしい！
共産主義はすばらしい！
共産主義はすばらしい！
キリスト教はばかげている！
キリスト教はばかげている！
キリスト教はばかげている！
やめろ！
やめろ！

やめろ！

やめろ！

一日に十七時間――毎日、毎週、毎月である。

何人かのクリスチャンから、どうやって洗脳に抵抗できたのかと尋ねられた。洗脳に抵抗する方法はたった一つしかない。それは「洗心」である。イエス・キリストの愛によって心がきよめられ、心から主を愛しているなら、どんな洗脳にも抵抗できる。愛する花婿のために、花嫁が何かしてあげられないことがあるだろうか。愛に満ちた母親が、子どものために、これはしてやれないということがあるだろうか。幼子のキリストを腕に抱いたマリヤが愛したようにキリストを愛するなら、また花嫁が花婿を愛するようにイエスを愛するなら、こういう拷問にも耐えぬくことができるのだ。

神は、私たちがどのくらい忍耐したかによってさばかれない。どれだけ神を愛することができたかによってさばかれるのである。私は、共産政府の刑務所で、クリスチャンは愛することができることを見た証人である。彼らは、神と人とを愛することができた。

拷問と残虐行為は、とどまることを知らなかった。私が、意識を失ったり、あまり目がくらくらしてしまって、もうそれ以上告白の望みがない状態になると、獄房に帰された。そこで私は看

護も受けず、半死半生の状態で横たわり、少し力が出て来るのを待った。そしてまた、拷問にかけられるのだった。多くの人がこのあたりで死んだが、私の力はいつも何とか持ち直した。次の何年かの間に数回移った刑務所で、背中の椎骨とほかの骨を何本も折られた。十二か所ほどからだをけずられ、さらに十八か所も、焼かれて穴をあけられた。

オスローの医者は、これをすべて見て、また肺結核の跡も見つけて、私が今日生きているのはまさしく奇蹟だと言った。医学によれば、私は何年も前に死んでいるはずだということだった。私も奇蹟だということを認めている。神は奇蹟の神だ。神は、私が鉄のカーテンの下にある地下教会を代表して叫ぶ声となり、あなたがたがその声を聞くことができるよう、この奇蹟を行なわれたのだと私は信ずる。神はひとりびとりが、苦しみにある忠実な兄弟たちからのメッセージを声を大にして叫ぶために、生きて出て来ることを許されたのである。

つかの間の自由——再び逮捕

一九五六年になった。それまで八年間、私は刑務所にいた。ずいぶん体重が減り、みにくい傷跡がふえた。乱暴に打たれ、けられ、あざけられ、飢えさせられ、抑圧され、ふらふらにさせら

れ、脅迫され、軽視された。以上のどれも、私を捕えた人が求めていた結果は生み出さなかった。そこで失望してしまい、私を釈放することにした。私の投獄に対する抗議がまだ出されていたのである。

たった一週間、私はもとの位置に許されてもどった。その間、二回説教した。すると、彼らは私を呼び出して、二度と説教してはならない、どんな宗教的な活動にも携わってはいけないと言った。——私は何と説教したのだろう——。教区のクリスチャンをカウンセリングして、「忍耐だよ、忍耐だよ、忍耐しなさいよ」と言ったのである。すると警察は、「忍耐しなさい。そうすればアメリカ人が来て救ってくれると彼らに言っているようなものだ」と、私に罵声を浴びせた。私はまた、車輪は回り、時代は変わって行くとも言った。すると、彼らは、「お前は、共産党政府の支配は長続きしないと言っているんだ！　革命と矛盾するうそだ！」と叫ぶのだった。そういうわけで、私の公の伝道は終わりを告げた。

おそらく政府は、私が反抗することに恐れを感じて、地下伝道をもう行なわないと信じたのだろう。そこが彼らのまちがいだった。私は、ひそかにもとやっていた働きにもどった。家族が応援をしてくれた。

再び私は、信頼できる人々の保護の下に、まるで幽霊のように出没しながら、忠実な人々の隠

れたグループにあかしをした。今度は、私の傷跡が、無神論者の悪についてのメッセージを証拠づけ、またふらふらしている魂が、神を信じ、勇敢になるよう励ますことに役立った。私は、神の摂理によって盲目にされた共産主義者の監視の下にあって、福音を伝えるために互いに助け合っている伝道網を指導した。結局、人が神の働いておられる御手を見ることができないほど盲目になれば、おそらく伝道者の働きの価値もわからないだろう。

ついに、私の動静を終始うかがっていた警察の監視の目に報いがあった。再び私は摘発され、投獄された。今度は、どういうわけか、家族を投獄しなかった。たぶん、私のことが広く知れ渡っていたせいだろう。それまで、獄中生活八年半、そしてかなり自由な三年間があった。今また、獄中に五年半の年月をすごすことになったのである。

第二回目は、いろいろな点で、第一回目の投獄の時より悪かった。何が待っているか、私は十分に承知していた。健康状態もすぐに悪化した。しかしなお、私たちは地下の共産政府の刑務所で、地下教会の地下伝道を続けた。

取り引きしたこと――説教をし打たれたこと

囚人たちに説教することは、厳重に禁止されていた。これが見つかった者はだれでも、激しく打たれることを覚悟していた。私たち数名は、説教する特権のために犠牲を払う決心をした。そして彼らの条件を受け入れた。それは取り引きだった。私たちが説教し、彼らが私たちを打ちたいた。説教をして、私たちは幸福だった。彼らは私たちを打って喜んだ。それでみながしあわせだったのである。

次のような光景が何度くり広げられたか思い出せないほどである。ひとりの兄弟が説教をしている。そこへ突然、看守が飛び込んで来て、話半ばの彼をおどかす。彼を廊下に引きずり出し、「殴打室」に連れて行く。際限ないと思われるほど打ちたたいたのち連れ戻され、――血まみれになって傷ついた――そのからだを獄房の床にたたきつける。そろそろと彼は打ちのめされたからだを起こし、痛そうに服をただしながら言った。「さあ、兄弟たち、どこまで話したところで止められたのだったかな」と、福音のメッセージを続けるのだった。

私は美しいものをそこに見た！

時に、説教者は信徒であった。聖霊によって霊感を受けた普通の人が、しばしばりっぱに説教をした。そのことばには、全心がこめられていた。というのは、徴罰を覚悟の上で説教するのは、軽々しくできることではなかったからである。そうすると看守が来て説教者を連れ出し、半死半生になるまで殴打するのである。

ゲルラの刑務所で、グレクーというひとりのクリスチャンが撲殺刑の判決を受けた。処刑の期間が一週間も続いた。ほんとうに期間をかけて少しずつ打たれたのである。ゴムのこん棒で足の裏を一度打たれてそのままにしておかれ、数分後、もう一度打たれ、さらに数分したらもう一度たたかれるというぐあいであった。睾丸も打たれた。そして医者が注射をした。彼が回復し、体力を取り戻すために、とてもよい食事が与えられた。それから、また打たれた。徐々にくり返し打たれて、ついに彼は死んだ。この拷問を指揮したのは、レックという共産党中央委員であった。

ある時が来ると、きまったように、レックは、共産主義者がしばしばクリスチャンに向かって言うことばを吐いた。「おれは神だぞ。お前たちの生涯の死を支配する力を持っているのだ。天にいる者も、お前たちの命を守ることを決定するわけにはいかない。何もかも、おれしだいなんだ。おれの望みなら、お前たちは生きる。そうでなければ殺される。おれこそ実に神だ！」この

ように彼はクリスチャンをののしった。

グレクーは、このような恐るべき状況の下で、レックに、とてもおもしろい答えをした。レック自身の口からあとになって聞いたことだが、グレクーはこう言ったのである。「あなたがどんなに意味深いことを言っているか、あなたにはわからないでしょうね。あなたは、ほんとうに神なのです。いも虫はみな、ちゃんと成長すればちょうになります。あなたは拷問者や殺し屋になるように造られたのではありません。神に似た者となるように造られているのです。イエスは当時のユダヤ人に言われました。『あなたがたは神です』と。神のいのちがあなたの心の中にあるのです。使徒パウロのように、あなたのような拷問者が大ぜい、時が来れば、人間が残虐行為を犯すのは恥ずべきことであり、自分たちにももっとりっぱなことができるのだ、ということに気がつくのです。そして神の性質にあずかる者となるのです。レック、私の言うことを信じてください。あなたの真の召命は、神に似た者となることなのです。拷問者になることではないんですよ。」

その時のレックは、ちょうどタルソのサウロが、目の前で殺されたステパノの麗しいあかしに何ら注意を払わなかったように、この犠牲者についてあまり気にとめなかった。しかしレックは、後になって、これこそ彼の真の召命だと悟ったのである。

共産主義者の殴打と拷問と虐殺のすべてから、一つの大きな教訓が引き出された。それは、霊が肉体の主であるということだ。拷問に会うとき、しばしば私たちは拷問そのものを現実として感ずる。しかし、それも、キリストの栄光と、私たちと共にある主の臨在とに溶かされた霊からは、何か遠く離れているような気がしたのである。

一週に一枚のパン、一日にいっぱいのにごったスープが与えられたときにも、私たちは忠実にその十分の一をささげる決心をした。十週間目が来ると、一枚のパンを主に対する十分の一のささげ物として、弱い兄弟にさし出した。

あるクリスチャンが死刑に処せられた。処刑の前、彼は妻と面会することを許可された。彼が妻に残した最後のことばは次のようだった。「私を殺す人たちを、私は愛しながら死んで行くのだということを覚えておいてほしい。彼らは何をしているのかわからないのだ。最後にお願いしたい。お前も彼らを愛しなさい。愛する夫を殺すからと言って、彼らをうらんだりしないように。天国でまた会おう。」この面会に立ち合い、ふたりの会話を聞いた秘密警察官は深い感銘を受けた。あとになって彼はそのことを話してくれた。彼は、クリスチャンになるために、その刑務所に配属されたようなものであった。

チルグーオクナの刑務所には、マッチェビシーという年若いクリスチャンがいた。彼は十八才

で投獄され、拷問のために結核にかかって重態になった。何かの方法で、心配な彼の健康状態が家族に伝わり、ストレプトマイシン百本入りのビンをさし入れた。それさえ飲めば、死を免れることができるのだ。刑務所の行政官は、彼を呼び出し、包みを見せて言った。「ここにお前の命を救う薬がある。囚人が、家族からの小包みを受け取ることは許されていない。私個人としては、お前を助けたいのだ。お前はまだ若い。刑務所で死なせたくないんだよ。同房の囚人たちの情報をくれないか。そうしたら、この小包みを渡しても、上官に言いわけができるんだ。」マッチェビシーは、間髪を入れずに答えた。「私は、自分の顔を鏡に映して、そこに裏切り者の顔を見るくらいなら、生きていたくありません。そんな条件は受け入れられません。死んだほうがましです。」彼は手を振って言った。「なかなか感心だ。違う答えは期待していなかったよ。だがね、もう一つ提案があるんだ。囚人が何人かスパイになった。共産主義者になると言って、お前のことも密告したんだ。彼らは二つの役割を持っているわけだが、どうも信頼がおけない。どのくらいまじめにやろうとしているか知りたいんだが。彼らはお前にとって裏切り者だね。お前たちが言ったことやしたことを密告して、お前たちの立場をひどく不利にしているんだ。お前が仲間の気持ちを裏切りたくないという気持ちはわかる。どうかね。お前たちの敵になっている者たちのスパイをやってくれないか。そうしてくれれば、おまえの命は助けてやるよ！」マッチェビ

シーは、一度目の時と同じようにすぐに答えた。「私はキリストの弟子です。キリストは私たちに、敵をも愛せよと教えられました。私たちを裏切る人たちは、確かに私たちにとって大きな痛手ですが、悪をもって悪に報いることができません。彼らが哀れです。私は彼らのために祈ります。私は共産主義者とは何の関係も持ちたくありません。」マッチェビシーは、行政官といっしょにその会見の場からもどって来て、私のいた獄房で息を引き取った。私はその臨終に立ち会ったが、彼は神をほめたたえながら死んで行った。愛は、だれでもが持つ生への渇望さえ征服したのである。

貧乏人で大の音楽ファンがいるとする。その人は、コンサートに行くためには、ふところに残った最後の銅貨まで使ってしまうものである。彼は無一文になっても不満を感じない。美しい音楽を聞いたからだ。

私は刑務所で何年もの年月を失ったことを不満とは思わない。私はそこで、一見弱々しく目立たない人々と生活を共にした。それはとりもなおさず、偉大な聖徒たち、第一世紀のクリスチャンにまさるとも劣らない信仰の勇者たちと獄中生活をわかちあうという特権にあずかったことである。彼らは喜んでキリストのために命を捨てた。このような聖徒、信仰の勇者たちの霊的な麗しさを、とても書き表わすことはできない。

この本で私が述べることは例外でないのである。地下教会のクリスチャンにとっては、超自然的なことが自然になっているのだ。

地下教会は、初めの愛に立ち返った教会である。刑務所に投ぜられる前にも、私はキリストを深く愛していた。しかし、獄中で「キリストの花嫁」――キリストの霊的なからだ――を見たからには、キリストご自身を愛すると同じほど深く地下教会を愛していることを告白したい。その麗しさ、その犠牲の心にふれたからである。

妻と息子に起こったこと

私は妻から引き離されて連行された。その後、彼女の身の上がどうなったか知るよしもなかった。何年も後になって、私は、彼女も投獄されたことを聞いた。獄中では、クリスチャンの婦人は、男の人よりも苦しい目に会う。若い女性は、横暴な看守に暴行される。彼らの嘲弄とわいせつなことは身の毛がよだつばかりであった。婦人も、建造中の運河で強制労働をさせられ、男子と同量の仕事をしなければならない。冬でも土掘りをさせられた。売春婦たちが監督になり、まじめな囚人に競ってリンチを加えた。妻は、命をつなぎとめるために牛のように草を食べた。運

河のねずみやへびが、空腹をかかえた囚人の食物になった。日曜日がくると、看守たちの楽しみがあった。それは、婦人たちをダニューブ川に投げ込み、女釣りをするのだ。彼女たちを笑いものにし、そのぬれたからだを嘲弄し、また川に放り込み、釣り上げる。こうして、私の妻もダニューブに放り込まれた。

私の息子は、両親が連行されてから、路頭に迷う者となった。ミハイは、幼い時からとても信仰深く、信仰に関することに深い関心を持っていた。やがて九才という時、父母が連行されたため、彼はクリスチャンとしての生涯の危機を通った。彼は冷ややかになり、信仰のすべてに疑惑をいだいた。その年令では、普通の子どもが経験しないような問題をかかえていた。彼は、自分の生活費をかせぐ心配をしなければならなかったのである。

クリスチャン受難者の家族を助ける者は、刑罰を受けた。私の息子を助けたふたりの婦人は、あとで逮捕されてひどく打たれ、十五年後の今でもびっこを引いている。生命の危険を冒してミハイを家に入れてくれたひとりの婦人は、囚人の家族を助けたというかどで十八年の刑に服した。彼女は歯を全部抜かれ、骨を何本も折られて二度と働けなくなり、人生の無能力者となってしまった。

「ミハイ、イエスを信じなさい！」

ミハイは十一才で、一般の労働者として、生活のために働き始めた。苦難によって彼の信仰に動揺をきたした。しかし、妻が投獄されてから二年たつと、ミハイとの面会が許された。彼は共産党政府の刑務所に行き、鉄格子をはさんで母親と面会した。母はやせてうすよごれており、手にたこができていた。みすぼらしい囚人服を着た母の姿を、彼はほとんど見わけられなかった。母は口を開くと、「ミハイ、イエスさまを信じなさい！」と言った。看守はカンカンになって怒り、彼女をミハイから引き離して連れ去った。ミハイは、引きずられて行く母親を見ながら泣いた。これがミハイの回心の瞬間であった。彼は、こんな状況の下でも、キリストが人から愛されるかたなら、このかたこそまことの救い主であることを知ったのである。後に彼はこう言った。「母が信じているという事実以外に、キリスト教に何らよい論証がないとしても、ぼくにはそれで十分だった」と。その日、彼は心からキリストを受け入れた。

学校でのミハイの生活は、絶え間のない戦いの連続だった。良い生徒だというので、ほうびに赤ネクタイ――ＹＣＰ（共産主義青年同盟）の会員のしるし――をもらったことがあった。息子

は、「父や母を投獄したような人たちのネクタイは絶対しません」と言った。そのため退校処分になった。一年遅れてから、彼は、クリスチャン囚人の息子だという事実を隠して、もう一度入学した。

しばらくすると、聖書に反駁する論文を書かなければならないことになった。その論文の中で、彼はこう書いた。「聖書に対する反論には力がなく、聖書を反駁する引用文は不真実です。確かに、この教授は聖書を読んでいません。聖書は科学と調和しています。」彼は再び退校になった。このときは、二年も遅れてしまった。

やがて神学校に学ぶことを許された。ここで習ったのは「マルキスト神学」、何でもかんでも、カール・マルクスの理論によって説明されるのだ。ミハイは、教室で公然と抗議した。他の学生も同調した。その結果は退校になり、神学の勉強は終了できなかった。

あるとき学校で、教授が無神論のスピーチをした。息子は立ち上がり、このように大ぜいの青年を迷わせた教授の責任を追及した。クラス全体が彼の側に立った。だれかがまず立って語る勇気を持つことが必要だったのである。教育を受けるためには、彼は、自分がクリスチャン囚人のウォムブランドの息子であるということをいつも隠さなければならなかった。しかし、それはしばしば露見して、校長室に呼びつけられて退校になるという場面がくり返された。ミハイも激し

い飢えに苦しんだ。共産国の投獄されたクリスチャンの家族は、たいてい餓死寸前の状態に追い込まれていた。彼らを助けるのは、大きな罪となっていたからだ。

私が個人的に知っている家族で、苦しみに会った人たちの場合を一つだけお話ししよう。地下教会の働きのために、ひとりの兄弟が刑務所につながれた。妻と六人の子どもがあとに残された。十九才の長女と十七才の次女は職につけなかった。共産国で仕事をくれる唯一の機関は国家であるから、「犯罪者」のクリスチャンの子どもには、何も仕事を与えないのである。どうか、これからの話を、常識的な道徳規準で判断しないでいただきたい。そして、事実だけを受けとめていただきたい。このクリスチャン受難者のふたりの娘は——ふたりともクリスチャンであったが——幼い弟たちや病身の母親を養うために売春婦になった。十四才になる弟は、それを知ったとき気が狂ってしまい、収容所に入れられた。何年もたって、刑務所につながれた父親が釈放されて帰って来たとき、彼のささげたただ一つの祈りは次のようであった。「神さま、私をもう一度投獄してください。こんなことを見るに忍びません。」彼の祈りは聞かれた。彼は子どもにキリストをあかしたというかどで、再び刑務所に入れられた。彼の娘たちは、ただ売春婦だけでとどまらず、秘密警察の命令に応じることによって職を得た。スパイになったのである。彼女たちはクリスチャン受難者の娘として、どの家でも尊敬をもって迎えられる。そこで聞いた話を、

逐一秘密警察に報告するのである。このことを醜悪で不道徳だと――もちろんそのとおりだが――言って、それだけですませてもらいたくない。こういう悲劇が起こるということ自体、また、こんなクリスチャンの家族が、自由なあなたがたの何の助けも受けないで放置されていることが、あなたがたの罪ではないのか、ということを自問していただきたいのである。

3　自由諸国での働きのために

前後十四年間の獄中生活が終わった。この間ずっと、聖書も他の本も一冊も見たことがなかった。字の書き方さえ忘れてしまったほどである。ひどい空腹のため、また麻酔と拷問のために、聖書のことばも思い出せなくなった。十四年の服役期間が終わる日に、次の聖句が、忘却のかなたから心に浮かび上がって来た。「ヤコブはラケルのために十四年間働いたが、彼女を愛していたので、ほんのわずかの間に思われた。」

その直後、私はルーマニアの一般恩赦によって釈放された。その恩赦は、アメリカの世論に影響されるところが大きかったのである。

妻に再会した。彼女は、十四年間、忠実に私を待っていてくれたのである。極度の貧困の中に、私たちは新しい生活を始めた。逮捕された者は、いっさいを没収されるからだ。

釈放された主教や牧師は、小さな教会を持つことができた。オルソバの町の教会が私に与えら

れた。共産党の異端担当部門――キリスト教を彼らは異端と呼ぶ――から、この教会には三十五人の会員がいるが、絶対にひとりでも会員をふやしてはならない、と警告された。また、私が彼らのエイジェントになって、全会員の動静を秘密警察に報告すること、青少年は参加させてはならないことを命令された。これが、共産党政府が教会を彼らの抑制の「道具」として使うやり口である。

説教すれば、たくさんの人が聞きに来ることはわかっていた。しかし私は、公の教会では少しも働きを始めなかった。再び地下教会で、この働きのすばらしさと危険を味わいながら働いたのである。

私が刑務所にいた年月の間、神はすばらしい働きをしておられた。地下教会は、まだ捨てられ、忘れられてはいなかった。アメリカや他の国のクリスチャンが、私たちを助け、私たちのために祈り始めてくれたのである。

ある地方の町で、私は、ある兄弟の家で、午後少し休んでいた。その兄弟が私を起こして言った。「海外から兄弟たちが来られました。」西欧にも、私たちを忘れないで、また捨て去ることをしないクリスチャンがいたのである。

多くのクリスチャンが受難者の家族を援助したり、キリスト教文書や援助物資をひそかに持ち

込む秘密活動を組織した。

他の部屋で、この働きをするためにやって来た六人の兄弟に会った。彼らは私といろいろ話をした。しばらくすると、彼らはこの所番地に、十四年間牢獄にいた人がいるはずだから会いたいと言った。私が、自分がそうですと言うと、彼らは言った。「私たちは、その人はきっと憂うつな顔をした人だろうと想像して来ました。あなたがその人であるはずはありません。だって、あなたは喜びにあふれておられます」と。投獄されていたのは、ほんとうに私であること、喜んでいるのは、あなたがたがはるばる来てくれたことによって、私たちが忘れられていないことを知ったからであるとくり返して答えた。着実に定期的な援助が地下教会に来るようになった。秘密のルートを通して、多くの聖書やキリスト教文書、またクリスチャン受難者の家族への援助を受け取ることができた。現在では、こういう助けによって、私たちの地下教会は、以前よりもずっとよく働くことができるようになった。

これは、彼らが神のことばを私たちに送ってくれたという事実以上の意味があった。私たちは、愛されているということを知ったのだ。彼らが慰めのことばをもたらしてくれたのである。洗脳を受けた数年間にくり返し聞かされたことは、「もうだれもおまえを愛してはいない」ということばであった。しかし、今や、アメリカやイギリスのクリスチャンが、命をかけて私たちを

愛してくれることをまのあたりに見たのだ。私たちからの忠告を取り入れながら、彼らは秘密伝道の技術を開発して行った。彼らは、秘密警察に包囲された家に忍び込むことさえした。警察は、彼らがはいったことを知らなかった。このような方法で秘密のうちに持ち込まれた聖書の価値を、聖書の中を泳いでいるようなアメリカやイギリスのクリスチャンに理解できるはずはない。

海外で祈ってくれたクリスチャンからの物質的援助がなければ、私と私の家族はとても生き延びることができなかったろう。共産圏諸国で地下活動に携わっている牧師や受難者の多くが同様に助けられた。私自身の体験から、イギリスのヨーロッパ・クリスチャン・ミッションからさし伸べられた物質的援助、それにまさる精神的援助がいかに大きかったかをあかししたい。私たちにとって、彼らは、神から送られた天使のようであった。

新しく始まった地下教会の働きのために、私はまた逮捕の危険にさらされた。そのころ、二つのキリスト教団体、すなわち、ユダヤ人伝道のノルウェー・ミッションとヘブル人クリスチャン・ミッションが、私のために二千五百ポンドの身代金を払ってくれた。そのため、私はルーマニアを去ることができたのである。

なぜ共産圏のルーマニアを去ったか

たとい危険はあったとしても、もし地下教会の指導者たちが、この機会に国を離れ、自由世界への地下教会の声となることを命令しなかったら、ルーマニアをおそらく出ることはなかったろう。西欧のあなたがたに、彼らの名によって、その苦悩と必要について語ることを望まれたのだ。私は西にやって来たけれど、心は彼らと共にある。地下教会の苦しみと勇敢な働きを語ることの重要性を悟らなかったら、私はルーマニアを去ることは絶対にしなかったろう。この使命のために、私は国を出たのだ。

ルーマニアを出る前、私は秘密警察に二度呼び出された。彼らは、私の身代金を受け取っていると言った。(ルーマニアは、市民を金で売るのである。それは、共産主義によってもたらされた経済危機を乗りきるためであった)。彼らは言った。「西へ行って、好きなだけキリスト教の説教をしなさい。ただ、われわれのことには触れるな。われわれに不利なことばをひとことも言ってはいけない。ここで起こったことをお前が話すようなことをしたら、どうするかはっきり言っておこう。まず五百ポンドでギャングを雇ってお前を逮捕することができるということ、また、

お前の若いころの女性関係や盗みなどのうわさをまいて、社会的に抹殺してしまうことができるということだ。(事実、私と同房になったことがある正教会のヴァシル・レウル監督は、オーストリヤでかどわかされてルーマニアに連れられて来ていた。彼は、つめを全部はがされた。ベルリンからさらわれて来た人たちといっしょになったこともある。最近、ルーマニア人が、イタリヤやパリから誘拐された)。

こうして私を脅迫してから、彼らは西欧に出るのを許可してくれた。彼らは、私が経験した洗脳の力に強い確信を持っている。西欧に、私と同じ経験をして来た人たちがいるが、彼らは沈黙を守っている。共産主義者の拷問を受けたあとでも、共産主義を賞賛している人さえいる。共産党政府は、私も同じ沈黙を守ることを堅く信じていた。

こういうわけで、一九六五年十二月、私は家族を連れてルーマニアを出た。国を離れる前にした最後のことは、私の逮捕命令を出し、何年にもわたる拷問を命じた陸軍大佐の墓をたずねることだった。私は彼の墓に花をかざった。これによって、私は、霊的に全く空虚な共産主義者たちに、キリストの喜びをもたらす献身を表明したのである。

私は共産主義者の組織を憎むが、その下にある人々を愛している。罪は憎むが、罪人は愛するのだ。私は、全心を尽くして共産主義者を愛する。共産主義者はクリスチャンを殺すことができ

るが、自分を殺す者さえ愛するクリスチャンの愛まで殺すことはできない。共産主義者に対して、また私の受けた拷問について、うらんだり、憎らしいと思う気持ちを、私は持っていない。

4　キリストの愛によって

ユダヤ人の間に、次のような伝説がある。ユダヤ人の先祖がエジプトから救い出され、エジプト人が紅海で溺死したとき、御使いたちがイスラエル人といっしょに勝利の歌を歌った。すると、神は御使いに言われた。「ユダヤ人は人間だから、敵の手から免れたことを喜ぶこともできるだろう。でも、あなたがたは、もっと思慮深いと私は思う。エジプト人も、私が造ったものではないか。私が、彼らも愛しているとは思わないのか。エジプト人の悲劇的な破滅を私が悲しんでいることが、どうしてわからないのか。」

ヨシュアがエリコの近くにいた時、目を上げて見ると、そこに、抜き身の剣を手に持って、彼の方を見おろして立っている人がいた。ヨシュアはその人のところに近づいて言った。「あなたは、私たちの味方ですか。それとも私たちの敵なのですか」（ヨシュア五・一三）。

ヨシュアの出会った人が、ただの人間だったら、その答えはただ、「あなたの味方です」とか

「あなたの敵です」とか、あるいは「中立です」と言うだけだったろう。しかし、ヨシュアの会ったかたは、別の世界から来られたかただったので、イスラエルの味方か敵かと尋ねられた時、最も予期しがたい、しかも理解しがたい答えをしたのである。「いいえ」と。この「いいえ」とは、どういう意味なのか。そのかたの属する領域では、敵味方というものはなく、すべての人がすべてのことについて、あわれみと同情と燃える愛をもって理解し合っているのである。

人間的な標準がある。この標準で、共産主義に対して徹底的に戦わなければならない。また、この標準で、共産主義者とも戦わなければならない。彼らこそ、この残酷獰猛な思想の支持者だからである。

しかしクリスチャンは、ただの人間以上のものである。神の子、神の性質にあずかるものである。それで、共産党政府の刑務所で耐え忍んだ拷問のあとにも、私が共産主義者を憎むようにはならなかったのである。彼らも神に造られたものである。どうして彼らを憎むことができよう。しかし、私は彼らと友だちにもなれない。友情とは、ふたりの胸の内が一つ思いになるということを意味する。私は共産主義者と一つ思いにはなれない。彼らは神の概念を憎悪し、私は神を愛しているからである。

「あなたは、共産主義者の味方ですか、反対者ですか」と問われたとしたら、私の答えは複雑

であろう。共産主義は、人類にとっての最大の脅威である。私は徹底的に共産主義に反対し、それがくつがえされるまで戦いを続けたいと願っている。しかし、霊においては、私は、天の祝福の座にイエスと共にすわっているのである。「いいえ」の領域にいるのである。そこは、共産主義者たちが犯したすべての犯罪行為にもかかわらず、理解され、愛されている領域である。すべての人がキリストに似るという人生の目標に達するのを助けようと、天使がつとめている領域である。したがって、私の目標は、共産主義者に福音を伝え、永遠のいのちのよいニュースを知らせることである。

私の主であるキリストは、共産主義者を愛しておられる。彼ご自身が、すべての人を愛しておられ、九十九匹の正しい羊をおいてでも、一匹の迷った羊が失われてしまうことをよしとされなかったおかたである。使徒たちも、世々のキリスト教の偉大な教師たちもみな、主の御名による、このすべての人に及ぶ愛を教えた。セント・マカリイはこう言った。「人がもし、全人類を熱愛しているといいながら、あるひとりの人だけは愛せないというなら、その人はもはやクリスチャンではない。なぜなら、その人の愛が、すべての人を含む愛でないからだ。」アウグスティヌスもこう教えている。「もし全人類が正しい人間であり、たったひとりだけ罪びとがいたとしても、キリストは世に下り、このひとりの人のために、同じ十字架を忍ばれたに違いない。主は

かくもひとりびとりを愛しておられるのだ。」キリスト教の教えは明確である。共産主義者は人間であって、キリストは彼らを愛しておられる。キリストの思いを持つひとりびとりもまた、彼らを同様に愛するのである。私たちは罪を憎み、罪びとを愛するのだ。私たちは、共産主義者に対して私たち自身が持つ愛によっても、キリストの彼らに対する愛を知るのである。

私は、共産党政府の刑務所で、五十ポンドもある鎖を足につけられ、焼け火箸の拷問を受けた後、のどにスプーンでむりやりに塩を詰め込まれ、のみ込んではいけないと命じられ、水も与えられず、空腹で、むち打たれ、寒さにふるえながらも、なお熱心に共産主義者のために祈っている何人かのクリスチャンを見た。とても人間的には説明のつかないことである。これこそ、私たちの心に注がれたキリストの愛でなくて何であろう。

あとになって、かつて私たちを拷問にかけた共産主義者が投獄されてきた。共産主義の下では、共産主義者、あるいはその指導者といえども、彼らの敵と同じ扱いを余儀なくされることがある。拷問をした者とされた者とが同房になった。クリスチャンでない人たちが、以前の尋問者に憎悪を示し、打ちたたいたりする中にあって、クリスチャンは、自分も打たれたり、共産主義者とぐるだと非難されたりすることを恐れず、彼らをかばうほうに回った。クリスチャンが最後に残った一枚のパン（当時は一週に一枚のパンしかもらえなかった）を、今は同囚の身である病

気の共産党拷問者に与え、また命をとりとめる薬を与える姿を見た。

獄死したクリスチャンのイウリウ・マニウ元ルーマニア首相の臨終のことばは次のようだった。「もし共産党政府が、この国で権力を失墜した場合、すべてのクリスチャンの聖なる義務は、町に出て行き、暴力をふるった共産主義者たちを、民衆の義憤から、命をかけてかばうことである。」

回心して数日の間は、私はもうこれ以上生きていられないように感じたものだ。町を歩いていると、通りすがりのひとりびとりの男の人、女の人のことを考えて、胸が痛くなるのを覚えた。あの人は救われているだろうか、救われていないだろうかという疑問で、胸をナイフで刺されるような気がした。メンバーがひとりでも罪を犯すと、私は何時間も泣いた。すべての魂が救われるようにと願う熱望が私の心に宿った。共産主義者もその例外ではなかった。

孤独な獄中では、私たちは以前ほど祈ることができなかった。私たちは、想像もつかないほど空腹だったし、白痴になるぐらい麻酔をかけられ、まるで骸骨のようにふらついていた。主の祈りでさえ、私たちには長すぎて、全部祈るだけの集中力がなかった。何度も私がくり返して祈ったただ一つの祈りは、「イエスさま、あなたを愛しています」というひとことだった。

ある輝かしい日、私は主イエスからの答えをいただいた。「わたしを愛しているというのか。

では、わたしがどのようにあなたを愛しているか見せてあげよう。」一瞬、私の心に、太陽のコロナが吹き上げて燃え盛る炎のようなものを感じた。エマオ途上で、弟子たちは、イエスが話しかけられたとき、心が燃えたと言った。私たちすべてのために十字架にかかり、いのちをささげられたかたの愛を私は知った。このような愛は、いくら共産主義者の罪が深いと言っても、それを締め出すことはできないものなのである。

共産主義者は恐ろしい罪悪を犯し、現在も犯し続けている。しかし、「多くの水も愛の火を消すことはできない。洪水もそれを溺死させることはできない。愛は死よりも強い。」死がすべての人をのみ込むことを主張するように——金持ちも貧乏人も、若い人も老人も、すべての民族、あらゆる国の人々、どんな異なった政治的信念を持つ人も、聖徒も犯罪者も——愛もまたすべての人を抱擁するのである。人となられた愛なるキリストは、共産主義者をかち得るまで、決して愛することをやめられない。

ある牧師が私たちの獄房に放り込まれた。彼は半死半生だった。顔にもからだ中にも血が流れていた。恐ろしく打たれたのである。私たちは彼を洗った。何人かの囚人が、共産主義者をのろった。彼はうめきながら、「お願いだから、のろわないでください。だまってください。彼らのために祈りたいのです」と言った。

獄中にいて、どうして喜ぶことができたか

十四年間の獄中生活をふり返ってみると、とてもうれしい時もあった。他の囚人たちや看守でさえ、なぜ、最悪の環境の中でクリスチャンは喜んでいられるのかを、しばしば不思議がった。私たちは、賛美を押えることができず、打たれることがわかっていても歌った。うぐいすも、歌を歌い終わったら殺されることがわかっていても、やっぱり歌うだろうと想像する。獄中のクリスチャンは、喜びのあまり踊り出すこともあった。こんな悲壮な状況にありながら、どうしてそんなに幸福になれるのだろうか。

私は、獄中にいて、イエスが弟子たちによく言われた次のことばを思いめぐらした。「あなたがたの見ていることを見る目は幸いです」と。その時、弟子たちは、パレスチナをめぐる旅から帰って来たばかりであった。彼らは、その旅で恐るべきことを見たのである。パレスチナは抑圧された国だった。どこに行っても、専制政治の下敷きになった人民の悲惨きわまる状態が見られた。弟子たちは、病気、疫病、飢餓と悲しみにぶつかった。彼らは、愛国者たちが、泣いている両親や妻を残して、牢獄に引かれて行った家々にはいった。それは、見て麗しい世界ではなかっ

た。

にもかかわらず、イエスは、「あなたがたの見ていることを見る目は幸いです」と言われた。それは、彼らが苦しみだけを見たのではなかったからである。すべての人の救い主を見、人類が最後に到達する目標である、最もよきことの完成者であるかたをも見たからであった。最初は、葉の上をはっている醜い毛虫やいも虫も、時が来れば、そのみじめな姿は変わり、多彩な美しいちょうになり、花から花へ飛び回ることができるのだということを、初めて悟ったのである。この幸福は、私たちのものでもあった。

私の回りには、何人ものヨブがいた。ヨブより激しい苦しみを受けた人たちが何人もいた。しかし私は、ヨブの話の結末を知っている。彼は以前所有していたものの二倍を受けた。空腹で、治療を受けることもできない、おできだらけの、貧乏人ラザロのような人も大ぜいいた。でも、私は、御使いが、彼らを全部アブラハムのふところに携え上げてくれることを知っていた。私は未来図を通して彼らを見たのである。私のそばにいる、みすぼらしい、汚れた、弱々しそうな受難者の中に、さん然と輝く冠をいただいた、あすの聖徒の姿をかいま見たのである。

こういうふうに人を見ているうちに——今の姿でなく、将来の姿を見て——タルソのサウロのような迫害者の中にもまた、未来の聖パウロを見いだすことができた。そして、何人かは、すで

にそのようになっている。私たちがあかしした秘密警察の将校の何人かはクリスチャンになって、後に、キリストを見いだしたことのゆえに喜んで苦しみを受けるようになった。私たちをむち打った看守の中にも、聖パウロをむち打ったが、後に回心したピリピの看守のような可能性を見たのである。まもなく彼らが、「救われるためには、何をしなければなりませんか」と尋ねてくれることを夢みた。排泄物をなすりつけられたクリスチャンが十字架に縛りつけられているのを見ながら嘲弄している人々の中に、あのゴルゴタの群衆が、後に自分たちの犯した罪を恐れて胸を打った姿を思い見たのである。

共産主義者も救われるという希望を見いだしたのは、獄中においてであった。彼らに対する責任を強く感じるようになったのも同じ場所だった。彼らから拷問を受けている間に、私たちは彼らを愛することを学んだのである。

私の家族は、大部分が虐殺された。その虐殺者が回心したのは、私の家においてであった。一番ふさわしい場所であったと言えよう。私が、共産主義者へのクリスチャンの使命について考えたのも、同様に、共産党政府の刑務所であった。

神は、ちょうど人間がありと違った見方をするように、私たちと違った見方をされる。人間的に見れば、十字架につけられ、排泄物を塗りつけられるということは、ぞっとするほどいやなこ

とである。しかし、聖書は、殉教者の苦しみを「軽い患難」と呼んでいる。十四年の獄中生活と言えば、私たちには長期間である。聖書はそれを、やがて私たちの上にもたらされる測り知れない栄光までの一時的なことと言っている。このことから、私たち人間にとって、許すことができないような、徹底的に、正統な戦いをしなければならないと思う共産主義者の悪質な犯罪が、神の御目からは私たちの目で見るより軽く見えることなのだと想像する立場を与えてくれる。すでに半世紀も続いて来た彼らの専制も、千年も一日のようである神の前には、おそらくあやまてる一瞬にすぎないのだろう。彼らには、まだ救われる可能性があるのだ。

天のエルサレムは母であり、母のごとく愛するものである。天の門は、共産主義者の前に閉じられていない。光も彼らのために消されていない。他の人たちが、だれでもできるように、彼らも悔い改めることができるのだ。だから、私たちは彼らに悔い改めを勧めなければならないのである。

愛のみが、共産主義者を変えることができる。(ただし、この愛は、多くの教会の指導者によって行なわれている共産主義との妥協とはっきり区別されなければならない)。憎しみは人を盲目にする。ヒトラーは反共産主義者であったが、彼らを憎悪した人であった。そのため、彼らを征服する代わりに、世界の三分の一を彼らが獲得するのを助けたのである。

私たちは、愛をもって、獄中での共産主義者への伝道を計画した。

私たちが最初に考えたのは、共産主義政治を支配している人たちのことだった。宣教団の指導者たちは、教会史を学んだことがないように見える。どのようにしてノルウェーがキリストにかち取られたか。オラーフ王をかち得たことによってである。ロシアは、王リューリックがクリスチャンになったとき、初めて福音を受け入れた。ハンガリーも王ステパノを獲得して、キリストにかち取られた。ポーランドもしかりである。アフリカでは、部族の首長がキリストに導かれると、部族全体が従った。りっぱなクリスチャンになっても、影響力があまりない、物ごとの状態を変えることのできない、ただの兵隊に伝道するミッションはあるが、影響力のある人へ伝道するミッションはない。

役人や、政界、経済界、科学の分野、芸術家の中から大物を得なければならない。彼らは人を動かす技術者なのだ。彼らは人々の心を形造る。こうした人々をかち得るなら、彼らが指導し、影響を及ぼしている人々を獲得するのだ。

宣教の観点から言えば、共産主義には、他の社会組織にない利点がある。中央集権が最も強いことである。アメリカの大統領がモルモン教に改宗しても、アメリカ全体がモルモン教になることはないだろう。しかし、毛沢東主席がキリスト教に回心したら——あるいはブレジネフやコー

シェスカが――その国全体に福音が及ぶであろう。指導者の与えるショックは大きいからである。

でも、共産政府の指導者たる者が回心できるだろうか。できる。彼とても、犠牲者と等しく、不幸で不安定なのだ。ロシアの共産党指導者のほとんど全部と言ってもいいくらい、刑務所で一生を閉じるか、同志に射殺されるかしている。中国でも同様である。全権を手中に把握しているかと思われた、イアゴダ、イエホフ、ベリアなどの内務大臣たちですらこの前の対抗革命の時と同じような最期を遂げた。首に小銃弾を打ち込まれて最期を遂げたのである。最近は、ソビエト連邦の内務相シェベリン、ユーゴスラビアの内務相ランユビークが、よごれたぼろ布のように捨てられた。

どうしたら共産主義を霊的に攻撃できるか

共産主義の制度は、だれも幸福にすることができない。その制度によって暴利をむさぼっている人たちですら、いつ、いかなる日に、党の方針が変わったという理由で、秘密警察の護送車に連れて行かれるかわからないで、びくびくしているのだ。

私は共産主義政府の指導者を個人的に何人も知っている。彼らは、過重の重荷を負った人たちだ。彼らに休みを与えることができるのは、主イエスおひとりだけである。

共産主義の支配者をキリストにかち得ることは、とりもなおさず、世界を核による壊滅から救い、現在多額の経費が軍備に注がれていることによる飢饉から人類を救うことができるということである。また、それは、国際緊張を終結させることにもなる。彼らがかち取られれば、キリストと御使いたちは喜びにあふれるであろう。それは、教会の勝利を意味する。ニューギニアとか、マダガスカルのような、宣教師が懸命に労苦しているさまざまな地域も、共産主義の指導者がクリスチャンになったら、ただそれだけのことで、あとに続く者が起こるだろう。なぜなら、そのことによって、キリスト教に全く新しい推進力が与えられるからだ。

私は、回心した共産主義者を個人的に知っている。若いころは、私も闘争的な無神論者だった。回心した無神論者や元共産主義者は、キリストを多く愛する。なぜなら、それだけ彼らは罪も多く犯しているからである。

宣教師の働きには、戦略的な考察が必要である。救いという視点から見れば、すべての魂は同等であるが、宣教の戦略の視点から見れば同等ではない。後には何千という人々に影響を及ぼす人を得るほうが、ジャングルの中のたったひとりの野蛮人に救いを得させるように語りかけるよ

りも重要である。だからイエスは、その宣教を小さな村で終わらせず、世界の霊的本部エルサレムにおかれたのである。同じ理由で、パウロもローマに行き着くことを急いだのである。

聖書は言っている。「彼は、おまえの頭を踏み砕き……」と。私たちはへびのおなかをくすぐり、笑わせているのだ。へびの頭は、どこかモスクワと北京の真中あたりにあり、チュニスやマダガスカルにはない。教会の指導者、宣教団の議長、思慮深いクリスチャンひとりびとりにとって、共産圏の世界が重大な関心の的とならなければならない。

私たちは習慣的にやっている働きをやめるべきだ。「主のみわざをおろそかにする者は、のろわれよ」と書かれている。教会が、正面から霊のほこ先を共産主義に向ける必要があるのだ。戦争に勝つのは、攻撃的戦略によるのであって、防御の戦略によるのではない。共産主義に対し、教会は、今までいつも防衛の立場をとって来た。そして、諸国を次から次へと共産主義のために失って来たのである。教会全体が、ただちにこの態勢を変えなければならない。詩篇に、神は「鉄のかんぬきを粉々に砕かれた」とある。鉄のカーテンも、神には物の数ではない。

初代教会は、法律に反しても、秘密裡に伝道をした。そして勝利を得た。私たちも同じようなやり方で働くことを学ばなければならない。

共産主義政府の時代が来るまで、私は新約聖書の人物が大ぜいあだ名で呼ばれている理由がわ

からなかった。ニゲルと呼ばれたシメオンとか、マルコという名のヨハネとかいうふうに。私たちも、今共産圏における伝道では、秘密の名を使っているのである。イエスが最後の晩餐を用意したいと思われたとき、住所を告げないで、「町にはいると、水がめを運んでいる男に会うから……」と言われたことが、以前よくわからなかった。今はわかる。地下教会の働きでは、秘密の確認サインを使うからだ。

このようにして働くことに同意すれば――初代キリスト教の方法に立ち返って――共産圏の国でキリストを効果的に伝える働きができるのだ。しかし、欧米の教会指導者に会ってみてそこに見いだしたものは、共産主義者への愛ではなく――もしこの愛があれば、とうの昔に共産圏諸国への宗教活動の組織ができていたであろう――かえって、共産主義者の側につく方針であった。カール・マルクスの家の失われた魂への、よきサマリヤ人の同情心は見つからなかった。

人は信条の中で唱えるから信じていると言えるのでなく、いのちをかける用意のある場合、信じていると言えるのである。地下教会のクリスチャンは、信仰のためには、いつでも死ぬ用意があることを証明した。現在も続けている私の働きは、つかまったら最後、再入獄と拷問と死を意味するのである。というのは、私は、あらゆる危険を冒して鉄のカーテン下の秘密宣教団を指導しているからである。私は、文字通りこのことを覚悟している。

私には、こういう質問を発する権利がある。共産主義の友だちになっているアメリカの教会の指導者たちは、彼らの信条のために死ぬことも辞さないだろうか。彼らが、欧米での高い地位を捨てて東欧に行き、正式の牧師になり――そこで――共産主義者と協力するのを、だれが妨げているのだろうか。このような信仰のあかしを、欧米の教会指導者から、まだ見せてもらったことがない。

人間のことばは、人間が共通の狩猟や漁獲の場で、後には、生活必需品の共同生産の場で、互いに理解するため、あるいは互いの感情を表現するための必要から生まれたものである。神の神秘と霊的生活の高嶺を適切に表現している人間のことばはない。同じように、悪魔の残虐性の深みを言い表わせることばもない。ナチによって炉に投げ込まれようとする人や、自分の子どもが炉に投げ込まれるのを見た人の感情をことばに表わすことができるだろうか。だから、クリスチャンが共産主義の下に苦しんでいる様子をいくら描き出そうとしてもむだなのである。

私はルクレチウ・パトラスカヌという男と同房になったことがある。彼は、ルーマニアに共産主義の権力を台頭させた男である。彼の同志たちは、彼に投獄という報いをした。彼は正気だったのに、狂人といっしょに精神病院に放り込まれ、ほんとうに狂人になってしまった。元のルーマニアの大臣、アンナ・パウカーにも同様な処置を行なった。クリスチャンも、これと同じよう

な型の扱いをたびたび受けた。電気ショックを受けるために、ずん胴のジャケットを着せられるのだ。

中国の街路で起こっているニュースを聞いて、世界中が震え上がった。人々の見ている前で、赤の警備兵がテロ行為をやるのである。だれも見ていない中国の刑務所で、クリスチャンに何が起こっているか想像していただきたい。最近のニュースでは、有名な中国の福音的な著作家や他のクリスチャンが、信仰を取り消すことを拒んだために、両耳、舌、両足を切断されたという。

しかし、共産主義者が行なう最悪のことは、彼らが人間の肉体を責めさいなみ、殺すことではない。彼らは人間の思いを徹底的に裏切り、青少年や子どもを毒することをする。教会の指導的地位に彼らの犬を置き、クリスチャンを指導させ、教会を破壊する。若い人たちに、神やキリストを信じないようにと教えるばかりか、そういう名前を憎むことを教え込む。何年にもわたる獄中生活を終えて家に帰って来たクリスチャン受難者が、いつのまにか戦闘的無神論者になっていた子どもから、あざけりをもって迎えられるという悲劇を、何と言って言い表わすことができようか。

この本は、インクで書かれたというより、こういう心の張り裂けるような経験をした人々の血で書かれたものであると言える。

ただし、あのダニエルの時代に、三人の青年が炉に投げ入れられて助け出されたとき、火のにおいがついていなかったように、共産政府の刑務所にいたクリスチャンも、共産主義者に対する憎しみの色を見せない。花を踏みにじると、花は香りを放ってお返しをする。共産主義者にさいなまれたクリスチャンも、同じように、拷問に対して愛をもって報いる。私たちは看守を何人もキリストに導いた。私たちは、ただ一つの望みに支配されている。それは、私たちを苦しめた共産主義者に、私たちが持っている一番よいもの、すなわち私たちの主イエス・キリストから来る救いを与えることである。

私は、同じ信仰を持つ多くの兄弟のように、獄中で殉教の死を遂げる特権にあずからなかった。釈放され、しかも、ルーマニアを出て西欧に来たのである。そして、欧米の教会で多くの指導者のうちに見いだしたものは、鉄のカーテン、竹のカーテン下の地下教会を圧倒的に支配しているものとは全く反対の感情だった。欧米の多くのクリスチャンには、共産主義者への愛はない。その証拠に、彼らは共産圏の人々の救いのために何一つしていない。ユダヤ人への伝道団、回教徒への宣教団、仏教徒へのミッションがある。また、一つの教派から他の教派へ変わるようにクリスチャンを説得するミッションもある。しかし、共産主義者への宣教団は一つもない。彼らを愛していないからだ。愛していれば、ケアリが愛するインドのために、またハドソン・テー

ラーが愛する中国人のために、りっぱな宣教団を作ったように、もうずっと前にすぐれた宣教団を作り上げているはずである。

しかし、彼らは共産主義者を愛さず、彼らをキリストに導くために何もしないというだけにとどまらない。自己満足と怠慢によって、さらには実際に共犯行為をすることによって、共産主義者の忠誠を強化育成しているのだ。共産主義者が欧米の教会に侵入して来て、教会と社会で指導権を得る手助けをしている。彼らは、クリスチャンが共産主義の危険を悟らないようにしているのである。

共産主義者を愛さず、彼らをキリストにかち取るために何もしない――初代のクリスチャンが、ネロ皇帝に福音伝道の許可を願ったときと同じように、彼らは、許可されないからと言って何もしない――だけでなく、自分の群れも愛してはいないのだ。なぜなら、共産主義者をキリストにかち取らないならば、彼らは欧米をも征服し、そこにあるキリスト教をも根こそぎにしてしまうだろうからだ。

歴史の教訓は無視されている

第一世紀には、北アフリカでキリスト教が繁栄していた。そこから、聖アウグスティヌス、聖キプリアヌス、聖アタナシウスやテルトリアヌス等が出た。北アフリカのクリスチャンは、ただ一つだけ義務を軽んじた。それは、回教徒をキリストにかち取るという義務である。その結果、回教徒は北アフリカを侵略し、キリスト教を根こそぎにして何世紀にも至っている。今でも北アフリカは回教徒のもので、キリスト教の宣教団から「非回心地域」と呼ばれている。

歴史から何かを学びとろうではないか！

宗教改革の時には、フス、ルター、カルヴィンの宗教上の関心が、当時の圧政者、経済的権力の保持者である法王のくびきを取り除きたいというヨーロッパ諸国民の関心と一致した。今日もそれと同様に、共産主義者とその犠牲者の両方に福音を伝えようという地下教会の関心と、自由を保持したいと願う自由主義陣営諸国民の強い関心とが一致しているのだ。

共産主義をくつがえすことのできる政治力は存在しない。共産主義者は核を所有しているから、軍事的に彼らを攻撃することは、とりもなおさず、新しい世界戦争を始めることを意味し、

何億もの犠牲者を出すということになる。さらに、西欧の多くの支配者たちは、洗脳されていて、共産主義政府の支配者を失墜させたいとも思っていない。彼らはしばしば、麻薬中毒、暴力、ガン、結核がなくなるようにと希望するが、これらのもの全部よりずっと多い犠牲者を出すと言われている共産主義がなくなるようにとは言わない。

ソビエトの作家、イリア・エーレンブルグはこう言っている。スターリンが、一生何も他のことはしなくても、ただ彼の支配下の罪のない犠牲者の名前を書き連ねてみるだけでも、足りないだろう、と。フルシチョフは、共産政府の第二十回議会でこう言った。「スターリンは、正直で罪のない共産主義者を何千人も粛清した。……第十七回の議会で選ばれた中央委員会の百三十九人のメンバーと候補者のうち、七十パーセントに当たる九十八人が、後に逮捕されて、射殺された！」

クリスチャンに対してスターリンが行なったことを想像してみていただきたい。

フルシチョフはスターリンを否認したが、彼も同じことをやり続けた。一九五九年以来、そのころまでまだ開かれていたソビエト・ロシアの教会の半数が閉鎖された。

中国では、スターリン時代よりももっとひどい残虐な傾向が強くなっている。公の教会生活は完全に中止されている。ロシアやルーマニアでは、新たな逮捕が続いている（ロシアでクリスチ

ャンの集団逮捕があったというニュースを今受けたばかりである)。

総人口一億の国々で、青少年層は、脅迫と欺瞞によって、すべて西欧に関すること、特にキリスト教に関することへの憎悪を吹き込まれて成長しているのである。

教会の前に役人が立って子どもたちを見張っている風景はロシアでは珍しくない。教会に行っているのを見つけられると、平手打ちをくらって放り出される。こうして、西欧のキリスト教の未来の破壊者が、注意深く、組織的に育て上げられて行くのである。

共産主義をくつがえすことのできる力がただ一つある。それは、かつてローマ帝国を、クリスチャン政府が支配したのと同じ力である。また、荒っぽいチュートン族や海賊をクリスチャンにし、血なまぐさい宗教裁判をひっくり返した力と同じ力である。この力とは福音の力であり、すべての共産圏諸国に散在している地下教会によって代表されている。

この教会を支え助けるのは、ただ単に苦しんでいる兄弟たちと一つにされるということだけではない。それは、あなたがたの国、あなたがたの教会の生死がかかっているのである。この教会を保持することは、自由諸国のクリスチャンが関心を持つというところにとどめず、自由陣営諸国の政策とすべきである。

地下教会は、すでに共産政府の支配者をキリストにかち取った。ルーマニアの首相、ゲオルギ

イ・ディは罪を告白し、罪深い生活から変えられて、回心者として死んだ。共産主義の国にも、共産政府の要員の中にも、隠れたクリスチャンがいる。このような勢力は広がって行く。そして、ある共産政府の政策には真の変化を期待することができるであろう――それは、チトーやゴムルカがもたらしたような変化ではない。彼らのあとに残酷な無神論主義の党による同様な専制が続いたのだから――、それは、キリスト教信仰と自由への転回である。

またとない好機が、今おとずれている。

クリスチャンが、その信仰において真剣であるように、共産主義者が、その信念において真剣であるのをしばしば見かける。しかし、彼らは、いま大きな危機を通過している。

彼らは、共産主義は、諸国の人々を同胞にすると、ほんとうに信じていた。しかし今や、彼らは、共産主義諸国がお互いに犬のようにけんかしているのを見ている。彼らは、共産主義は、いわゆる絵にかいた天のパラダイスとは違って、地上のパラダイスを作るのだと信じ込んでいた。しかるに、現在、彼らの諸国民は飢えており、資本主義諸国から小麦を輸入しなければならない。

共産主義者たちは、彼らの指導者を信頼していた。現在、彼らの新聞を読むと、スターリンは集団虐殺者、フルシチョフはまぬけ（あるいは白痴）と書いてある。ラコシ、ゲロ、アンナ・パ

ウカー、ランコビシィなどの国家的英雄もしかりである。共産主義者たちは、もう指導者の無謬性を信じない。彼らは、まるで法王のいないカトリック信者のようなものである。

共産主義者の心には空虚感がある。この空洞は、キリストによってしか埋められない。自然の人間の心は、神を尋ね求める。人間の中には、キリストによって満たされるまでは、霊的な真空がある。共産主義者にもこのことは当てはまる。福音には、彼らにも訴えることのできる愛の力がある。私はそれが起こるのをこの目で見て来たので、それが可能であることを知っている。共産主義者に嘲弄され、拷問を受けたクリスチャンは、自分や家族に対してなされたことを忘れ、許している。彼らは、共産主義者たちが今の危機をくぐり抜けてキリストへの道を見いだすことができるように、ベストを尽くして助けているのだ。この働きのために私たちの助けが必要なのである。

このことのためばかりでなく、クリスチャンの愛は、常にすべてに及ぶものである。クリスチャンには、分けへだてはない。イエスは、神が太陽を、よい者にも悪い者にも上らせると言われた。クリスチャンの愛についても同じことが言える。

欧米のクリスチャン指導者で、共産主義者に友情を示した人は、敵をも愛さなければならないというイエスの教えをもってそのことを正当化する。しかし、イエスは、自分の兄弟は忘れて、

敵だけを愛さなければならないとは教えられなかった。彼らは、キリストのよい知らせを伝えるのでなく、クリスチャンの流した血に手を浸している人たちの人気を得、いっしょに食事をすることによって愛を示している。しかし、共産主義者に抑圧されている人々は忘れ去られ、愛されてはいないのだ。

西ドイツの福音的教会とカトリック教会は、この七年間に、一億二千五百万ドルを飢饉のために救援として送った。アメリカのクリスチャンは、それ以上ささげた。確かに多くの飢えている民はいる。しかし、クリスチャン受難者ほど飢えている人々を想像できないし、彼らほど自由諸国のクリスチャンから救援を受けるにふさわしい人々もいない。ドイツ、イギリス、アメリカ、スカンジナビアの教会が、救援物資のためにあれほど募金するのなら——必要としている人には全部に行き渡らせるべきではあるが——、まず、クリスチャンの受難者とその家族に救援の手がさし伸べられるべきである。

現在、それがなされているだろうか。

私は、クリスチャンの団体によって身受けされた。このことは、クリスチャンは、身代金(みのしろきん)を払えば身受けできることを証明するものだ。しかし、クリスチャンによって私の国から身受けされたのは、私が唯一のケースである。だから、私の身受けの事実は、欧米のクリスチャンの諸団体

が、他のケースのためにも義務を遂行するのを怠っていることを暗に指さしている。

初代のクリスチャンは、新しい教会は、ユダヤ人だけのものか、あるいは異邦人のためのものであるか自問した。その質問には正しい解答が与えられた。違った形ではあるが、同じ問題が二十世紀の教会にも再現している。キリスト教は西欧だけのものではない。キリストは、アメリカやイギリス、その他の民主主義国だけに属するおかたではない。彼が十字架につけられたとき、彼の手は、一方は西に、他方は東に向かって伸ばされた。彼はユダヤ人だけの王でなく、異邦人のためにも王となり、西欧やアメリカの世界のためだけでなく、共産主義者のためにも王となることを望んでおられる。イエスは言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」と。彼はすべての人のために血を流された。すべての人は福音を聞き、信じなければならない。

共産圏の国で福音を伝えるときに励まされるのは、そこでクリスチャンになる人々が、愛と熱意に満ちていることである。ロシア人でなまぬるいクリスチャンにお目にかかったことがない。若い元共産主義者は、キリストのとびきり優秀な弟子となることができるのだ。

キリストは、すべての罪ひとを愛して、罪から解放したいと望んでおられる。同じように、共産主義者を愛し、彼らを共産主義から解放したいと願っておられるのである。欧米の教会の指導

者のうちには、この唯一の正しい態度の代わりに、共産主義に対する自己満足、静観という態度が見られた。彼らは罪を好み、共産主義の勝利の手助けをし、それによって、共産主義者ばかりか、共産主義の犠牲者の救いをもはばんでいるのである。

釈放されたときに見いだしたもの

刑務所から釈放されて再び妻といっしょになった時、妻は、将来の計画について尋ねた。「私の理想は、霊的な世捨て人の生活だ」と私は言った。妻も同じように考えていたと言った。

若いころの私は、きわめて活動的なタイプだった。しかし、獄中生活、特に長年月にわたる孤独な禁固生活が、私を、黙想的な、考えにふけりがちな人間に変えた。

心に騒ぐいろいろなあらしは静まった。共産主義にも心を煩わされず、気にとめなかった。私は天の花婿のふところにいた。私を苦しめた人々のために祈り、彼らを心から愛することができた。釈放される希望をほとんど持っていなかったが、それでも、時々は、ふっと、もし万一釈放されるようなことがあったら何をしようかと思うことがあった。そんな時いつも考えたのは、どこかに隠退して、天の花婿と共に荒野にいて、楽しい交わりの生活を続けたいと思った。

神は唯一の「真理」である。聖書は「真理についての真実の記録」である。神学は、「唯一の真理についての真の記録を説明したもの」である。ファンダメンタリズムは、「唯一の真理についての真の記録を純粋に説明したもの」である。またクリスチャンは、唯一の真理に関しての多くの真理のうちに生活している人々である。しかし、そのために必要な「唯一の真理についての真の記録」を持っていないのだ。飢え、打たれ、麻酔をかけられて、私たちは、神学も聖書も忘れてしまった。「唯一の真理についての真の記録」を忘れたのである。それで私たちは唯一の「真理」なるかたのうちに生きていたのである。「人の子は思いがけない時に来ます。……その日、その時がいつであるかは、だれも知りません」と書いてある。私たちは、もはや考えることもできなかった。痛めつけられた真暗闇の時、人の子は私たちをおとずれてくださった。獄房の壁をダイヤモンドのようにきらめかせ、獄房全体を光に満たしてくださったのである。どこか遠くの肉体の世界、下の方に拷問者がいた。でも私たちの霊は主にあって喜んでいた。王の宮殿にいるような喜びを私たちは捨ててしまおうとは思わなかった。だれかと、何かのために戦うこと——これくらい私たちの思いからかけ離れているものはなかった。どんな戦いも、正義の戦争でもしたくなかった。むしろ、キリストに向かって、生ける宮を築きたいと思った。それは、私が釈放されたあかつきには、静かな黙想の年月を送りたいとの希望からであった。

しかし、釈放されたその日から、私は獄中のいかなる拷問よりもぞっとする共産主義の姿に直面させられた。次々に私が会ったいろいろな教会の有名な説教者や牧師や監督でさえも、自分たちが、自分たちの群れのことを密告する秘密警察のスパイであったと、深い悲しみをもって告白するのであった。私は、彼らに、投獄の危険を冒してでもスパイをやめる用意があるかと尋ねた。答えは、全部「ノー」であった。それは、自分たちを抑圧する人々を恐れるためではないと説明した。そして、教会内で発展している新しい事実について語ってくれた。それは、私の逮捕以前には、まだなかったことであった。すなわち、スパイになるのを拒むことは、ただちに一つの教会を閉鎖することを意味した。

どの町にも、いわゆる「異端」を取り締まる政府の代表である秘密警察がいる。彼には、いつでも好きなときに主教や牧師を呼び出して、教会にだれが来たか、だれがよく聖餐式にあずかるか、だれが信仰に熱心か、伝道している人はだれか、人々は何を告白しているかなどと尋問する権利がある。もしそれに答えないと、追放され、代わりにもっとよく答える「牧師」が立てられる。そういう人を政府の代理が見つけられない時（たいてい見つからないようなことはない）には、あっさり教会を閉鎖してしまうのである。

たいていの牧師は、秘密警察に情報を流した。ただ、ある牧師はいやいやながら与え、ある事

がらはなるべく隠しておこうとした。一方、もう習慣になって、良心もまひしてしまった人もいるという具合だった。さらに、このスパイの働きに情熱をもって、要求される以上のことを語ったりする者もいた。

クリスチャン受難者の子どもからの告白を聞いたことがある。子どもたちは、親切に迎え入れられた家庭についての情報を告げることを強制された。そうしないと、勉強を続けることができないと脅迫されるのだった。

赤旗のしるしの下にあるバプテストの評議会に行ったら、そこでは、だれが「選ばれた指導者たち」になるべきかと、共産主義者たちが決定しているところだった。

現在では、すべての公の教会の指導的地位には、共産政府から指名された人々が着いていることを私は知った。そのとき、イエスが言われた、最も聖なる場所が荒らされている汚らわしさをまざまざと見せられていることに気づいた。

どの時代にも、よい牧師、説教者、悪い牧師、説教者がいるものだ。しかし今や、教会史上始まって以来のこと、すなわち、宗教を根絶するという目的を宣言した公認の無神論主義政府の中央委員会が、教会の指導者を決定しているのである。何の目的のために教会を指導するのか。疑いもなく、宗教を根こそぎにする応援をするためにである。

レーニンはこう書いている。「すべての宗教理念、すべて、神についての概念、神に関する考えをもてあそぶことすらも、最も危険な種類の、言い表わせないほどの悪であり、最も忌みきらうべき種類の伝染病である。何百万回もの罪も、汚らわしい行為も、横暴な行動も、肉体の伝染病も、捕えがたい霊的な神の理念に比べれば、ずっと危険でない。」

ソビエト地域の共産主義者は、みなレーニンの信奉者である。彼らにとって宗教は、ガンや結核よりも、梅毒よりも悪いものだ。そういう彼らが、宗教の指導者を決めるのだ。しかも公の教会の指導者たちは、多かれ少なかれ、彼らに妥協し、協力しているのである。

子どもや青少年が無神論に毒されているとき、公の教会は、それに反発できる力をほんの少しも持ち合わせていないことを、私は見た。首都ブカレストの教会には、若い人の集まりや子どもの日曜学校は一つもない。クリスチャンの子どもたちは、憎しみの学校で育てられるのである。

これらのいっさいを見て、私は拷問に会っていた時より、もっと激しく共産主義を憎悪した。私になされたことのためではなく、共産主義が、神の栄光に対して、キリストの名に対して、また共産主義の支配下にある一億の人々の魂に対してなしている悪のゆえにである。

全国の農民が私に会いに来て、集団農場がどのように運営されているかを話してくれた。彼らは今、彼ら自身の農場とぶどう園で飢えに苦しむ奴隷であった。パンがない。子どもに与えるミ

ルクも果物もない。——昔のカナンにまさるとも劣らない天然の富を持つ国においてこのありさまなのだ。兄弟たちは、共産主義政権が、みんなを窃盗やうそつきにしてしまったと告白した。彼らは飢えのために、もと自分の畑で、今集団農場のものとなっている所から盗まずにはいられなかった。それで、盗んだことをおおい隠すために、うそをつかなければならなかったのだ。

労働者は、工場でのテロについて語り、資本主義者が夢にも考えなかったような労働力の搾取について語った。労働者には、ストライキをする権利もないのである。知識人は、神が存在するという内的な確信に反することを教えなければならなかった。世界の三分の一の人間が、生活と思想をすべて破壊され、欺瞞化されているのである。

若い女の子たちが来て、次のような不満を訴えて来た。彼女たちは、共産青年同盟から呼び出され、彼女たちがクリスチャンの青年にキスしたと非難し脅迫されたうえ、これからキスをする可能性のあるもうひとりの青年の名前まで指摘されたと言う。すべてのことが、どうしようもなくでっち上げであり、醜悪であった。

そのころ、私は地下教会の闘士たちに会った——かつての私の同志である——。彼らのうちの何人かは逮捕を免れて残り、ある人たちは、釈放されるとすぐに戦いを始めた人たちだった。彼らは、力を合わせて戦おうと、私を尋ねて来たのだった。私は彼らの秘密集会に出席したが、彼

らは手書きの賛美歌をもって歌っていた。

私は、あの聖アントニオ大王のことを思い出した。彼は三十年間、砂漠ですごした人だった。全くこの世を離れ、全生涯を断食と祈りに費やした人である。しかし彼は、聖アタナシウスとアリウスの間のキリストの神性についての論争について伝え聞いた時、黙想の生活を捨て、アレクサンドリアに出て行って、真理が勝利を得るための助けをした。また、クレアヴォーの聖ベルナルドのことも思い出した。彼も山奥に住む修道僧だった。彼は、クリスチャンがからの墓を奪い取ろうとして始めた、信仰を異にするアラブ人やユダヤ人や同胞を殺すという十字軍の愚かしい行動のことを聞いたとき、修道院を出て山を降り、十字軍に抗議して説教したのである。

すべてのクリスチャンがなすべきことを私もしようと決意した。それはキリストの模範に従い、使徒パウロをはじめ、偉大な聖徒たちのあとに従うことであり、隠遁の思いを捨てて戦闘につくことである。

それは、どういう種類の戦いだろう。

獄中のクリスチャンは、いつも敵のために祈り、彼らに対してすばらしいあかしをした。私たちの心の望みは、彼らが救われることであり、だれかが救われるたびごとに、私たちは歓喜した。しかし、私は悪しき共産主義の組織を憎んだ。そして地下教会を強化したいと願った。それ

は、福音の力によって、この恐ろしい専制をくつがえすことのできる唯一の軍隊であるからだ。単にルーマニアのことだけでなく、すべての共産圏諸国を考えてのことである。

しかし西欧では、多くの無関心にぶつかった。共産主義作家のふたり、シニアビスキーとダニエルが、同志によって投獄の判決がなされたとき、世界中の作家が抗議した。ところが、クリスチャンが信仰のために投獄されている時、教会は何の抗議もしないのである。

トーレーなどの書いた小冊子や分冊聖書など、「有害」なキリスト教出版物を配布したという罪のために処刑されたクジイック兄弟のことをだれが気にかけているだろうか。書いた説教を配ったというかどで判決を受けたプロコフィエフ兄弟のことをだれが知っているだろう。同じようなことで、ロシアにおいて刑を受け、共産主義者に幼い息子の命もとられたヘブル人クリスチャンのグルンバルトのことを知る人があるだろうか。私は、息子のミハイが連行されたとき、どんな思いがしたか覚えている。だから、グルンバルト兄弟や、イバンエコー、シェブチュクおばあさんや、タイシア・ツカチェンコー、エカテリナ・ヴェカシナ、ゲオルギー・ヴェカジンや、ラトビアのビラト夫妻などと苦しみをともにしている。彼らの名は、二十世紀の聖徒、信仰の英雄の名である。初代のクリスチャンが、野獣の前に放り出される仲間の鎖に接吻したように、私は身をかがめて、彼らの鎖に接吻したい。

欧米の教会の指導者は、彼らのことを気にかけてはいない。殉教者たちの名は、彼らの祈りのリストにはのっていない。彼らが拷問され、処刑されている一方、彼らを密告し、裏切ったロシアのバプテスト、正教会の公認の指導者たちが、ニューデリーで、またジュネーブの評議会で栄誉を受けた。その席で、彼らは、ロシアには完全に宗教の自由があると、皆に確認したのである。WCC（世界教会協議会）のリーダーは、この確認をボルシェヴィーキのニコディシ監督が語った時、彼に接吻した。それから彼らは、偉大なWCCの名において盛大な会食をしたのである。他方、獄中の聖徒たちは、かつて私がイエス・キリストの名によって食べたように、洗っていない腸をキャベツといっしょに食べていた。

事態をこのままで放置してはおけなかった。地下教会は、もし許されるならば、私が国を離れて、何が起こっているかを、あなたがたクリスチャンに知らせるようにすべきだと決定を下した。私は「共産主義者」は愛しているが、「共産主義」を告発する決意をした。共産主義を告発することなしに福音を説くことは正しいとは思えない。

私に「純粋に福音だけを説教せよ」と言う人がある。これを聞くと、秘密警察が、キリストを説いてもよいが、共産主義のことは言ってはいけない、と私に言ったことを思い出す。「純粋な福音」と言われているものを支持する人々が、共産主義政府の秘密警察と同じスピリットによっ

て刺激されたのだ、と考えなければいけないのだろうか。

いわゆる純粋な福音なるものがどういうものか私にはわからない。バプテスマのヨハネの説教は純粋だったのだろうか。彼は「神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」と言っただけではない。ヘロデに向かって、「あなたは悪いことをしている」とも言った。彼は抽象的な教えだけにとどまることをしなかったので、首を切られた。イエスは、「純粋な」山上の説教だけをなさったのではない。ある現役の教会指導者たちは、否定説教と呼ぶかもしれないが、「わざわいが来ますぞ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。……まむしのすえども」と語られた。このような「不純な」説教のために、主は十字架の刑を受けられた。律法学者は、山上の説教についてだけなら、あまり気にもかけなかっただろう。

罪は、名前をつけて呼ばれなければならない。共産主義は、今日、世界で一番危険な罪である。共産主義を告発しない福音はすべて、純粋な福音とは言えない。地下教会は、自由と命をかけて共産主義を告発している。欧米にいる私たちが、彼らより黙っていてよいはずがあろうか。

私は共産主義を告発する決意をしたが、普通「反共主義者」と呼ばれている人々がするような意味では告発しない。ヒトラーは反共主義であったが、同時に専制君主だった。私たちは、罪は憎むが、罪びとは愛するのである。

なぜ私は西欧で苦しむのか

私は、共産主義の国にいる時よりも、西欧にいてずっと苦しんでいる。私の苦悩は、まず第一に、地下教会の言い尽くせないすばらしさへの思慕からである。この教会こそ、古いラテン語のことわざの、「裸の者よ。裸のキリストに続け」を成就している教会なのである。

共産政府の支配下では、人の子と彼に属する者たちにはまくらする所がない。そこではクリスチャンは自分のために家を建てない。建てて何になるだろう。一度目の逮捕のときに没収されてしまうからである。新しい家を持っているなら、ただそれだけの理由で投獄される可能性が大きくなる。共産主義者はその家がほしいからである。そこでは、父を葬ることはしない。キリストに従って行く前に、家族の別れのあいさつをすることもない。あなたの母とはだれか、兄とはだれか、妹とはだれか。この点、あなたはイエスのようである。あなたにとっての母や兄は、神のみこころを行なう人だけである。花嫁が花婿を、子が両親を、妻が夫を告発するということがしばしば起こっている中で、血のつながりが、もはやあてにできるだろうか。残るのは霊的なつながりだけという事実が、だんだん強くなる一方である。

地下教会は貧しい悩める教会であるが、なまぬるいメンバーはひとりもいない。地下教会の礼拝は、一九〇〇年も前の初代教会のようである。説教者は神学に精通していない。説教学も知らない。ペテロもそうだった。神学の教授ならだれでも、ペンテコステの日のペテロの説教に悪い点をつけるかもしれない。共産圏の国では、聖書を持っている人はまれだから、聖句もあまりよくは知られていない。その上、説教者は、たいてい何年も獄中生活をしており、その間は聖書を持つことはできないのである。

彼らが父なる神への信仰を言い表わすとき、それは深い意味を持つ。この確認の背後にはドラマがあるからだ。刑務所で彼らは、毎日、全能の神にパンを求めて祈った。そして実際に与えられるものは、キャベツの代わりに、お話にならないようなきたない物だった。それでも彼らは、神が愛の神であると信じていた。彼らは、たとい神が自分を殺しても、なお神を信ずると言ったヨブのような人たちである。彼らは、十字架上で、あたかも神に見捨てられたかのように思われたときにも、神を「父よ」と呼ばれたイエスのようである。

だれでも地下教会の霊性の麗しさを知る者にとって、西欧の幾つかの教会のむなしさはとても満足できるものでない。私は共産政府の刑務所にいた時よりも深い苦悩を西欧で覚える。というのも、西欧の文明が死につつあることをこの目で見るからである。

オズワルド・シュペングラーは『西洋の没落』という本の中で、こう書いている。「西欧は死につつある。その中に私は、あらゆる衰亡のきざしのなぞを見る。その巨大な富とその窮乏、資本主義と社会主義、戦争と革命、無神論と悲観主義、皮肉、不道徳、離婚、産児制限等々。こうしたものが、往年の古代諸国、アレキサンドリヤやギリシヤ、ノイローゼのローマの衰亡の時代に見られた特徴のしるしであることを証明できる」と。これは一九二六年に書かれた。それ以後、民主主義と文明は、すでにヨーロッパの半ばまで死に絶え、その死の手は、キューバまで伸びている。西洋のその他の世界は眠っている。

しかし、たった一つ、眠っていない軍隊がある。それは共産主義者である。東洋では共産主義者は失墜し、幻を失ったのに引き替え、西洋では、なおその猛毒性を失っていない。西洋の共産主義者は、共産圏の国での残虐行為と悲惨と迫害の悪いレポートを簡単には信じない。共産主義者は、社交場で、知識階級のクラブで、大学で、スラム街で、教会で、どこででも疲れを知らぬ熱意をもってその信念を広めている。私たちクリスチャンは、しばしば真理の側に立つのに気のりのしない態度をとるが、彼らは全精力を投入して、欺瞞の味方をしているのである。

西洋の神学者は、時間をかけて、ささいなことで議論をしている。それは次のことを想起させる。一四五三年に、マホメット二世の連隊がコンスタンチノープルを包囲した。その勝敗のいか

んによって、その後何世紀にも渡って、バルカン半島がクリスチャンのものになるか、回教徒の支配の下におかれるのかが決定される一大事の時であった。包囲された都市の一地方教会の評議会では、次のような問題を論じていたという。聖処女の目は何色だったか。天使は男性か女性か。はえが一匹聖水の中に落ちたらどうなるか。はえはきよめられるか、あるいは水がけがれるか。おそらく、これは伝説にすぎないだろう。しかし、現代の教会の定期刊行物を調べてみるとよい。これに類した問題が論じられているのに気がつくであろう。共産主義の脅威や、地下教会の苦難についてふれてあることはめったにない。神学上の事がらや儀式について、本質からはずれた果てしのない論議がのせられているのだ。

あるラウンジに一つのグループがいた。ひとりが質問した。「かりに、あなたが乗った船が沈没し、ある孤島にのがれることができるとします。その時、船内の図書館から、たった一冊だけ本を持って行くことができるとすると、あなたはどんな本を選びますか。」ひとりは「聖書」、もうひとりは「シェークスピア」と答えた。しかし、ある作家が正しい答えをした。「私は、どうしたらボートを作って帰ることができるか教えてくれる本を選ぶでしょう。そうすれば、そこで自由に何でも好きな本が読めるからです。」

すべての教派や神学の自由を保持すること、そして、自由が失われた所では、それを惜しむこ

と、そのほうが、ある一つの神学上の見解に固執することよりもたいせつである。「真理はあなたがたを自由にします」とイエスは言われる。しかし、同時に、「自由が、自由のみが真理を与えることができる」とも言われる。だから私たちは、枝葉末節のことで争うよりも、共産主義の専制に抵抗して、自由のための戦いに一致団結すべきである。

私はまた、鉄のカーテン下の教会の、増し加わりつつある苦難にあずかって悩んでいる。私自身、その苦しみを経て来たので、ありありと心に浮かべることができるからだ。

昨年六月、ソビエトの新聞「イズベスチア」と「デレベンスカイス・イーズン」は、ロシアのバプテスト教会が、教会員に「罪のあがないのために子どもを殺すように」と教えていると攻撃した。これは、儀式的な殺人という名目で昔ユダヤ人に対してなされた非難である。

しかし、これが何を意味するか、私にはわかる。私は一九五九年、ルーマニアのクルイの刑務所にいた。そこでいっしょにいたラザロビーシーという囚人は、女の子を殺したという罪を問われた人だった。彼はやっと三十才になったばかりだったが、拷問に会って、一夜のうちに白髪になってしまった。事実、彼はまるで老人のように見えた。彼にはつめがなかった。それは、犯したことのない犯罪を彼に自白させようとして、共産主義者たちが、はいでしまったからである。一年間苦しめられた後、無実が証明されて釈放されたが、彼にとっては、もはや自由は何の意味

もなかった。彼は永久の不具者になってしまったのだ。

新聞を読んで、ソビエトの新聞が、バプテスト教会に対してばかげた攻撃をしているのを見て笑う人もある。しかし私は、攻撃されたバプテスト教会の人々にとって、それがどういう意味を持つものか知っている。西欧にいて、皆の前でこういうイメージを持つことは恐ろしい。共産主義者の手先となっているアレクセイ長老やニコディム大主教が行なっているソビエト政府との極端な協力に抗議したカルガのエルモーゲン大主教と七人の監督は、今どこにいるのだろうか。ルーマニアで抗議した監督たちが、獄中の私のそばで死にかけているのを見なかったら、信仰深いあの監督たちの身の上について、こんなに心配することはなかっただろう。

ニコライ・エシュリーマンとグレブ・ヤクミン牧師は、教会のために信仰の自由を要請したかどで、長老に懲戒を受けた。西欧でこのことはよく知られている。しかし、私と刑務所でいっしょだったルーマニアのブラデミレシュティのイオーン神父にも同じことが起こったのである。表向きは、単に教会の「懲戒処分」である。しかし、共産圏の公の教会では、どこでもそうであるように、ルーマニアでも、指導者は、秘密警察とがっちり腕を組んで働いているのである。彼らのために懲戒処分をされた人々は、さらに効果的な刑務所の懲戒――「拷問」を受け、たたかれ、ひきずられる――に会うのだ。

共産政府の収容所で迫害された人々の苦難を考えると私の心はふるえる。また拷問者の永遠の運命を思うと、心がおののく。迫害の下にある兄弟たちを助けようとしない西洋のクリスチャンのためにも、私の心はふるえる。

心の底では、私は自分のぶどう園の美しさを守り、こんな膨大な戦いに巻き込まれたくないと思う。実際に、どこか静かな所で休みたいとどんなに願っているかしれない。しかし、それはできない。共産主義が敷居をまたごうとしているのだ。共産主義者がチベットを侵略した時、霊的なことに少しでも関心を持っている者は完全に抹殺された。ルーマニアでは、だれでも現実から遊離したと思われる者は全部消されたのである。教会や修道院は解体され、外国人の目を欺くのに必要な程度の数だけが残された。私の望む静けさも安らぎも、所詮は現実からの逃避であって、私の魂にとって危険なものであるだろう。

この身に危険がどんなに大きくても、戦いを指揮しなければならないのだ。私が姿を消せば、共産主義者がきっとさらって行ったのだと思うだろう。一九四八年、彼らは路上で私を誘拐し、別件で投獄した。当時の大臣アンナ・ポーカーは、スウェーデン大使の、パトリック・フォン・ルーテルスベルデ卿にこう言った。「ああ、ウォムブランド師なら、今、コペンハーゲンの町を散歩していらっしゃいますよ。」このスウェーデン大使は、私が刑務所からひそかに出すのに成功

した手紙をポケットに入れていたので、うそを言われたことがわかった。このようなことは、再び起こり得ることなのだ。もし私が殺されたら、私を殺す人は、共産主義政府からの指令を受けた人に違いない。だれも他に私を殺す動機を持った人などないからだ。もし私についての品行上の堕落、盗み、同性愛、姦淫、政治的不信、うそ等、こういううわさが流れたら、秘密警察が「精神的にお前を失墜させてやる」と言ったおどしが実行されたということである。

確かな情報筋によると、ルーマニアの共産政府は、私が合衆国上院で証言してから、私を殺すことを決定したという。彼らは私を肉体的に殺すか、あるいは、私の評判を落としてしまうよう努力するだろう。彼らは、ルーマニアの私の友人を脅迫して、私をゆすろうとするだろう。彼らは強力な手段を持っているのだ。

それでも、私はだまっていられない。そして、あなたがたの務めは、私が言うことを慎重に調べてみることである。私がこういう体験を経てきたから、迫害コンプレックスにかかっているのだと思われるかもしれない。しかし、なお、こんなコンプレックスにさせるほど市民を苦しめる共産主義の恐ろしい力はいったい何かと自問していただきたい。家族全部が射殺される危険を冒してでも、男たちが子どもをブルドーザーにのせ、有刺鉄線をくぐり抜けてまでして東ドイツを脱出しようとする力は何だろうか。

西欧は眠りこけているのだ。目をさまさなければいけない！

× × ×

苦しんでいる人間は身代わりを求める。だれか罪をになってくれる人である。こういう人を見つけると、人は、ぐっと荷が軽くなって楽になる。私にはそれができない。

共産主義と妥協している西欧の教会の指導者に罪を着せることはできない。悪は彼らから出ているのではないからだ。その原因はもっと古い。そういう指導者たち自身が、この非常に古い悪の犠牲者なのだ。彼らが教会の中に混乱を作り出したのではない。彼らはそれを見いだしたのだ。

西欧に来てから、私は多くの神学校を訪問した。そこで聞いた講義は、鐘の歴史だとか、儀式用聖歌の歴史だとか、だいぶ前から使われていないある教会の戒律だったりした。神学生が聖書によって、創造の記事やアダムのこと、洪水の記事、モーセの奇蹟のことなどはほんとうに起こったのではない、いろいろある預言は成就したあとに書かれたのだ、処女降誕は神話だ、イエスの復活だって同じことだ、イエスの骨はどこかの墓に残っているとか、使徒の手紙は本物ではない、黙示録は狂人の書いたものだ、と学び、しかし、それでも聖書は聖なるものだと言っている

のを見た。(もしそうだとすると、聖書の主張するところは、共産党の新聞よりもっとうそが多い、ただの記事となってしまう)。何とこれが、現在の教会指導者が神学校で学んだことなのである。これこそ彼らが生活しているふんい気なのだ。どうして彼らは、あんな奇妙なことを言った主に忠実でなければならないのだ。神は死んでいる、と自由に教えられる教会に対して、指導者は忠実でなければならないのか。

彼らは、公認の教会の指導者ではあるが、キリストの花嫁である教会の指導者ではない。彼らは、長い間、多くの人が主を裏切った教会の指導者である。だから、殉教者である、苦難の地下教会の人に会ったとき、まるで赤の他人に出会うような目つきをするのだ。

第二に、人をその態度の一面だけで判断するのは正しくない。もしそうすれば、イエスが安息日の律法を守らなかったと言って、イエスはまちがっているときめつけたパリサイ人のようになってしまう。これによって彼らは完全に目をつぶってしまい、彼らにも見えたはずの、イエスの好ましさ、すばらしさを見ようともしなかったのである。

共産主義に対してまちがった態度をとっている教会の指導者たちも、おそらく、他の点では正しいところがあり、個人的にみるとまじめなのかもしれない。たといまた、まちがっているところがあっても、彼らも変わる可能性がある。

ある時、ルーマニアの首都に住む正教会の人といっしょになったことがあった。彼は共産党のスパイで、自分の群れの人を告発していた。私は彼の手を取りしっかりにぎりしめて、ほうとう息子のたとえを語った。それは夕方で、私たちは彼の家の庭にいた。「神は、帰って来るひとりの罪びとを、どんなに愛をもって迎えられるか考えてごらんなさい。監督でも、悔い改めるなら、神は喜んで迎えてくださるのですよ」と私は言って、彼のためにいくつかの賛美歌を歌った。この人は回心した。

刑務所で同房になった人の中に、正教会の主教がいた。彼は釈放を望みながら、無神論の講義を書いていた。私は彼に話をした。すると彼は、それまで書いたものを引き裂いた。そして二度と釈放のためにこのような危険を冒すことをしなかった。

私はだれかに身代わりになってもらって、私の心にかかる荷を軽くすることはできない。

× × ×

私には、もう一つの苦痛がある。とても親しい友人たちでさえ、私を誤解することである。私が共産主義に対して、無情でうらみ深いと言った人がある。私には、おぼえのないことであるが——。

モーセ五書研究家のクロード・モンテフィオレは、律法学者やパリサイ人に対するイエスの態度、すなわち、彼らに対するイエスの公然たる攻撃的な態度は、敵を愛し、のろう者を祝福せよというイエスの命令に矛盾すると言った。また、最近引退したロンドンの聖パウロ教会の首席司祭、W・R・マシューズ博士は、これはイエスのうちに認められる矛盾であり、一貫性に欠けた点だと結論している。彼はその理由として、イエスは知識人でなかったから、というのである。

モンテフィオレの、イエスについての印象はまちがっていた。イエスは、パリサイ人を公に攻撃はされたが、彼らを愛しておられたのだ。私も彼らを攻撃するけれど、共産主義者も、教会内で彼らの手先となっている者も愛している。

私はいつも、「共産主義者のことは忘れよ！　霊的なことのためにだけ働け！」と教えられた。

ナチ政府のもとに苦しみを受けたひとりのクリスチャンに会ったことがある。彼は、私がキリストをあかししている限りにおいて味方であるが、ひとことでも共産主義者に反対することばを吐くなら味方ではないと言った。私は、ドイツでヒトラー体制に対して戦ったクリスチャンが、ただ聖書のことだけにとどまって専制者に抗議のことばをひとことも言わなかったとしたらまちがっていないのか、と尋ねた。答えはこうだった。「でもヒトラーは、六百万のユダヤ人を殺したんです！」私は答えた。「共産主義は、三千万のロシア人と何百万もの中国人や他の人々を殺

し、ユダヤ人も殺したんですよ。ユダヤ人が殺されたときだけ抗議して、ロシア人が殺されたら何も言わないほうがいいのですか。」答えは、「これとそれとは全く別問題ですよ」だけで、何の説明もなかった。私はヒトラーの時にも、共産主義者の時にも警察から打たれたが、どこにも違う点はなかった。どちらも痛かった。

キリスト教は、共産主義だけでなく、いろいろな罪に対して戦わなければならない。ただ一つの問題のみにとらわれていてはならない。しかし共産主義は、現在キリスト教の最大の敵であり、最も危険な力である。それゆえに、私たちは一致団結してこれに対抗しなければならないのだ。

もう一度言わせていただきたい。私たち人間の目標は、キリストに似たものとなることである。これをはばむことが、共産主義者の主要な目標なのだ。彼らは根本的には宗教の反対者である。彼らは、人間は死ぬと、塩とミネラル以外の何物にもならないと信じ込んでいる。人間はすべて、物質的な水準で生涯生きて行くべきだと思っているのだ。

彼らは集団しか知らない。彼らのことばは、あなたの名前は何かと尋ねられたとき、レギオンですと答えた悪霊のことばと同じである。個人の人格——神が人間に与えられた最大の賜物——は粉砕されなければならないのだ。彼らは、ある人が、アルフレッド・アドラーの『個人の心理

学』を持っていたというだけの理由で投獄した。秘密警察の将校は大声で叫んだ。「ああ、個人、個人、いつも個人なのか。なぜ集団ではないのか」と。

イエスは、私たちが個人の人格をたいせつにするよう望んでおられる。だから、私たちと共産主義の間には、どんな妥協の可能性も存しない。共産主義者はそれを知っているのだ。「科学と宗教」という彼らの雑誌にこう書いてある。「宗教と共産主義は両立しがたい。宗教は共産主義に敵対する。……共産主義のプログラムの中味は、宗教を一掃して滅ぼすことである……。宗教の拘束を永遠に除いた無神論主義社会を創造するのだ」と。キリスト教と共産主義との共存はあるのか。共産主義者は、ここにその解答を出している。「共産主義は宗教を一掃するものである」と。

5　働き続ける地下教会

再び話を地下教会にもどそう。

地下教会は、とても困難な条件の下で働いている。共産圏の諸国では、どこでも無神論が国の宗教となっている。政府は、年とった人が信じている分には多少の自由を認めているが、子どもや若い人々は、絶対に信仰を持ってはならないと言う。これらの国では、すべてのもの――ラジオ、テレビ、映画、劇場、新聞社、出版社――は、神への信仰を撲滅する使命を持っている。地下教会は、全体主義国家の巨大な暴力に対抗する手段をほとんど持ち合わせていない。ロシアの地下教会の牧師は、神学的訓練も受けていない。聖書全体を一度も通読したことのない牧師がいるのだ。

多くの人がどのようにして任命されたか、お話ししよう。ある若いロシア人の内密の牧師に会って、だれがあなたを任命したのか、と尋ねた。彼は答えた。「私たちを任命するほんとうの監

督はいません。公認の監督は、共産党から認められた人でなければだれも任命しようとしません。だから私たち若いクリスチャン十人は、殉教の死を遂げた監督の墓に行きました。私たちふたりが墓の上に手を置いて、他の者は私たちを囲んで円陣を作りました。そして私たちは、聖霊が私たちを任命してくださいと願ったのです。私たちは、イエスの釘づけられた御手によって按手されたと確信しています。」私には、この青年の按手は、神の前に有効だと信じる！　このような按手を受けた人々、何の神学的訓練も受けたことのない人々、また、聖書をわずかしか知らないことさえある、そうした人々がキリストの働きを続けているのである。

それは、第一世紀の教会に似ている。キリストのために世界をひっくり返したあの人たちは、どんな神学校を持っていただろうか。彼らはみな読み方を知っていただろうか。どこから彼らは聖書を手に入れただろうか。神が彼らに語られたのである。

地下教会の私たちには大会堂はない。しかし、どんな教会が、私たちがひそかに森に集まったとき仰いだ大空の美しさに比べることができよう。小鳥のさえずりがオルガンの代わりとなり、花のかおりが私たちの香となった。最近釈放された受難者のみすぼらしい洋服は、司祭のガウンよりずっと印象的であった。月と星が私たちのろうそくであり、天使がろうそくに点火してくれる私たちの助手になった。

この教会の美しさは、とうてい筆で書き表わすことはできない。秘密の集会が終わると、しばしばクリスチャンが逮捕され、刑務所に送られた。そこでクリスチャンは、ちょうど花嫁が、愛する者から受けた宝石をつけるように、喜びをもって鎖をはめる。刑務所の川は静かだ。そこではキリストの口づけと抱擁を受け、どんな王の地位とも取り替えようとは思わない。私は、真実の喜びにあふれたクリスチャンを、聖書と地下教会と刑務所の中でだけ見いだした。

地下教会は抑圧されているが、多くの友人を持っている。——秘密警察や政府の要員の中にさえいる。時々こうした秘密の信者が地下教会を守ってくれるのだ。

最近ロシアの新聞が「表向きの不信者」の増加について不満の意を表わしていた。ロシアの新聞の説明によると、共産党勢力の隊列に直接加わって働いている者の中で、数えきれないほどの人々が——政府の役所や宣伝部や、その他至る所に——表向きの共産主義者となり、内側では秘密の信者として地下教会のメンバーとなっているというのである。共産党の新聞は、共産政府の宣伝部で働いていた若い婦人のことを語っている。彼らはこう言った。仕事が終わると彼女は自分のアパートに帰り、仕事から帰った夫に会う。夕食がすむと、彼女と夫は、同じビルのアパートから一団の若い人々を集めて秘密の聖書研究会と祈り会をする。こうしたことが、共産圏のあらゆる所で起こっているのである。何万人もの、このような「表向きの不信者」が、すべての共

産主義国に存在するのだ。彼らは、見せかけの教会には出席しないほうが賢明だと感じている。そこでは看視されるし、水増しされた福音しかきけないのだ。かえって、彼らの持っている権威と責任ある地位にとどまって、ひそかにしかし効果的にキリストをあかししているのである。地下の忠実な教会は、このような場所に、何千人もの会員を有している。彼らは、地下室や屋根裏、アパートや個人の家庭で秘密集会を持っている。

ロシアで、おとなの洗礼の形式について、あるいは幼児洗礼がよいか悪いかについて、あるいはまた法王の無謬性を認めるか認めないかなどについて論議した経験のあるものはだれもいない。彼らは、前千年王国論者でも後千年王国論者でもない。預言を解釈できないから、預言について論争することもない。でも、彼らが、どうしてあんなに巧みに無神論者に神の存在を証明することができるのか、私はしばしば不思議に思った。

彼らの無神論者への答えは単純なものだった。「いろいろなおいしい食物の並んだごちそうの席に招かれたとしたら、そのごちそうを料理する人はだれもいないということを言われて信じることができますか。自然は実に私たちのために用意された大宴会ですよ。トマトも桃もリンゴもミルクもはちみつもあります。人間のために、だれがこんなものを全部備えたでしょう。自然そのものは盲目です。神を信じないなら、どうやって、この盲目の自然が、私たちの必要を知っ

て、こんなにたくさんいろいろな種類の物を用意できたと説明できますか。」

彼らは、永遠のいのちがあることも証明できる。無神論者を説得している人の話を聞いたことがある。「かりに、母親のおなかにいる胎児と話ができるとしましょう。胎児に向かって、あなたの生涯はほんの短いものでそのあとに真の長い生涯があるのだと教えるとします。胎児は何と答えるでしょう。きっと、私たちがあなたがた無神論者に天国と地獄について話すときに、あなたがたが答えるとおりのことを答えるでしょう。胎児はこう言うでしょう。母の胎内の生涯が唯一のものであって、他のものは何でも宗教の思いつきで、愚の骨頂だ、と。でも、もし胎児が考えることができたら、次のように自問するでしょう。『腕がはえている。こんなものはいらない。伸ばすことさえできないんだもの。なぜ腕があるのかしら。たぶん、私の未来の存在では、これを働かせなければならないのかもしれない。足もはえている。でも、胸の方に折り曲げておかなければならない。なぜ足がはえているのか。たぶん、次に大きな世界が来るのだろう。おそらく、光と色彩のある世界が来るのだろう。』もしこのように胎児が自分の成長について考えてみることができるとすれば、母親の胎の外の生活を見ないでも知ることができるでしょう。私たちも同じです。若い間は、私たちは元気です。でもその力を正しく用いる精神を欠いています。年をとって、知恵と知識にたけたころには、霊柩車が、私たちを墓に連れて行こうと待ちかまえて

います。もう使うことができない知識や知恵がどうして成長する必要があるのでしょうか。なぜ胎児の腕や足や目が成長するのでしょう。それは、次に来るもののためです。この世にいる私たちも同じことです。この世で私たちは経験と知識と知恵にたけて行きます。それは次に来るもののためです。死後に来る、より高い水準の世界で仕えるために備えられるのです。」

イエスについて共産主義者が公言する教えは、イエスの存在を認めない。これに対し、地下教会は簡単に答えをする。「あなたのポケットにあるのは、何新聞ですか。きょうのプラウダですか。きのうのですか。ちょっと見せてください。ああ、一九六四年一月十四日のですね。一九六四という数字は、どこから数え始めたのですか。存在したこともない、何の役割も果たさなかった人から出たものですか。イエスは存在しなかったとおっしゃるけれど、彼の誕生をもとに年を数えておられる。時は彼が来られる前からあったのですが、彼が来られたとき、人類にとって、それ以前にあったことはむなしくなって、真の時がやっと始まったという感があったようです。共産党の新聞そのものが、イエスは仮空の人物でないという証拠です。」

たいていの西欧の牧師は、自分の教会の人たちがみな、キリスト教の重要な真理について、ほんとうの確信を持っていると自負しているが、実はそうではない。私たちの信仰についての真理を説明する説教をめったに聞くことがない。しかし、鉄のカーテン下では、全然学んだことのな

いような人々が、回心者に実に確固とした基礎を与えているのである。

重要なキリスト教の要塞である地下教会と公認教会との境目を示す、はっきりとした仕切りの壁はない。両者が織りまざっているのだ。見せかけの教会の多くの牧師が、秘密の牧会を並行して行なっており、共産主義者から定められた限界を越えつつ働いている。共産主義者との合作による公認の教会には、長い歴史がある。その最初は、ロシアの革命直後に起こった、セルギウスという主教を指導者とする「生きた教会」だった。この「生きた教会」は、当時モスクワで公然と次のように宣言した。「われわれの目的は教会を再建することではない。廃止することだ。すべての宗教を撲滅することだ」と。なんとすばらしい教会のプログラムだろう！

どの国にも、何らかの形で、セルギウスのような人がいた。ハンガリーでは、カトリックのバロハという神父がいた。彼と何人かのプロテスタントの牧師は、全国を完全な共産主義者の支配下に置く手助けをした。ルーマニアでは、共産主義政府は、元ファシストでブルドゥーシアという正教会の主教の助けによって権力を得るようになった。ブルドゥーシアは、赤の人々に対して、自分の過去の罪の償いをしなければならず、なおさらボスたちよりも「赤」にならざるを得なくなった。その主教は、ソビエトの国務相ヴィシンスキーと親密な間がらにあった。新しい共産主義政府の設立に際して、ヴィシンスキーが「この政府は地上のパラダイスをうち立てる。も

はや天のパラダイスは不要になる」と宣言したとき、主教はにっこり笑って、そのことばに賛意を表わした。ロシアのニコディム大主教については、政府のスパイだったという記録がある。ロシア秘密警察のデリアビン少将は、ニコディムが自分たちのエイジェントだったと証言した。

どの教派もたいていはこういう状態である。ルーマニア・バプテスト派の現在の指導者も、強制的に押しつけられた者だ。この教会も真のクリスチャンを告発している。ロシアでも、バプテスト派の幹部が同じことをしている。ルーマニアのアドベンチストのタイシ会長は、共産主義者が権力を得たその日から、自分は共産政府秘密警察のスパイだったと語った。

全部の教会を閉鎖しないで――実際には、何千もの教会は閉鎖したが――、共産政府は、少数の「しるし」としての教会を開いておき、そこをのぞき窓として使って、クリスチャンとキリスト教を統制し、やがて壊滅させようとしたのである。彼らは、教会の骨組み（機構）だけを残しておき、クリスチャン統制のための共産主義者の道具とし、その国を訪れる訪問客の目を欺く手段としたほうがつごうがよいと判断したのである。私自身も、秘密警察に会員の情報を提供するという条件で、こういう教会の牧師になるよう招かれたことがある。白か黒――これでなければあれ――をはっきりさせることに慣れている西洋人には、このことは理解できない。しかし、地下教会は、意義ある伝道、青少年を含む「すべての造られたものへの」効果的な伝道の代わりと

して、しるしだけの統制された教会を、絶対に受け入れない。

しかし公認の教会にも、多くの裏切り者の指導者のもとにおかれているにもかかわらず、真の霊的ないのちが息づいている。（西欧の多くの教会も類似した状態であると思う。会衆が忠実な信者であるということが、上に立つ人々によらないことが時々あるという印象を与えられている）。

正教会の儀式文はそのまま残されている。説教は共産主義者にこびるものであっても、この儀式文が、教会員の心のかてとなっている。ルーテル派、長老派、その他のプロテスタントの人々は、昔と変わらぬ賛美歌を歌っている。また、スパイの説教でさえ、聖書のみことばを幾分かは入れなければならない。すでに裏切り者とあらかじめわかっている人たちの影響下にあって、人人は回心しているのである。たとい彼らの回心を、指導者たちが秘密警察に知らせることがわかりきっており、またその腐敗しきった説教を通して与えられた信仰を、その説教者に隠さなければならないことがあってもである。これはレビ記一一章に象徴的なことばで書いてあるような、大いなる神の奇蹟である。「もしそれらのどの死体が（これはモーセの律法によれば、汚れたものである）、蒔こうとしている種の上に落ちても、それはきよい。」

公認の教会の指導者の全部が共産主義者の手先ではないということも、公正を期するために言

っておかなければならない。

地下教会のメンバーは、隠れていなければならない人は別として、公認の教会でもよく知られている。彼らは、キリスト教が気の抜けたサイダーのようなものではなく、必ず戦う信仰となるものであることを表わしている。秘密警察が、ルーマニアのヴラディミレシュティや、ロシアのいろいろな所の修道院を閉鎖しようとしてやって来たとき、彼らはひどい目にあった。宗教を禁止しようとした罪のために生命の代償を支払わなければならなかった共産主義者もいた。

しかし、公認の教会は、だんだん数が減って来ている。ソビエト連邦全体で、まだ五、六千の教会があるかどうかわからない。(アメリカでは、同じ人口の所に約三十万の教会がある)。そして、それらの「教会」は、たいていの場合、私たちが持つ「教会」というイメージとは違って、狭い小さな部屋がいくつかあるだけである。外国人の訪問客は、モスクワの満員の教会を見て——それがモスクワでただ一つのプロテスタントの教会なのだ——何と自由が与えられているか、と言う。彼らは、「教会にも人があふれている!」と、喜んで報告をする。彼らの目には、七百万の魂に、たった一つしかプロテスタントの教会がないという悲劇が映らないのだ! しかも、ソビエト連邦の八十パーセントの人々は、たった一部屋の教会ですら、行くことができる距離にないのだ。これらの群衆は忘れ去られているか、あるいは地下活動によって伝道されてい

る。他に選ぶ方法がないのである。共産主義が、国内で進展してくればくるほど、教会はもっと深く地下にもぐらなければならなくなる。

閉鎖された公認の教会に代わって、反宗教組織の集会が行なわれる。

地下教会はどのようにして無神論文書によって養われているか

しかし、地下教会は、反宗教組織を利用する方法も知っている。昔エリヤがからすに養われたように、無神論文書によって養われているのである。無神論者は、すこぶる巧妙なやり方で、熱をこめて聖書のことばをあざけり批判している。その出版物に「こっけいな聖書」と「信者と不信者のための聖書」というのがある。聖書のことばがいかにばかげたものであるか、ということを表わそうと努めている本であるが、そのために聖句をいろいろ引用している。それを読んだとき、私たちはどんなにうれしかったことだろう！　批判のことばはそれこそばかげたものであり、だれも本気で受け取らなかった。それでもその本は何百万冊も印刷された。それは、聖書のことばを満載していたのだ。引用聖句は、共産主義者が嘲笑しても、たとえようもなく美しかっ

た。昔、宗教裁判で火あぶりになった「異端者たち」は、地獄の炎やサタンを描いたいろいろなおかしな着物を着せられ、行列を作って刑場に引かれて行った。その「異端者たち」は何とすばらしい聖徒の群れであったことだろう！　同じように、たといサタンが引用しても、聖書のことばは変わりなく真実である。共産主義の出版社は、あざけりの目的で聖句を引用している無神論の本を再版してほしいという、依頼の手紙を何千通も受け取って、大喜びだった。こういう機会でもなければ聖句を手に入れることができない地下教会から来た手紙だとは知らずに……。

私たちは、無神論の宣伝の集会を利用することもよくわきまえていた。ある集会で、共産主義の教授が、イエスは魔術師だったに違いない、ということを実証して見せた。教授は自分の前に水さしを置いていた。彼は水さしに何かの粉を入れた。すると水は赤くなった。彼は、「これが奇蹟の全容です」と説明した。「イエスは、こういう粉末をそでに隠していて、とても手ぎわよく、水をぶどう酒に変えるふりをしたのです。でも私は、イエスよりももっとうまいことができます。ぶどう酒を水にもどすことができます。」そう言って、違う粉末を液体に入れた。すると透明になった。もう一つの粉を入れると、また赤くなった。ひとりのクリスチャンが立ち上がってこう言った。「同志の先生、全くびっくりさせられましたよ。不思議なことがおできになるものですね。もう一つだけやっていただきたいのですが。……そのぶどう酒を一口飲んでみてくださ

い。」教授は言った。「それはできません。この粉末は有毒なのです。」クリスチャンは答えた。「そこがあなたとイエスの全然異なるところです。イエスはそのぶどう酒をもって、二千年もの間、私たちに喜びを与えて来られましたが、あなたは、そのぶどう酒で私たちに毒を与えるのです。」そのクリスチャンは刑務所に送られた。しかし、この事件のニュースはあちこちに広がり、信仰の励ましとなった。

私たちは、弱いちびっこのダビデである。しかし無神論というゴリアテより強い。神が私たちの側におられるからである。真理は私たちのものだ。

ある時、共産主義の講演者が、無神論についての講義をしていた。工場の労働者が全部強制的に集められたが、その中に多くのクリスチャンがいた。彼らはじっとすわって、神についての反論とキリストを信ずることの愚かさについての論議をずっと静かに聞いていた。講演者は、さらに進んで、霊的な世界はないこと、神もキリストも死後もないこと、人間は魂のない物質にすぎないことを証明した。物質だけが存在するのだと、彼は何度も何度もくり返した。クリスチャンがひとり立ち上がって、発言してもよいかと尋ねた。許可がおりた。そのクリスチャンは、自分がすわっていた折りたたみのいすを持ち上げ、ガチャッと落とした。ちょっといすを見つめていたが、今度はつかつかと講演者に近づいて行き、その顔を平手でピシャリと打った。講演者はカ

ッとなり、怒りで顔を真赤にした。下品なことばを口走り、そのクリスチャンを逮捕させようとして、共産主義者の同志を呼び入れながら、どなった。「よくもなぐったな。どういうわけだ！」クリスチャンは答えた。「あなたがうそつきだということを、今、証明なさいました。すべてのものは物質だ……物質以外に何もないと言われました。私はいすを持ち上げ、床に投げ落としました。いすはほんとうに物質です。いすは怒りませんでした。ほんとうに物質です。でも、私があなたをたたいたとき、その反応は、いすとは同じではありませんでした。物質はカッとなったり怒ったりはしないものですのに、あなたは怒りました。だから同志の先生、あなたはまちがっています。人間は物質以上のものです。私たちは霊的なものなのです！」こういうぐあいにして、数えきれないほど多くの、地下教会の平凡なクリスチャンが、教養のある無神論者の論議を封じこめた。

刑務所で、私は、警察官に鋭い質問を浴びせかけられた。「いつまで、おまえのばかげた宗教を固守するつもりなのか。」私は彼に言った。「数えきれないほど大ぜいの無神論者が、臨終の床で、神を信じなかった生涯を悔やむのを見ました。彼らはキリストの名を呼びました。クリスチャンが死のまぎわになって、自分がクリスチャンであることを後悔し、自分の信仰から救い出してくださいと、マルクスやレーニンの名を呼ぶと想像ができますか。」彼は笑い出した。「賢い答

えだね。」私は続けてこう言った。「技術者が橋を建造したとき、ねこが一匹無事に通れば、それでだいじょうぶだという証拠にはなりません。あなたが無神論者となっているという事実も、物事がうまく行っているときには、無神論が真理であることの証明にはなりません。重大な危機の瞬間には、無神論は続かないのです。」それから私は、レーニンの著書から引用し、レーニン自身、ソビエト連邦の首相となってからでさえ、物事がうまく行かなくなると祈ったものだということを話した。私たちは平安であり、穏やかに事態の発展を待つことができる。共産主義者のほうこそ、心穏やかでなく、新しい反宗教キャンペーンを始めようとしているのだ。このことによって、聖アウグスティヌスの言ったことば、「あなた（神）のうちに安らうまでは、魂に平安がない」を証明しているのである。

なぜ共産主義者でもキリストにかち得られるか

地下教会は、あなたがた自由陣営諸国のクリスチャンの援助を得れば、共産主義者の心をキリストに獲得し、世界の表面をぬり変えることができる。必ず彼らの心を捕えることができると思う。それは、共産主義者であることのほうが不自然なことだからだ。犬でさえ、自分がしゃぶる

こととのできる骨をほしがる。まして共産主義者の心は、自分が演じなければならない役割と、信じなければならない不合理な事がらに対して抵抗を感じている。

個々の共産主義者が、物質がすべてであって、私たちはある一定の型に組織された一塊の化合物質であることを主張し、死後、私たちは、塩とミネラルにもどると主張するとき、次のように尋ねれば十分である。「では、ずいぶんいろいろな国で、共産主義者が、その理想のために命をささげたのはどういうことですか。一塊の化合物が理想を持っていますか。ミネラルが、他人のために自らを犠牲にすることができますか。」これに対して、彼らは解答することができないのである。

そして、あの野蛮な行為！　人間は、獣のように野蛮なものに造られていないから、いつまでも野蛮であり続けることには耐えられない。私たちは、ナチの支配者の破滅に、その事実を見た。彼らのある者は自殺し、ある者は悔い改めて、その罪を告白した。

共産主義の国に、莫大な数の酔っぱらいがいることにも、何かうなずけるものがある。その中には、共産主義がぬぐい去ることのできない、もっと幅の広い生活へのあこがれが潜んでおり、共産主義ではそれはかなえられないものなのだ。普通のロシア人は、深みのある、気が大きく寛容な国民だ。共産主義は浅薄で表面的なものだ。共産主義者は、もっと深みのある生活を探求し

ているが、それをどこにも見つけることができない。そこでそれをアルコールに求めるしかないのだ。そして、自分が生きて行かなければならない、野蛮で欺瞞的な生活の恐怖を、アルコールの力を借りて表わすのである。ちょっとの間は、アルコールが自由にしてくれる。しかし、もし真理を知ることができれば、真理は永久に彼を解放してくれるのである。

ロシア占領下のブカレストで、私は一度、どうしても酒場にはいって行かなければ、という抵抗することのできない衝動を感じたことがある。私は妻を呼んで、いっしょに来るように言った。中にはいって見ると、ロシア人の大尉が、銃をかまえてもっと飲ませろと脅迫しているところだった。もうすでにひどく酔っぱらっていたので、彼の申し出は断わられた。人々は恐怖に青ざめていた。私は主人の所へ行った。主人は私を知っていた。私は、この大尉に酒をやってほしいとたのんだ。ただ私が彼のそばにすわって、彼を静めておくからと約束をしたのである。一本、また一本とぶどう酒が運ばれた。テーブルには、グラスが三つ置かれていた。大尉は、ていねいに、三つ全部にぶどう酒を注いだ。そして三杯とも自分で飲んだ。妻と私は少しも飲まなかった。彼はずいぶん酔ってはいたが、理性は働いていたようである。アルコールに慣れっこになっていたからである。私は、彼にキリストのことを話した。すると彼は、意外なことに、注意して聞き入った。

ついに彼はこう言った。「あなたがどういうかたであるか、お話しくださったから、私もどんな人間だかお話ししましょう。私は正教会の主教ですが、スターリンの時代に始まった大迫害の時、最初に信仰を否んだ者のひとりです。私は村から村へとめぐり歩いて、神は存在しないこと、主教として私は皆をだまして来たと言って説いて回りました。『私はうそつきです。他の主教たちもみな同じです』と私は言いました。熱意がかわれて、私は秘密警察の将校になりました。神が私に与えられた刑罰は、私がこの手で、クリスチャンを拷問にかけて殺してしまわなければならないということでした。だから今私が酒を飲んでいるのは、これで自分のやったことを忘れてしまいたいからです。でも、そうはいきません。」

共産主義者の多くが自殺する。あの偉大な詩人エセーニンとマイアコーブスキー、大作家のファデーブもそうだ。ファデーブは「幸福」という小説を書き終えたばかりであった。彼はその本の中で、幸福とは共産主義のために休みなく働くことだと説明している。彼自身、共産主義についての小説を脱稿すると、すぐにピストル自殺を遂げたほど幸福だったのだ。彼の魂は、こんな大うそをつくには、とうてい耐えられなかったのだ。ジェフやトンプキン――帝制時代の指導的大闘士――も、共産主義が実際にどう見えるかを直視することに耐えられないで自殺を遂げたのである。

共産主義者は不幸だ。彼らの大指導者でさえもそうである。スターリンは何とふしあわせだったことだろう！　自分のもとの同志をほとんど全部殺してしまってから、彼はいつ毒をもられるか、殺されるかと、絶えずびくびくしていた。彼の寝室は八部屋あり、どれも銀行の金庫のようなかぎがかかる仕組みになっていた。彼が、どの晩にどの寝室で寝るのか、だれも知っている者がいなかった。彼は、コックがまず自分の目の前で毒味をしてからでなければ、食事をしなかった。共産主義は、だれひとりとして、その指導者すら幸福にしない。彼らにはキリストが必要なのだ。共産主義をくつがえすことによって、私たちは共産主義の犠牲者を解放することができるばかりか、共産主義者自身をも解放することになるのだ。

地下教会は、奴隷化しているわが国民の最も深い要求を代表しているものである。

×　×　×

地下教会の顕著な特徴は、その熱心な信仰にある。

「ジョージ」という仮名を使った牧師は、その著書の中で、神の地下活動について次のような事件を語っている。ハンガリーで、あるロシア軍の大尉が、牧師に個人面会を申し込んだ。その大尉は、まだとても若く、生意気で、征服者という自分の役割を強く意識していた。集会室に通

されドアがしまると、彼は壁にかかっている十字架の方を見てうなずき、言った。「ご存じだと思いますが、あれはうそですね。あれはあなたがた牧師が貧乏人をだまして、金持ちが貧乏人を無知にしておきやすいようにする、ごまかしの道具にすぎないのです。さあ、ここには、私たちふたりしかいません。あなたは今まで、ほんとうは、イエス・キリストが神の子だと信じたことなどないのだ、と私に言ってください！」

牧師はにっこり笑った。「でも、若い気の毒なかた。もちろん私は信じています。ほんとうに。」

「私にそんなトリックはきかないぞ！　まじめに聞いているんだ。笑ってはいけない！」

彼は連発ピストルを引き出して、牧師のからだに突きつけた。

「うそだと言わないと、撃つぞ！」

「うそだとは言えません。真実なのですから。われらの主は、ほんとうに偽りなく神の子です」と牧師は言った。

大尉はピストルを床に放り投げて、この神の人をだきしめた。大粒の涙が、彼の目からはらはらとこぼれた。彼は叫んだ。

「ほんとうにそうだ！　それはほんとうなのだ。ただ私は、この信仰のために人が命まで投げ出すことを自分で確かめなければ、はっきり信じられなかった。ありがとう。あなたは、私の信

仰を強めてくれた。これからは、私もキリストのために死ぬことができる。あなたがそのやり方を示してくれた。」

ほかにもこういう例を知っている。ロシア軍がルーマニアを占領した時のことである。ふたりの武装したロシア兵が、銃を手にして教会にはいって来た。彼らは言った。「われわれは君たちの信仰を信じない。信仰を捨てない者は、ただちに射殺する。信仰を捨てる者は右に寄れ！」何人かが右に寄った。彼らは教会を出て家に帰るように命じられた。彼らは命からがら逃げて帰った。残ったクリスチャンだけになると、ロシア兵ふたりは、彼らをだきしめて言った。「私たちもクリスチャンです。でも、真理のためには死んでもよいと思っている人たちとだけ交わりを持ちたかったのです。」

こういう人々が、私たちの国で福音のために戦っている。彼らは福音のために戦っているだけではない。自由のためにも戦っているのである。

欧米のクリスチャンの多くの家庭では、時々、世的な音楽を聞いて時をすごす。私たちの家でも、大きな音で音楽を聞くことがある。でもそれは、福音を語る声が聞こえないようにし、近所の人がそれを聞いて秘密警察に通報するのを防ぐためで、地下活動を隠してくれるためのものである。

彼らが、西欧からの真剣なクリスチャンに会うことがある。そんなとき、彼らはどんなに喜ぶことであろう。

この文章を書いている者は、目立たない普通の人間にしかすぎない。でも、私は声なき人々の声なのだ。西欧では口止めされていて、決して表面に出ない人々の声なのだ。彼らの名において、私は、真摯な信仰と、キリスト教の諸問題の処理に真剣さを要請したい。彼らの名において、私は、共産圏諸国の忠実な苦難の地下教会のために、祈りと実際的な援助をお願いしたい。

× × ×

私たちは共産主義者をかち取ることができる。第一に、神がわれらの側におられるからだ。第二に、私たちのメッセージは、彼らの心の最も深いところの要求にこたえるものだからだ。

ナチの支配下で投獄されていた共産主義者たちは、困難な時には祈った、と私に告白した。共産党員の将校が、「イエスよ、イエスよ」とつぶやきながら死んで行ったのを目撃したことがある。

私たち国民の文化遺産はすべて私たちの側にあるのだから、私たちの勝利である。ロシア軍は、現代のキリスト教書を全部発禁することはできる。しかし、トルストイやドストエフスキーの著作がある。人々はその中からキリストの光を見いだすのだ。東ドイツのゲーテ、ポーランド

のシェンキーヴィッチなどもそうだ。ルーマニアの最も偉大な作家は、サドヴェアヌだ。共産主義者は、彼の「聖徒たちの生涯」という本を、「聖徒たちの伝説」という題で出版した。しかし、表題は変わっても、聖徒の生涯の模範は人々を感動させる。

彼らは、ラファエル、ミケランジェロ、レオナルド・ダ・ビンチを美術史から除外できない。これらの絵は、キリストについて語っているのだ。

私が共産主義者にキリストについて話すとき、その心の奥底にある霊的必要が私の同盟者つまり助け手となる。共産主義者が一番困難を感じるのは、私の議論に答えることではなく、彼自身の良心の声――これが私の味方である――を押し静めることだ。

マルクス主義の教授で、無神論の講義をする前に、神の助けを祈ったという人を私は個人的に知っている。また、共産主義者でありながら、遠方の秘密集会に出かけていた人たちも知っている。彼らは見つかったとき、地下集会に行ってはいなかったとうそをついた。彼らは、信仰に迫られて集会に行ったのに、その信仰に立つ勇気がなかったことを悔やんで泣いた。彼らもやはり人間である。

ひとりびとりがいったん信仰を持つと――とても幼い信仰でも――この信仰は発達し成長する。必ず信仰が勝利を得ることを私は確信する。というのは、地下教会の私たちは、信仰が征服

することを何度も見たからである。

共産主義者はキリストに愛されている。彼らをキリストにかち取ることができるし、かち取られなければならない。鉄のカーテン下の地下教会によって初めて彼らはかち取られる。すべての人の魂が救われるようにとの、イエスの心の望みを満たしたいと願う人は、だれでも地下教会の働きを支えるべきだ。イエスは「すべての国民を教えよ」と言われた。彼は決して鉄のカーテンの所で止まれとは言わなかった。神への忠実とその大命令に従おうとするならば、鉄のカーテンの背後に届くように迫られる。現在の世界人口の、三人にひとりの割合で、共産主義の下に奴隷化されている人々へ届かなければならない。

まずそこにある地下教会と協力して働くことによって、彼らに達することができる！

地下教会を構成する三つのグループ

第一のグループ……共産主義者によって追放された牧師、伝道者

共産主義国で地下教会を作り上げているのは、三つのグループである。第一のグループは、何千という数の、元牧師、元伝道者である。彼らは、福音を伝えるために妥協しなかったために教

会から追放され、その群れから除名されたのである。こういう、元牧師の多くが、何年も獄中生活をし、信仰のゆえに拷問に会った。釈放されると、彼らはただちに伝道を再開した。地下教会で、ひそかに効果的に伝道したのである。共産主義者が教会を閉鎖したり、もっと「信頼できる」牧師と取り替えたりしても、彼らは、農家の納屋や屋根裏や地下室や夜の干し草の草原など、信者が人知れず集まれる所ならどこででも、地下集会で表立たない伝道をして、以前にもまして効果的な牧会を続けた。こうした人々は、まさに「生ける殉教者」であり、決して伝道をやめようとしない人たちであり、またさらに加えられるかもしれない拷問と再度の逮捕の危険をも冒す人たちである。

第二のグループ……信徒の教会

地下教会の第二の部分は、莫大な数の献身した男女信徒の軍隊である。ぜひ理解していただきたいことだが、ロシアや中国には、名前だけの、微温的な中途半ぱな弱虫のクリスチャンはひとりもいない。クリスチャンの支払う値はあまりにも大きいのだ。もう一つ覚えられるべき点は、迫害がいつもりっぱなクリスチャンを、あかしするクリスチャン、魂をかち取るクリスチャンを生み出したことだ。共産主義者の迫害は、かえってクリスチャンに火をつけ、自由諸国ではまれ

にしか見られないような、真摯で献身的なクリスチャンを生み出した。迫害者たちには、クリスチャンになって、出会う人だれにでも伝道してキリストに導きたいと願わないでいられない理由が理解できないのである。

『赤い星』(ロシア国防省機関誌)は、ロシアのクリスチャンを攻撃して言った。「キリストの崇拝者たちは、みんなを、自分たちの貪欲なつめでひっかきたいと思っている」と。しかし、彼らの明るく輝くクリスチャン生活は、同じ村人や近所の人たちの愛と尊敬をかち取る。どの町、どの村でも、クリスチャンはだれよりも好感を持たれ、愛される住民なのである。どこかの母親が病気にかかって子どもたちをかまってやれないとき、訪れて来てめんどうをみてくれるのは、クリスチャンの母親である。男の人が病に倒れてたき木を切ることができないとき、代わって切ってくれるのはクリスチャンである。彼らはまさに、キリスト教を地で「生きて」いるのだ——こうして彼らがキリストのあかしを始めると、人々は耳を傾け、信じる——彼らの生活の中にキリストを見たからだ。認可を受けた牧師以外は、教会で公に語ることはできないから、何万という熱烈な献身的なクリスチャンが共産圏諸国のどの一角にもいて、市場で、村の井戸ばたで——どこでも行く先々で——魂をかち取り、あかしし、みことばに仕えているのである。共産主義の新聞にもしるしてあるように、クリスチャンの肉屋は、売っている肉の包み紙にそっと福音のト

ラクトをしのばせる。共産主義の出版社も認めているように、共産主義者の印刷所で責任ある地位について働いているクリスチャンは、夜おそくそっと印刷所にもどって来て印刷を始め、二、三千部のキリスト教文書を刷り上げて、日の出までには、またしめてしまう。同様に、モスクワのクリスチャンの子どもは、「ある所」から福音書を受け取ると、手書きの写しを何部か作る。それから子どもたちは、学校の戸棚にかかっている、自分の先生たちのオーバーのポケットに福音書を入れる。男女信徒からなるこの巨大な組織は、すでにどの共産主義国にも存在する、非常に強力で、効果的な、魂を獲得する宣教師軍である。共産国キューバについて、元の宣教師が言っている。本物の牧師が全部逮捕されたり、迫害を受けて、共産主義の牧師と交替させられてから、秘密の「信徒の集会」が現にできている。信徒の教会における、これら何百万もの、ささげきった忠実な心の燃えているクリスチャン信徒は、共産主義者が、彼らの壊滅を望んでしかける迫害の炎によって精練されてきたのである。

第三のグループ……公認の牧師、伝道者で、抑えられても沈黙してしまわない人たち

地下教会の第三の重要な部分を占めているのは、公認ではあるが、抑制され黙らされた「教会」の忠実な牧師の大集団である。地下教会は公認の教会から完全に分離した教会ではない。多くの

共産国、たとえばユーゴスラビア、ポーランド、ハンガリーなどでは、公認の教会の大ぜいの牧師が、地下教会の秘密活動に従事している。幾つかの国で、この二つの教会はうまく織り合わされているのである。これらの牧師は、彼らのちっぽけな一部屋きりの教会以外では、キリストについて語ることを許されていない。子どもの集会や若い人の集まりを持つことも禁じられている。クリスチャンでない人たちは、恐れて来ようとはしない。牧師は、病気の教会員の家を訪問して祈ることも許されない。彼らは、共産主義政府の規定で八方ふさがりにされ、「教会」と言っても全く無意味なものにされている。「宗教の自由」などなぶりものにされている抑圧に直面した牧師が、しばしば大胆に、彼らの自由を危険にさらしながら、共産政府の限度をはるかに越えた秘密集会を並行して持っているのだ。子どもにも青少年にも秘密伝道がなされている。彼らは、クリスチャンホームや地下室でひそかに伝道する。キリスト教文書を隠れた所で受け取り、飢えた魂にくばっている。公の許可の限界を無視し、彼らの回りに群がっているすべての飢え渇いた魂に伝道しているのである。表面では、おとなしく従順そうに見せかけながら、自由と命をかけて、ひそかに神のことばを広めている。こういう人たちのうちの大ぜいが、最近ロシアで摘発され逮捕された。そして数年間服役したのである。

こういう人たちが、地下教会の重要な第三の位置を占めている人々である。

共産主義政府によって追放され迫害された元牧師、信徒の教会、許可の限界をはるかに越えた大規模な伝道をひそかに行なっている公認の牧師、こういう人たちすべてが、地下教会で働いているのだ。しかも地下教会は、共産主義者がうち負かされるまで存続する。ある国では、一つの部分が他の部分より活動しているが、やはり、三つの部分が存在し、多大の危険を冒してキリストのために働いているのである。

共産圏の国をたびたび旅行する人で、宗教問題にとても興味を持っている人がもどって来て、自分は地下教会にお目にかかったことがないと書いた。ちょうどそれは、中央アフリカの未開の部族の間を旅行して帰って来て、「私は完全に調査した。彼ら全部に、散文的に話すのかと尋ねたが、みんな、話さないと答えた」というようなものである。実際には、彼らはみな、散文的に話しているのだが、それを知らないだけなのである。

一世紀のクリスチャンは、自分たちがクリスチャンだということを知らなかった。もし、彼らの宗教は何か、と尋ねたとしたら、彼らは、私たちはユダヤ人、イスラエル人、メシアのイエスを信じている者、兄弟、聖徒、神の子などと答えただろう。「クリスチャン」という名前は、ずっと後になって、アンテオケで初めて他の人たちからつけられたのである。ルターに従った人たちは、だれも自分たちがルーテル派だとは知らなかった。ルター自身、この名に対して、力をこ

めて抗議したのだ。

「地下教会」とは、共産主義者や、あらゆる共産圏の国々に同時にでき上がった秘密の組織に対して、東欧の宗教事情を調査する西欧の人々によってつけられた名前である。地下教会のメンバーは、自分たちの組織をこの名で呼ばない。彼らは自らをクリスチャンと呼び、神を信ずる者、神の子どもたちと呼ぶ。しかし彼らは、地下活動を行ない、地下で会合をし、秘密集会で福音を伝える。時に、そういう席に外国人が列していることがあるが、そういう人が、地下教会を見たことがないと抗議するのである。それは、敵から、またこのすばらしい秘密組織を、外側から愛のまなざしをもって見ている人々から与えられた、実に適切な名前である。

欧米をくまなく旅行して何年もすごしているうち、一度もソビエトのスパイ網に出会わないですんでいるが、それでも、このスパイ網が存在しないという意味にはならない。ただ、好奇的な旅行者にその姿を見せるほど、彼らが愚かでないというだけのことである。

次の章で、ソビエトの新聞からの引用文を少し紹介するが、それは、この勇敢な地下教会の存在、そして、増大しつつあるその重要性を証明するものである。

6　勝ち進むキリスト教

前に私は、共産主義国ルーマニアにおいてと同様に、ソビエト軍隊の中でも、ひそかにキリストのメッセージを伝えた私たち自身の経験をお話しした。共産主義者に、また彼らに抑圧されている人々にキリストを宣べ伝えるための援助について、あなたがたに訴えて来た。私のチャレンジは幻影であって、実行不可能なことだろうか。それとも現実的なことなのだろうか。地下教会は、今でも、ロシアや他の国に存在しているのだろうか。それらの国での地下活動は、今でも可能なのだろうか。こういう質問に対し、私たちがお答えするのにとてもよいニュースがある。

共産主義者は、共産政権五十周年を祝っている。しかし、彼らの勝利は敗北なのだ。キリスト教の勝利であって、共産主義のものではない。私たちの組織が徹底的に調べ上げたロシアの新聞社には、地下教会の情報がいっぱいはいっている。初めてのことだが、地下教会は非常に強力になったので、半ば公にさえ活動しており、共産主義者を震え上がらせている。他の出所からの情

報が、この共産主義新聞の報告を確認している。

覚えていただきたい。地下教会はまるで氷山のようだということを！　そのほとんどが表に出ていないが、わずかな部分はしばしば外に出ているのだ。以下の何ページかを費やして、最も重大なニュースを短くまとめたものでお知らせしよう。

氷山の一角

一九六六年十一月七日、コーカサスのスフミで、地下教会は大規模な野外集会を開いた。他の都市からも大ぜいの信者が来て、この集会に出席した。講壇への招きの後、四十七人の若い人々がキリストを受け入れ、その場ですなわち黒海で、ちょうど聖書の時代のように洗礼を受けた。

その前に教育の期間はなかった。共産政府の専制が五十年続いた結果、聖書も他のキリスト教の本もなく、神学校の本もなかったため、地下教会の牧師は神学の訓練を受けていなかった。しかし、あの執事ピリポの場合もそうだった。宦官におそらく一時間くらい話したとき、宦官は彼に尋ねた。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」そこでピリポは言った。「もしあなたが心底から信じるならば、よいのです」（使徒

八・三六)。そこで彼らはすぐに水の中へ降りて行き、この回心者はバプテスマを受けたのである。

黒海には十分水がある。そこで地下教会は、聖書の時代の慣習を再び始めたのである。

『ウチテルスカヤ』(教師の雑誌)一九六六年八月二十三日号に、次のようなニュースがのっている。ロストフ・オン・ドンで、法律に従って会員を登録すること、また共産主義政府によって任命されたいわゆる「指導者たち」に従うことを拒否したバプテストの人たちが、街頭デモを行なったというニュースである。

それは五月一日のことだった。ちょうどイエスが安息日に奇蹟を行なって反対者のパリサイ人に挑戦されたように、地下教会も、共産主義の祝日を選んで、共産政府の法律にいどむのである。

五月一日は祝日で、共産主義者はいつも大きなデモを行ない、みな強制的に参加させられる。しかし今回は、ロシアの第二勢力——地下教会——も、街頭に姿を現わした。その日、千五百人の信者が集まった。彼らを押し出したのはただ神の愛だった。彼らは自分たちの自由を危険にさらしていることをわきまえていた。また刑務所では、飢餓と拷問が彼らを待ちかまえていることも承知の上だった。

ロシアの信者ならだれでも、バルナウルの福音的なクリスチャンによって印刷された『ひそか

な顕現』を知っている。その中に、クルンダの村のフマラ姉が、どのようにして夫の獄死の通知を受けたかということが描写されている。彼女は四人の幼い子どもをかかえた未亡人となった。彼女が夫のなきがらを受け取ったとき、その手に手錠のあとがあり、手にも指にも足の裏にもひどい火傷をしていた。胃の下の方にはナイフの跡があり、右足ははれ、両足とも打たれた跡があった。全身はひどく打たれたらしく傷だらけであった。

ロストフ・オン・ドンの公のデモに参加した信者はみな、これこそ自分の運命ともなりかねないことを知っていた。それでも彼らはやって来たのである。

しかし彼らはまた、回心後三か月にして神のために命をささげたこの殉教者が、次のような聖句のプラカードを持った信徒の大群衆の前で葬られたことも知っていた。

「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」

「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなど恐れてはなりません。」

「私は、神のことばのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。」

この殉教者の模範が、ロストフ・オン・ドンにいる人々を励ました。彼らは、一軒の小さな家の回りの路上に集まった。人々はあらゆる所にいた。ある者は近くの家の屋根に、ある者は、昔のザアカイのように木に上っていた。そこで八十人が回心した。そのほとんどが若い人々だっ

た。この人たちのうち二十三人は、もと共産青年同盟のメンバーだった。

信者たちは、市中を横断してドン河に向かって歩いて行った。そこでバプテスマが行なわれたのである。共産政府の警察官を満載した自動車が何台も到着して、河の堤にいる信者を包囲した。彼らは、責任者の兄弟たちを逮捕しようと思ったのだ（千五百人を捕えることはできなかったのだ！）信者たちは、すぐにひざまずいて熱烈な祈りをささげ、神の民が守られ、その日の礼拝を持つことが許されるようにと神に祈った。それから兄弟姉妹たちは肩を組んで立ち並び――警察の逮捕を防ぎたいと願って――礼拝を導いている兄弟たちを取り囲んだ。とても緊迫した事態になった。

『ウチテルスカヤ・ガゼタ』誌は、ロストフの「不法」のバプテスト連盟は、地下の印刷所を持っていると報告している。（ロシアでは、「バプテスト」ということばには、福音的クリスチャンやペンテコステの人々も含まれている）。青年たちに、信仰に堅く立てと呼びかけた出版物が印刷されている。こういう地下出版物の一つに、クリスチャンの両親がなすべきこととして求められていることがある。私は、それはとてもよいことだと思っている。「一時的なことで思いわずらわないことを学ぶために、子どもたちを埋葬式に連れて行きなさい。」親はまた、共産主義の学校で毒されてくる無神論の解毒剤として、子どもたちにキリスト教教育を施すよう要求され

ている。『ウチテルスカヤ・ガゼタ』誌は、その記事の最後に、次のような問いを発している。「教師は、宗教によって子どもたちが痴呆化されている家族の生き方に対して、なんであんなにおずおずと接しているのか」と。

この教師機関誌はまた、ひそかにバプテスマを行なった地下の働き人たちの裁判で起こったことを描写している。「証人として呼ばれた若い信者たちは、共産政府の法廷を無視し、軽蔑していた。彼らは怒り、熱狂的にふるまった。若い女性の傍聴人は、弁護人たちを賛嘆の目で見つめ、無神論者の公衆には賛成できないという目つきをしていた。」

地下教会のメンバーは、むち打ちの刑と投獄の危険をも冒して、ロシアの共産党本部前で、自由を叫んだ。私たちは、ソビエト連邦の福音的バプテスト教会の「違法の」委員会よりの秘密文書を持っている。裏切り者カレーブにひきいられた共産党に抑圧されている「バプテスト連盟」に対抗するものである。このカレーブという人物は、共産主義者で、クリスチャン集団虐殺者の人間性をほめたたえ、『現代のソビエト・ライフ』誌（一九六三年六月号）で、ソビエトを支配している「自由」について大げさなことを書いている。この文書は、秘密の経路によって西欧に持ち出されたものである。

その中で、もう一つの英雄的なデモについて語られている。今度はモスクワの真中での出来事

である。この声明書から翻訳してみよう。「緊急通知。愛する兄弟姉妹よ。われわれの父なる神と主イエス・キリストからの祝福と平安があなたがたにあるように。急いであなたがたに伝える。五百名に及ぶ福音的バプテストのキリスト教会代表が、一九六六年五月十六日、中央権力機関との調停のためにモスクワに上り、要請事項の受諾を願って、社会主義ソビエト共和国連邦の共産党中央委員会の建物に出かけた。われわれは、ブレジネフ書記長あての陳情書を手渡した。」

この声明書には、これらの五百人が建物の前に一日中立っていたとしるしてある。それは、共産主義に対して行なわれたモスクワでの初めての公式の抗議デモであった。しかも地下教会の代表によって、このことが行なわれたのである。その日の終わりに、彼らはブレジネフあての第二の請願書を渡した。その中で彼らは、ストロガノフというある「同志」がブレジネフへの陳情書を渡すのを拒否し、彼らを脅迫したという口上がしるしてあった。

五百人の代表は、その晩、路上で徹夜した。自動車が通り、ほこりとどろをかけられ、また雨も降って来た。彼らはこういう状態でもなお、共産党ビルの前で朝までがんばった。翌日、五百人の代表は、建物の中にはいって、共産政府の下級官吏に会うようにとの提案を受けた。しかし、「権威筋を尋ねた信者は、証人のない建物の中にはいると、しばしば打たれたことを知っていたので、代表は、だれからともなく申し出を拒否して、ブレジネフに会うのを待ち続けた。」

その時、避けられぬ事態が起こった。

午後一時四十五分、二十八台のバスが来て、信者に対する猛烈な復讐が始まった。「われわれは輪を作ってお互いの手をつなぎ、賛美歌を歌った。十字架をになうときこそ、われらの生涯の最良の日である、と。秘密警察の男たちは、若者も年寄りもかまわず打ちたたき始めた。列から人をはぎ取って、顔や頭を打ち、アスファルトにたたきつけた。兄弟たち何人かの髪の毛をつかんでバスの方に引きずって行った。逃げようとする者は、意識を失うまでたたかれた。バスが信者でいっぱいになると、彼らは見知らぬ場所へ連れて行かれた。われわれの兄弟姉妹たちの歌が、秘密警察のバスから聞こえて来た。これらいっさいのことは、大ぜいの群衆の目の前で起こったのである。」

さて、もっとすばらしいことが続いて起こった。五百人が逮捕され、きっと拷問を受けたに違いないと思われたのに、G・ビンズ兄弟ともうひとりの指導者格の兄弟ホレフ（キリストの群れの真の牧者たち）は、同じ共産党の中央委員の所へ出かけて行く勇気を持っていた。ちょうどバプテスマのヨハネが捕えられたのちに、イエスが同じ場所で、苦しみにあったヨハネと同じことばで、「悔い改めよ。天国は近づいた」と公の説教を始められたときのようであった。ビンズとホレフは、捕えられた代表はどこにいるのかと尋ね、彼らの釈放を要求した。この果敢な兄弟ふ

たりは、あっさり消えてしまった。後に、彼らがレフオルトフスカヤの刑務所に入れられたというニュースを聞いた。

こういう地下教会のクリスチャンは恐れていただろうか。いや、決してそんなことはない。他の人が、すぐに自由をかけて、われわれの目の前にある声明書を印刷して出したのである。彼らはその中に出来事の次第をしるし、次のように聖句をもって訴えている。「キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜わったのです」(ピリピ一・二九)。「このような苦難の中にあっても、動揺する者がひとりもないようにするためでした。あなたがた自身が知っているとおり、私たちはこのような苦難に会うように定められているのです」(Ⅰテサロニケ三・三)。また、ヘブル人への手紙一二・二を引用し、信者たちに、「信仰の創始者であり、完成者であるイエス」「ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、恥をものとも思わずに十字架を忍ばれたかた」を見つめるよう呼びかけている。

地下教会は、ロストフ、モスクワ、そしてロシア中において、無神論が青少年を毒することに公然と反対した。彼らは、共産主義者の毒薬に対して、また公認の教会の裏切り者の指導者たちに抗議している。それについて彼らの秘密声明書に次のようにしるされている。「われらの時代に、サタンが指令を発し、『教会』は神の戒めに反するすべての決定を受け入れている。」(一九

六六年十月四日付のプラウダ・ウクライナに引用されている)。

プラウダ・ヴォストカ紙は、アメリカからの福音放送を聞くグループを作っていたアレクセー・ネーロフ、ヴォリス・ガルマーショフとアクセン・ズーボフに対する公判を発表した。彼らはこのメッセージをテープに録音し、あとで人々に回したのである。

彼らはまた、「遠足」や「芸術サークル」の形で秘密集会を組織したかどで起訴された。このようにして地下教会は活動している。ちょうど初代教会がローマのカタコム(地下墓所)で活動したのと同じように——。

一九六六年九月十五日付のソビエトスカヤ・モルダビアは、地下教会が小冊子、パンフレットを複写しているとしるしている。彼らは法律で禁じられているのに、公の場所に集まったり、あちこち歩いてキリストのあかしをしたのである。

同じ新聞に、レニからチシナウに行く汽車の中で、三人の少年と四人の少女が、賛美歌「若きいのちをキリストにささげよう」を歌ったことを詳しくしるしている。その新聞の記者自身、反感を覚えたと告白した。というのは、この信者たちは、「街路でも、駅でも、汽車やバスの中でも、公共機関の建物の中でも」説教をするからである。これまた、ロシアで現在働いている地下教会の姿なのである。

彼らの指導者のひとり、グランドチェビーシーが法廷に連れ出された。すると、「熱狂的な」マダンに率いられた兄弟たちがやって来て、法廷の中で賛美した。

五月一日、コプシーグ村とザハロフカ村のクリスチャンが、自分たちの教会がないので、森の中でひそかに聖なる礼拝を持った。彼らはまた、誕生日パーティーと称して集会を開く。(四、五人の家族のクリスチャンホームの多くが、秘密集会のかくれみのとして、一年に三十五回の「誕生日」を持つ)。

刑務所も拷問も、地下教会のクリスチャンを恐れさせることはできない。初代教会がそうであったように、迫害は彼らの献身を深めるだけである。

一九六六年十月四日付のプラウダ・ウクライナ紙は、プロコフィエフ兄弟——ロシア地下教会の指導者のひとり——について、次のようにしるした。「彼はすでに三回も投獄されたけれど、釈放されるとすぐに秘密の日曜学校を再開する」と。彼は今もまた捕えられている。

彼は秘密の宣言書にこう書いた。「人間の規則に従うことによって(彼が言っているのは共産政府の法律のことである)、公認の教会は、自らの手で神の祝福を奪い去った。」

判決を受けたロシアの兄弟たちのことを聞かれるとき、どうか欧米の刑務所のことを想像するような愚を決してしないでほしい。ロシアの刑務所が意味するものは、飢餓と拷問と洗脳なので

ある。

一九六六年九月の『科学と宗教』は、次のように報告している。「クリスチャンは、表紙は『オゴニオク』、『ルック』や『タイム』のような定期刊行物に見せかけ、中味が福音文書となっている本を配布している」と。見かけは、レオ・トルストイの小説『アンナ・カレーニナ』だが、手渡している本の中味は、分冊聖書という例もある。

彼らは歌を歌う。メロディーは「インターナショナル」、歌詞はキリストを賛美する歌である(一九六六年六月三十日付カザクスタンスカヤ・プラウダによる)。

シベリヤのクランダで発表された秘密の手紙には、クリスチャンが次のように述べている。すなわち、「バプテスト」の公認の指導者たちは、「教会を破壊し、この世における教会の真実なしもべたちを、まるで、イエス・キリストを裏切りピラトに渡した大祭司や律法学者、パリサイ人と同じようなことをして殺したのだ」と。しかし、忠実な地下教会は、なお働きを続けているのだ。

キリストの花嫁は主に仕えることをやめない。私が地下教会は共産主義者をキリストにかち取っていると主張するとき、私がまちがっていないことを、共産主義者自身が認めるのである。共産主義者をキリストに導くことはできるのだ。

『ラキンスキー・ラボシー』（バクの労働者）の一九六六年四月二十七日号には、キリストに導かれたタニア・シウブノバ（共産青年同盟の会員）の手紙が記録されている。その手紙は、共産政府の権威筋に押収されたものである。

「愛するナデアおばさん、わたしたちの愛する主からの祝福を送ります。ナデアおばさん、おばさんはこういうことばがおわかりだと信んじています。『あなたの敵を愛しなさい。あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを憎む人々に善を行ない、あなたを意地悪く利用する人々のために祈りなさい。』」

この手紙が押収されたことによって、彼女や、ほかにも多くの若い共産主義者をキリストに導いたピョートル・セレブレニコフ兄弟は、刑務所に行かなければならなくなった。共産党新聞は、彼の説教の一つから引用している。「私たちは、初代のクリスチャンのように、私たちの救い主を信じなければならない。私たちにとって重要な法律は聖書だ。私たちは他のものは認めない。私たちは、急いで人々を、特に若い人たちを罪から救い出さなければならない。」ソビエトの法律は、若い人々にキリストについて語ることを禁じていると言われて、彼は、「私たちにとっての唯一の法律は聖書です」と答えた。残酷な無神論者の専横政治が国を支配しているところでは、まことに正常な答えであると言わなければならない。

それから共産党機関紙は、次のような「野蛮な」光景を描写している。「若い男女が霊的な賛美歌を歌っている。彼らは儀式的なバプテスマを受けて悪を行なっている。敵への愛という裏切り行為を行なっている。」

『ラキンスキー・ラボシー』によると、共産青年同盟の会員となっている多くの青年男女が、実際にクリスチャンであるという。この新聞は次のようなことばで記事を結んでいる。「共産主義の学校のなんと無力であることか、なんと退屈で、なんと光のないことか……。それは、牧師がその弟子たちを、彼らの無関心な教育者たちから奪回できるほどのものなのだ。」

一九六六年六月三十日付の『カザクスタンスカヤ・プラウダ』は、一番の成績をとった最優秀の生徒がクリスチャン少年であったことを発見して恐れをなしている。

一九六六年一月十七日付の『キルギズスカヤ・プラウダ』は、母親に向かって、地下教会のキリスト教リーフレットの引用をのせている。「ゆりかごの時から、われわれの子どもの生涯を神にささげるために力を合わせ、祈りを共にしよう！　この世の影響から子どもを守ろう！」と。

こういう努力が成功して来たのである。共産党の機関紙がその証言をしているのだ！　キリスト教は幼少年の間で前進をしている。

ロシアのセリアビンスクからの新聞には、共産青年同盟のニナという少女が、どのようにして

クリスチャンになったかが描かれている。それは、秘密のキリスト教集会にはいったことによってだった。

一九六六年九月号の『ソビエトスカヤ・ジュスチチア』は、次のような地下集会を描写している。「それは真夜中に行なわれる。隠れた所で、自分の影にさえ油断を怠らない人々が、いろいろな地方からやって来ていた。兄弟たちは、天井のとても低い部屋にいっぱいはいった。あまり大ぜいなので、ひざまずく場所もないほどだった。空気不足のために、原始的なガス燈の火が消えてしまった。そこに出席している人々の顔から汗がしたたり落ちた。外の道路では、主のしもべのひとりが警察を見張っていた。」しかし、ニナはこういう集まりで、暖かい抱擁をもってやさしく迎えられた。「彼らは、今私が持っているように、大いなる啓発的な信仰、神への信仰を持っていました。神は私たちを、そのみ守りの翼の陰にかくまわれるのです。私を知っている共産青年同盟の会員が、私のそばを通ってあいさつもしないのを気にかけまいと思います。私をあざけりの目で見て、まるで平手打ちをくわせるように『バプテストのやつめ！』と呼ばせておきましょう！　彼らの好きなようにさせておけばよいのです。私には、彼らは必要ないのですから。」

彼女のような若い共産主義者が大ぜい、終わりまでキリストに仕える決心をした。

一九六六年一月十八日付の『カザクスタンスカヤ・プラウダ』は次のような記事を詳しくのせ

ている。すなわち、ペンテコステのクリスチャンの裁判で、公にクリスチャンの賛美歌を歌ったという罪の判決が下った時、被告たちはひざまずいてこう言った。「神の御手に私たちをゆだねます。われらの主よ、感謝します。信仰のゆえに苦しむことを許して下さったことを」と。この時、聴衆の中で信者たちが歌い出した。たった今、そのために投獄と拷問の判決を兄弟たちが受けたばかりの、同じ賛美歌を！

共産政府の法廷に引き出された地下教会のクリスチャンが答える答えは、神から霊感を受けたものである。ある判事が、「なぜあなたは、人々をあなたの禁止されている宗派の一つに引きつけようとするのですか」ときびしく追求すると、クリスチャンの姉妹は、「私たちの目的は、全世界をキリストにかち取ることです」と答えた。

「あなたがたの宗教は非科学的だ」と、ある裁判官は冷笑した。それに対して被告の学生は答えた。「あなたは、アインシュタインやニュートンより科学をご存じなのですか。彼らはクリスチャンだったのですよ。この宇宙にはアインシュタインの名がついています。私は高校でアインシュタインの宇宙ということを習いました。そのアインシュタインはこう書いています。『もし預言者の教えからなっているユダヤ教とキリスト教を、イエスが教えられたようにきよいものとするならば、すなわち、後に続いたもの、特に僧職の悪だくみからきよめるなら、私たちは、世

界をすべての社会悪から救うことのできる宗教を持っていることになる。この宗教を勝利に至らせるために全力を尽くすことが、すべての人の聖なる義務である』と。また、私たちの国の偉大な哲学者バブロフのことを考えてごらんなさい。彼はクリスチャンであったと私たちの本に書いてあるではありませんか。マルクスでさえ、『資本論』の序文の中で、『キリスト教、特にプロテスタントは、罪に破壊された人格を改造するのに理想的な宗教である』と言いました。マルクスが、人格改造のためにクリスチャンになることを教えてくれたのです。マルクス主義者のあなたが、どうしてこのことのために私をさばくことができますか。」なぜ判事が一言も返せず黙ってしまったか、よくわかるだろう。

同じように、非科学的な宗教だと告発されたことに対して、あるクリスチャンは、法廷でこう答えた。「裁判官、あなたは、クロロホルムやいろいろな薬の発見者のシンプソンのように偉大な科学者ではありません。彼は人からどの発見が最大のものですかと尋ねられたとき、こう答えました。『それは、クロロホルムではありません。私の最大の発見は、私が罪人であり、神の恵みによって救われることを知ったことです。』」クリスチャンの実生活と自己犠牲、信仰のためにいつでも血を流す用意のあることが、地下教会によって表わされた最も大きな論点であった。あの有名なアフリカの宣教師アルベルト・シュバイツァーが言った「痛みを帯びたきよき交わり」

であり、悲しみの人イエスにつく交わりなのである。地下教会は、その救い主への愛のきずなで結ばれている。同じきずなが教会のメンバーを互いに結び合わせている。この世の中で、だれも彼らを打ち負かす者はいない。

ひそかに持ち出された一通の手紙の中に、地下教会は次のように書いている。「私たちは良いクリスチャンになることを祈りません。神がかくあれと望まれるクリスチャンにだけなるように祈ります。それは、神の栄光のために、喜んで十字架をになうクリスチャンになることです。」

イエスの教えに従って、へびのようにさとい知恵をもって、クリスチャンは、質問にあっても、法廷に立たされても、自分たちの指導者はだれかという答えをいつも拒否する。

『プラウダ・ボストカ』(東の真理)の一九六六年一月十五日付によると、被告のマリア・セプシウクは、だれが彼女をキリストに導いたかと尋ねられて、「神が私をひいて、会衆の中に導いてくださったのです」と答えた。また他の人たちは、「あなたの指導者はだれですか」と聞かれて、「私たちには人間の指導者はありません」と答えた。

クリスチャンの子どもたちは、「ピオニールをやめて、赤ネクタイをはずすようにと、だれが教えてくれたの?」と尋ねられると、「私たちは自分の考えでやったんです。だれも教えてくれませんでした」と答えた。

あるところでは以上述べたように、「氷山」の一角が姿を見せるけれど、他の所では、クリスチャンは、指導者の逮捕を避けるために、自らバプテスマを施す。ある所では、バプテスマは川で行なわれ、洗礼を授ける者も受ける者もマスクをはめて、だれにも写真をとられないようにする。

一九六四年一月三十日付の『ウチテルスカヤ・ガゼタ』は、ヴォルネシノー・マルスキー地方のヴォルニン村での無神論の講義の模様を語っている。講師の話が終わるとすぐ、「信者たちは無神論に対して公然と質問の矢を放った。」無神論の講師は、それに答えられなかった。彼らはこういう質問をしたのである。「あなたがた共産主義者は、口では言っても実行しない道徳律——たとえば『盗むな』とか『殺すな』とかいう——をどこから手に入れたのですか。」クリスチャンは、こういう原則はすべて、共産主義者が対抗して戦っている聖書から来ていることを示した。講師は完全に混乱してしまって、その講義は、キリスト信者の勝利のうちに終わった。

地下教会の迫害は激しくなっている

地下教会のクリスチャンは、今日も、以前にもまして苦しみの中にいる。すべての宗教はロシ

アで迫害されている。共産圏の国々でユダヤ人が抑圧されていることを知るクリスチャンの心は張り裂けんばかりである。しかし、迫害の第一目標は地下教会なのである。ソビエトの新聞は、集団逮捕と裁判所風景を報道している。ある所では、八十二人のクリスチャンが犯罪人の収容所に入れられた。二、三日後、二十二人が「長すぎた祈り」のために死んだ。いったい長い祈りが、人を殺したことが今までにあるだろうか。彼らがどういうところを通ったか想像がつくだろう。

彼らに課せられた苦しみの最悪のものは、次のことである。もし自分の子どもにキリストのことを教えていることが発覚すれば、子どもたちは、生涯自分たちから引き離されてしまい、訪問の権利もなくなることである。

ソビエト連邦は、「教育の分野における差別待遇に反対する」国際連合宣言に署名したが、その宣言には次のような条項が規定してある。すなわち「両親は自分の信ずるところにしたがって、子どもに、宗教、道徳教育を確保する権利を持たなければならない」とある。ソビエト連邦公認のバプテスト連盟の指導者である裏切り者カレーブは、この権利がロシアで事実守られていると確認している。そして、だまされやすい人たちは、彼のことばを信じているのだ。次のソビエトの新聞の言うことを聞いていただきたい。

『ソビエトスカヤ・ロシヤ』(一九六三年六月四日付)は、バプテストのマクリンコーワが、子

どもたちをキリスト信仰に導き、ピオニールのネクタイをしめることを禁じたために六人の子どもを取り上げられたことを報道している。その判決を聞いたとき、彼女は、「私は信仰のために苦しみます」と言っただけだった。彼女は、自分から引き離された子どもたちのために下宿料を払わなければならない。子どもたちは今、無神論に毒されている。クリスチャンの母親よ、彼女の苦しみを考えてみるがよい！

『ウチテルスカヤ・ガゼタ紙』は、同じことが、イグナチー・ムーリンとその妻に起こったことを告げている。判事は彼らに信仰を捨てるように命じた。「神と娘のどちらかを選びなさい。神を選ぶのか。」父親は答えた。「私は信仰を捨てません」と。

パウロは、「すべてのことを働かせて益としてくださる」と言っている。クリスチャンとして育てられた子どもたちが、親から引き離されて、共産主義の学校に入れられたのを私は見て来た。彼らは無神論で毒されなかった。かえって、家庭で学んだ信仰が他の子どもに広がって行ったのだ！　聖書は、だれでも自分の子どもをイエスより愛する人はキリストにふさわしくないと言っている。このことばが、鉄のカーテンの背後では、実に深い意味を持っているのだ。一週間あなたの子どもを見ないで生活してみなさい。そうすれば、ロシアにいる兄弟たちの苦しみが少しは理解できるだろう。

プロテスタント地下教会について語るだけでは不公平だろう。

ロシア正教会のクリスチャンも全く変えられている。彼らのうち何百万人もが、刑務所を通過して来た。そこにはロザリオの鎖も、はりつけの十字架も、聖像も、香も、ろうそくもない。信徒が獄中にいても、そこには任職の主教もいない。主教には主教服はなく、聖別すべき小麦のパンもぶどう酒もない。聖油もない。読み上げるための祈祷書もない。そこで彼らは、こうした物が何もなくても、直接神に近づいて祈ればよいのだということを発見したのである。祈り始めると、神は彼らに聖霊を注ぎ始められた。ファンダメンタルなキリスト教とたいへん似た純粋な霊的覚醒がロシア正教会の中に起こっている。

ロシアで起こっていることは衛星国にも起こっており、そこにも地下の正教会がある。それは事実、福音的であり、ファンダメンタルであり、神との親しい交わりを持っている。正教会の儀式は、習慣の力による以外ほとんど守られていない。この地下の正教会も、偉大な殉教者を多く出した。今あの年老いたカルガのエルモーゲン監督がどこにいるか言える人があるだろうか。彼は貴族制度と神なき共産政府の裏切り的協力にあえて抗議したのである。

共産政府五十周年！ それなのにロシアの新聞は地下教会の勝利の記事で満ちている。ことばに表わし得ないほどの患難を経て来たけれど、彼らは地下教会を忠実に守り、そして成長してい

るのだ！

ルーマニアで私たちは、軍隊の中に、秘密の働きを通して種をまいて来た。ロシア本国にいる人々にも、ロシア兵に侵略を受けた他の国々にも同じことがなされた。種はみのった。

共産主義世界はキリストに勝ち取ることができる。共産主義者もクリスチャンになれる。私たちが援助すれば彼らに抑圧されている人々もそうだ。私の意見が正しいという証拠は、地下教会がソビエト連邦でも中国でも、ほとんどすべての共産圏諸国で盛んであるということである。

恐ろしい事情の下にある私たちの友であるクリスチャンが、どんなにすばらしいかを示すために、ロシアからの手紙を何通か（それはロシアの刑務所から来た最後の手紙なのだが）、お見せしよう。

共産主義者の少女ヴァリアが
キリストを見いだし、あかしして、奴隷労働者となる

初めの三通の手紙は、ヴァリアをキリストに導いたクリスチャンの少女マリアからである。

第一信

前略、私はここで生き続けています。みんなから愛されています。共産青年同盟の獄房の人からも愛されています。ある少女はこう言いました。「あなたが何なのかよくわからないわ。ここでは、たくさんの人があなたを侮辱し傷つけているのに、まだあなたは、みんなを愛しているんですもの。」私は、神が、すべての人を愛すること、友ばかりでなく、敵をも愛することを教えてくださったのだと答えました。以前、この少女は私にずいぶん意地悪をしましたけれど、私は特別の関心をもって彼女のために祈りました。彼女が、彼女を愛することができるか、と私に尋ねたとき、私は彼女をだきしめました。そして私たちはふたりとも泣き出してしまいました。今は、私たちはいっしょに祈ります。

彼女のために祈ってください。その名はヴァリアと言います。

人が大声で神を否定するのを聞くと、まるでほんとうにそう思っているように見えます。でもそのような人の多くが、口では神をのろっても、心の中では強い求めをいだいていることが生活の中に現われているのです。そして、その心のうめきを聞かされるのです。……こういう人たちは何かを求めています。神なしの生活が持つ内的なむなしさを満たしたいと願っているのです。

キリストにあるあなたの姉妹マリアより

第二信

前の手紙でヴァリアという無神論者の少女のことを書きました。今、愛する皆さんに、私たちの大きな喜びを早くお知らせしたいのです。ヴァリアは、キリストを自分の個人的な救い主として受け入れました。そして、このことを、みんなの前で公然とあかししているのです。

彼女は、キリストを信じ、救いの喜びを知ったとき、自分をひどくみじめに感じました。というのは、彼女は、以前神は存在しないと宣伝していたからです。彼女は自分のあやまちをつぐなう決心をしました。

私たちはヴァリアといっしょに、神なき人々の集会に行きました。彼女に行くのを差し控えるように注意したのですが、むだでした。彼女が行ったので、私もついて行って何が起こるか見ようとしました。共産党の歌（その歌にはヴァリアは加わりませんでした）を全体で歌った後に、彼女は発言させてくれるようにたのみました。彼女の番が来たとき、彼女は前に出て行って、全会衆の前に立ちました。彼女は集まっている人々の前で、大胆に、しかも感情をこめて、キリストが自分の救い主であることをあかししました。また、キリストを受け入れるまでは霊の目が閉

ざされていたので、自分が永遠の滅びに向かって進んでいること、また他の人々も滅びに導いていることがわからなかったことを許して下さい、と以前の同志たちに願いました。彼女は、罪の道を捨てて、キリストのところに来るようにと、みんなに哀願しました。

会場はシーンとなって、ことばをはさむ者もありませんでした。話し終わると、彼女はすばらしい声でクリスチャンの賛美歌を歌いました。「私はキリストを宣べ伝えることを恥としない／キリストは私のために死なれた／キリストの教え、キリストの十字架の力を私は守る」と。

そして……それから、彼らは私たちのヴァリアを引っぱって行ってしまいました。

きょうは五月九日です。彼女のことは何もわかっていません。でも神は彼女を救い出すことのできる力をお持ちです。祈ってください。

あなたがたのマリアより

第三信

昨日、八月二日、私は獄中で、愛するヴァリアと話しました。彼女のことを考えると、私の心は血のにじむ思いです。実際、彼女はまだ子どもなのです。まだ十九才なんですもの。主を信ずる者としても、霊的な赤ちゃんです。でも心の底から主を愛していますし、すぐに険しい道に進

みました。かわいそうなこの少女は、とてもおなかをすかせています。彼女が刑務所にいることがわかったとき、私たちは彼女に小包を送り始めました。しかし、送った物の中から彼女が受け取る分は、ほんのわずかなのです。

昨日私が会った時には、彼女は、やせて青ざめ、ひどく打たれた様子でした。ただその目だけが、神の平安と天来の喜びを示していました。

そう、私の愛する人たちよ。キリストのすばらしい平安を経験した人でなければ、このことは理解することができませんね。……でもこの平安を持つ人は何と幸いなことでしょう。キリストにある私たちにとって、苦難も欲求不満も自分をとどめるものではありませんもの。

鉄格子をはさんで私は尋ねました。「ヴァリア、あなたがしたことを後悔していない?」「いいえ」と彼女は答えました。「釈放されたら、私はもう一度、彼らの所に出かけて行って、キリストの偉大な愛について話します。私が苦しんでいると思わないでください。主が私を深く愛していてくださって、主の御名のために耐え忍ぶ喜びを与えてくださることを、とてもしあわせに思っています。」

どうか心をこめて、彼女のために祈ってくださるようお願いします。おそらく彼女は、シベリヤに送られるでしょう。彼女は、衣服も持ち物も全部取り上げられて、今、身につけてい

るものしかないのです。彼女には親戚もありませんから、私たちが彼女のために一番必要としている物を集めてあげなければなりません。あなたがたが送ってくださった最後の物を、私は別にしておきました。もしヴァリアが追放されるときが来れば、それを彼女に渡します。神が彼女を強め、これからも、忍耐する力を賜わることを信じています。神が彼女を守ってくださるように！

あなたがたのマリアより

第四信

愛するマリアへ

やっと手紙を書くことができるようになりました。私たちは……に無事着きました。私たちの収容所は、町から十五キロほどの所にあります。私たちの生活について書くことができません。ご存じだと思います。

ただ、ちょっとだけ私のことを書きたいと思います。神さまが私に健康を与えてくださって、肉体労働をすることができることを感謝しています。私はX姉といっしょにワークショップに入れられて働いています。そこで機械を扱うのです。作業は困難で、X姉の健康はよくありません。私は彼女の分も仕事をしなければなりません。まず自分の仕事をやってから彼女の手伝いを

するのです。私たちは一日に十二―十三時間働いています。食物はあなたがたのと同じで、とても少ないのです。でも、こんなことを書こうと思ったのではありませんわ。

神さまが、あなたを通して、私に救いの道を示してくださったことを覚えて、心から神を賛美し、感謝しています。今、こういう道にはいって、私の人生には目的があり、私はどこへ行くのか、だれのために苦しんでいるのか知っています。私は自分の心にある大きな救いの喜びを、みんなに話し、あかししたいという欲求を感じます。だれが私たちをキリストにある神の愛から離れさせることができるでしょうか。獄屋も苦難も力がありません。神が私たちに送られる苦しみは、私たちのキリストにある信仰を強めるのみです。

私の心は、神の恵みが満ちてあふれるばかりです。彼らは、作業場で私をのろい、罰し、余分の仕事を課します。私が黙っていられないからです。でも私は、主が私にしてくださったことを、みんなに言わなければなりません。主は、永遠の滅びに向かっていた私を新しい存在に、新しく造り変えてくださったのですもの。このことを言わないでいられるでしょうか。決して、できませんわ！　私のくちびるの動くかぎり、キリストの大きな愛をすべての人にあかしするのです。

収容キャンプに行く途中、私たちは、キリストにある大ぜいの兄弟姉妹に会いました。初めて

会う兄弟姉妹が神の子であると、御霊によって感じるということは、何と驚くべきことでしょう。ことばをかわす必要はありません。ひと目見ただけで、クリスチャンであることがぴんと来るのです。

やっぱり収容キャンプに行く途中、ある鉄道の駅で、ひとりの女の人がやって来て食物をくれたことがありました。その女の人はたった一言「神は生きておられますよ」と言いました。

ここに着いた最初の晩（夜おそかったのですが）、私たちは地下のバラックに連れて行かれました。そこにいた人たちに、私たちは「神の平安がありますように」とあいさつをしました。とてもうれしかったことに、部屋の隅々からの「平安をもってあなたがたをお迎えします」という答えを聞きました。それで、最初の晩から、私たちは家族の中にいるように感じたのです。

ほんとうにその通りでした。ここには、キリストを自分の個人的な救い主と信じている人が大ぜいいます。囚人の半数以上がキリスト信者なのです。私たちの中には、すばらしい歌い手があり、堂々とした福音の説教者がいます。夕方になり重労働が終わると私たちはみな集まります。私たちの救い主のひざもとに集まり、わずかな時間でも、共に祈ってすごすことは何とすばらしいことでしょう。ここで私は、たくさんの美しい霊の歌を覚えました。毎日、神さまは次々にみことばを与えてくださいます。十九才の時、私はキリストにある初めての誕生日を祝いました。

このすばらしい日のことを私は決して忘れません！

私たちは一日中働かなければなりませんでした。それでも何人かの兄弟が近くの川に行くことができました。彼らは、氷を割って場所を用意したので、夜中に、神のことばにしたがって、私と七人の兄弟がバプテスマを受けたのです。なんて私は幸福なのでしょう。マリア、あなたが今いっしょにいてくれたらとどんなに思ったかわかりません。もしそうできたら、私の愛をもって、過去に私があなたにした悪い行ないを少しでもつぐなうことができるのに。でも神は、私たちひとりびとりをみこころの場所においてくださるのですから、そのおかれた所で堅く立たなければなりませんね。

どうか、神の子どもたちの全家族によろしく伝えてください。神は、私を祝してくださったように、あなたがたの共同の働きを豊かに祝してくださいます。ヘブル人への手紙一二・一―三を読んでください。

私たちの兄弟たちがみな、あなたによろしくとのことです。彼らは、あなたの神を信ずる信仰が、とても強く、苦しみの中で絶えず神をほめたたえているのを聞いて喜んでいます。他の人に手紙を書くとき、私たちのあいさつを伝えてください。

あなたのヴァリアより

第五信

愛するマリア

やっとあなたに何行か書く機会を見つけました。愛するマリア、神の恵みによって、私とX姉は健康で元気だということができます。今、私たちは……にいます。私たちは……に送られるまで、ここにとどまることになります。

私のために、おかあさんのような心づかいをありがとうございました。あなたが私たちのために用意してくださったものを全部受け取りました。一番たいせつなもの、聖書をありがとうございました。みなさんに感謝を伝えてください。あの人たちに手紙を書いたら、私のあいさつと、あのかたたちが私のためにしてくださったことへの感謝を伝えてください。

主が、主のきよい愛の奥義を私に現わしてくださったので、私は世界中で一番しあわせ者だと考えています。私が耐え忍ばなければならない迫害は、特別な恵みと思っています。私が信仰を持った最初の日から、主のために苦しむという大きな幸いを主が与えてくださったことを喜んでいます。どうか私が終わりまで主に忠実であるように、みんなで祈ってください。

あなたがたすべてを主が守り、聖なる戦いのために強めてくださいますように。

私とX姉とは、あなたがたに接吻を送ります。……に送られたら、またたぶん手紙を書く機会が与えられるでしょう。私たちのことは心配しないでください。私たちは喜んでいます。私たちの天国での報いは大きいのですから。マタイの福音書五・一一―一二。

あなたのヴァリアより

これが、ヴァリア――キリストを見いだした若い共産主義者で、キリストをあかしして奴隷労働の判決を受けた――からの最後の手紙である。再び彼女の消息は聞くことができなかった。しかし、彼女のキリストへの麗しい愛とあかしは、世界の三分の一を占める共産圏にある忠実な苦難の地下教会の霊的なすばらしさをよく表わしている。

7　自由諸国のクリスチャンにできること

地下教会からあなたがたに伝えるメッセージ

私は「地下教会の声」と呼ばれて来た。私は、キリストのからだのうちで、これほど光栄な部分の声となるのにふさわしい者ではない。

ただ、共産圏の国々で、私は何年も地下教会の一部を指導して来た。奇蹟によって、十四年間の拷問と獄中生活にも生きのびることができた。その間、「臨終の部屋」と呼ばれている獄房に二年もはいっていた。さらに大きな奇蹟によって、神は、私が獄につながれる者にふさわしい者とみなされ、私を連れ出し、欧米に行って、自由諸国の教会に語るためにつかわされたのである。

私は、数えきれないほど多くの無名の墓に横たわる兄弟たちに代わって語っている。今も、森や地下や屋根裏などで集まっている兄弟たちに代わってお話しするのである。

ルーマニアの地下教会で、私が国を離れて、世界の自由諸国のクリスチャンにメッセージを伝える努力をしてみることが決定された。私は奇蹟的に出国することができて、共産圏諸国に残って、労し、危険を冒し、苦しみ、死につつある人々から与えられた命令を遂行している。

地下教会からお伝えするメッセージはこうである。

「私たちを見捨てないでください！」

「私たちを忘れないでください！」

「私たちを帳消しにしないでください！」

「私たちの必要な道具を与えてください！　それを使う価は払います！」

これがあなたがたに伝えるよう命ぜられたメッセージである。

私は、沈黙の教会である地下教会、語る声を持たない「おし」の教会のために語っているのである。共産圏諸国にいるあなたがたの兄弟姉妹たちの叫びを聞いていただきたい。彼らは避難することや安全や安易の生活を願っているのではない。彼らが願っている唯一のものは、青年たち――次の世代の人々――が無神論で毒されるのに対抗するための道具なのである。彼らは、神のことばを広めるのに用いる聖書をほしがっている。聖書がなくて、どうやって神のことばを伝えることができよう。

地下教会は、ちょうど列車で旅行した外科医のようなものである。その列車が他の列車と衝突して何百人もの人々が地に投げ出され、めちゃめちゃにされて傷を負い、死にかけている。外科医は、死にそうな人たちの間を歩き回って、「道具さえあったら、器具さえ持っていたら！」と叫んでいる。外科の器具があったら、彼は多くの命を救うことができただろう。彼には喜んでそうしたい気持ちがあった。……しかし、彼には道具がなかった。これこそ、地下教会が今おかれている状態なのだ。地下教会は喜んですべてを与えたいと願っている。殉教者も喜んでささげている！　共産政府の刑務所で、何年もすごす危険も冒している！　しかし、こういう自発的な気持ちも、仕事をする道具がなければ価値がない。忠実かつ勇敢な地下教会から、自由なあなたがたへの歎願は、「道具を与えてください。福音書を、聖書を、文書を、援助を。そうしたら、あとは私たちがやります」である。

どのようにして自由教会は援助することができるか

次のようにすれば、すぐに、だれでも、自由諸国のクリスチャンは援助することができる。

無神論者は、自分の目に見えないいのちの源を認めない人々である。彼らには、宇宙の神秘、生命の神秘に対する感覚がない。クリスチャンが彼らを最もよく助けることができるのは、目に見えるところによってでなく、信仰によって歩み、目に見えない神との交わりの生活を送ることである。また、一貫したクリスチャン生活をすること、犠牲の生活をすることによって、最もよく私たちの助けとなるのだ。また、クリスチャンが迫害されるたびごとに、公式に抗議することも助けとなる。

欧米のクリスチャンは、共産主義者が救われるように祈ることによって、私たちを助けることができる。こういう祈りは、単純すぎると思われるかもしれない。私たちは共産主義者のために祈った。すると次の日には、祈る前よりもっと激しく私たちを苦しめた。しかし、エルサレムでの主の祈りも単純だった。この祈りのあと、彼らは主を十字架につけた。しかし、たった数日後、彼らは胸をうたれ、一日のうちに五千人もの人が回心した。他の人のためにも、祈りはむなしくないのだ。あなたがとりなす人によって受け入れられなかった祈りは、あなたのところに、大きな祝福となって返される。また、あなたの祈りの目標となった人には力となる。キリストのことばに従って、私も多くのクリスチャンも、ヒトラーとその麾下の人たちのために、いつも祈った。だから私たちの祈りは、連合軍の打ち出した弾丸のように、ヒトラーを打ち破る力があっ

たと確信している。

私たちは、自分を愛するように、私たちの隣人を愛さなければならない。共産主義者たちは、他のだれにもまさって私たちの隣人である。

共産主義者は、「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」と言われたキリストのことばを実行しなかった結果、生まれたものである。クリスチャンは、まだすべての人を豊かないのちに導いていない。人生の最もたいせつなものの外側に何人かが残されたのだ。その残された人々が反抗し、共産主義者を作り上げた。彼らはしばしば、社会不正の犠牲である。今彼らはひねくれて冷酷だ。私たちは彼らと戦わなければならない。しかしクリスチャンは、たとい敵と戦うとしても、その敵を理解し、愛するものなのだ。

ある人々が共産主義者だという事実に対して、私たちに罪がないと言えるだろうか。少なくとも、義務を怠ったという罪がある。このことのために、私たちは彼らを愛し（彼らを好きになるということとは、全く別なことである）、彼らのために祈ってその罪をつぐなわなければならない。

愛だけで共産主義者の問題が解決すると信ずるほど私は単純ではない。国の権威筋に向かって、ギャングの問題を愛によってのみ解決つけなさいと勧めることはしないだろう。ギャングに

は、牧師だけでなく、警察の力も裁判官も刑務所もなければならない。ギャングが悔い改めなければ刑務所に入れなければならない。「愛」というクリスチャンのことばを、共産主義者への正当な意味の、政治、経済、文化の面での戦いに対抗するものとして用いようとは思っていない。なぜなら、共産主義者は、国際的なスケールを持つギャング以外の何ものでもないことを知っているからだ。

しかし、牧師や個々のクリスチャンは、最善を尽くして、共産政府の支配下にある罪のない犠牲者だけでなく、共産主義者――どんな罪があったとしても――も、キリストに導かなければならない。理解をもって、共産主義者のために祈らなければならない。

聖書や福音書を緊急に必要としている

第二に、自由諸国のクリスチャンは、聖書や聖書の分冊を送ることによって援助活動をすることができる。これを安全に共産主義国に送る手段はある。私は出国してから、すでに多くの聖書を送ったが、無事に届いた。ただあなたがた自由諸国のクリスチャンが、地下教会の兄弟姉妹のために聖書を用意してくださるなら、送り届ける道は、いくらでもある。まだルーマニアにいた

ころ、私はある方法によって持ち込まれた聖書を何冊も受け取った。送る方法について問題はない。ただ聖書が与えられることが問題なのである。

聖書の需要は火急のことである。ロシアと衛星国では、何千人ものクリスチャンが、二十年あるいは五十年間も、聖書や福音書を見たことがないのだ。ある日、ふたりのうすよごれた村人が私の家にやって来た。彼らは、冬中凍てついた土を掘り返す仕事をするために、彼らの村から出て来たのである。それは、お金をもうけたら、古ぼけてぼろぼろになったものでもよいから聖書を一冊買い入れて村へ持って帰ることができたら、というかすかな願いのためだった。私は、アメリカから何冊かの聖書を受け取っていたので、古びたのでなく、真新しい聖書を渡した。彼らは自分の目を疑った！　彼らは凍った土を掘ってもうけたお金を払おうとしたが、私はそれを受け取らなかった。彼らはその聖書を持って、村に飛ぶようにして帰った。二、三日たってから聖書のことを感謝する、押えることのできない喜びにあふれた手紙を受け取った。その手紙には、三十人の村人の名がしるしてあった！　彼らは聖書を注意深く、三十の部分にわけて、その分冊をお互いに交換したのである！

ロシア人が、聖書の一ページをほしがって哀願しているのを聞くのは悲痛なことである。彼はそれで魂を養うのだからである。彼らは喜んで一冊の聖書と牛一頭、やぎ一頭と取り換える。使

いふるした新約聖書を得るために結婚指輪を売った人を知っている。私たちの子どもは、クリスマスカードを見たことがない。もしだれかがクリスマスカードを持っていたら、村中の子どもがその回りに集まるだろう。そして、年とった人が、赤ちゃんのイエスと聖処女と、そこから引き出されるキリストの生涯と、救いについて説明することができるだろう。……たった一枚のクリスマスカードからである！　私たちは聖書や福音書や文書を送ることができる。これが、あなたにもできる一つの道なのである。

第三に、私たちは、幼稚園から大学に至るまで、青少年や子どもに与えられる無神論の毒薬に抗議する特別な文書を印刷して送らなければならない。共産主義者は、「無神論者の手引き」を作っている。言うならば無神論の「聖書」なのだ。同じ手引きでも、わかりやすくしたものが幼稚園の子どもに教えられており、もっと進んだものが子どもたちの進歩に応じて教えられている。この悪の「バイブル」は、子どもの成長、進歩に伴って行き、ずっと無神論で毒して行くのである。クリスチャン世界は、この「無神論者の手引き」への解答を、現在までにまだ出版していない。この有毒な無神論の教えに対するクリスチャンの解答を、私たちは印刷して送ることができるし、またそうしなければならない。しかもそれは早急になされなければならない。地下教会には、この本によって毒された青少年に与える文書が何もないからだ。共産圏諸国のそれぞれ

の国語に訳されたこういう文書が与えられるまで、地下教会は後手に縛られたままなのだ。

毒を注がれたわれわれの青少年のためには解決策が必要だ。それは、神の解答であり、クリスチャンの解答であり、われわれの解答なのだ。「無神論者の手引き」への解答として、たとえば絵本や子どもの聖書のような本を送ることによってもまた、あなたがたは助ける道を持っている。

第四に、私たちがしなければならないことは、地下教会のメンバーと「手に手を組んで」、彼らに経済的援助を与えて、彼らが福音を携えて旅行したり、歩き回って人から人に伝道することができるようにすることである。今この時にも、彼らの多くは、旅行のための切符を買う金がなく、バス代や汽車賃もなく、旅行のための食物を求める金もないために、家に「縛りつけられている」のだ。このように彼らは岸に乗り上げて動きがとれないでいる。三十キロも五十キロも離れた村々で、秘密集会に来てくれることをたのんでいるがその叫びがむなしいのだ。一か月に五千円から一万円を彼らのためにささげれば、彼らの「鎖を解く」ことができるのだ。これらの叫び声に答えて、神のことばを携えて遠くの町や村に出かけることができるのである。

信仰のために獄中生活をした元牧師たちは、燃えるような福音のメッセージを持っている。失われた魂への愛に燃えている。しかし、そのメッセージをもって町や村へ出かける手段を持たない。一か月に数千円がありさえすれば、彼らにその手段を与えることになるのだ。

クリスチャンの男女信徒にも援助の手を差し伸べなければならない。クリスチャンであるという理由で、彼らは最低の生活に必要な費用をかせぐことができない。ましてや村から村へ、町から町へと巡回して福音を伝えるための余裕などない。一か月に数千円もあれば、彼らは「奇蹟的」なわざをすることができるのだ。

公認教会の牧師で、多くの危険を冒して秘密の伝道を並行して行なっている人たちにも、その目的のためにひそかに用意された資金が必要である。共産政府から定められた彼らの「サラリー」はきわめて少額である。これらの牧師たちは、自発的に、自由を失う危険まで冒して働いている。共産政府の規則を無視し、子どもや青少年またおとなに、秘密の集会で福音を宣べ伝えるとき、その自発的な意志だけでは十分ではない。彼らはその実りのある秘密伝道を遂行して行くための手段を要するのだ。

五千円から一万円ぐらい一か月に支給することができれば、こういう地下教会のメンバーが効果的に福音を伝えるための援助となる。これもあなたがたが地下教会を助けることのできるもう一つの道なのである。

次に、私たちは、ラジオによって共産圏諸国に福音を放送しなければならない。自由諸国の放送局を利用して、いのちのパンにひどく飢えている地下教会を霊的に養うことができる。という

のは、共産政府自体が、短波を用いて、自国の人々に宣伝を流しているので、ラジオを持っている何百万のロシア人や他国の奴隷化された人々が、放送を聞くことができるからだ。共産圏諸国に、放送のドアが今開かれている。この働きは拡張しなければならない。地下教会は、これらの放送が提供する霊のかてを得なければならない。これも共産圏諸国の地下教会をあなたがたが援助できる一つの方法である。

クリスチャン受難者の家族の悲劇

私たちは、クリスチャン受難者の家族に援助の手を差し伸べなければならない。こういう家族が何千何万と、今や筆舌に尽くせぬ悲惨な苦しみに会っている。地下教会の一員が逮捕されると、恐ろしいドラマがその家族をおおう。だれでもその家族を助けることは、全くの法律違反となる。これは後に残された妻や子どもの苦しみを増すために、共産主義者が巧妙に計画したことである。ひとりのクリスチャンが刑務所につながれる——その結果は、しばしば死と拷問である。そのとき苦難は始まったばかりである。彼の家族は、いつまでも苦しむ。実際に、自由諸国の一般のクリスチャンが、私と家族に援助を送ってくれなかったら、私たちはとても今まで生き

ていてあなたがたにお会いしたり、こういうことを書いたりすることは不可能だったと言っても言いすぎではない。

現在、ロシアや他の国で、クリスチャンの集団逮捕とテロの新しい動きが起こっている。さらに多くの殉教者が出つつある。彼らは墓に行き報いを受けるけれど、家族は恐ろしく悲惨な状況の下に生きているのだ。私たちには彼らを助けることができる。また助けなければならない。もちろん飢饉で苦しんでいるインドやアフリカの人々を私たちは援助しなければならない。しかし、キリストのために死に、信仰のために共産政府の刑務所で拷問を受けている家族ほど、クリスチャンの援助を受けるに値する者が他にいるだろうか。

私の釈放以来、ヨーロッパ・クリスチャン・ミッションは、クリスチャン受難者の家族に多くの援助を送って来た。しかし、今までなされて来たことも、これからあなたがたの助けによってなしうるものと比べれば、わずかなものにしかすぎないのである。

地下教会の一員で、生き残り、のがれて来た者として、私は、背後に残して来た私の兄弟たちからのメッセージと訴えと歎願を伝えた。彼らのメッセージを伝えるようにと、彼らが私を派遣し、そのゆえに私は奇蹟的に救い出されたのである。

キリストを共産主義世界に伝えることの緊迫性を私は訴えた。クリスチャン受難者の家族への

援助が火急を要することも伝えた。地下教会が福音を伝えるというその使命を遂行するために、あなたがたができる援助の実際的な方法についてもお話しした。

私が足の裏を打たれた時、私の舌は叫んだ。なぜか。舌は打たれていなかったからである。舌も足もひとつからだにつながっているから叫んだのである。あなたがた自由諸国のクリスチャンは、今、刑務所で打たれ、キリストのために殉教者を出している同じキリストのからだにつながっているのである。私たちの苦痛を感じないのだろうか。

初代教会は、その麗しさ、その犠牲と献身の全容を携えて、共産主義の国々に返り咲きの花を咲かせている。

私たちの主イエス・キリストがゲッセマネの園で苦闘の祈りをしておられたとき、ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、歴史上最大のドラマの場所から石を投げたら届くような距離にいて、ぐっすり眠っていた。あなたがた自身のクリスチャンとしての関心とささげ物が、どれだけ直接、殉教の教会の解放のために向けられているだろうか。あなたがたの牧師や教会の指導者に、鉄のカーテン下の兄弟姉妹たちを援助するために、何がなされているか尋ねて見ていただきたい。

鉄のカーテンという壁の背後では、初代教会のあのドラマ、あの果敢な行為と殉教がもう一度くり返されている。そして、自由諸国の教会は眠っているのだ。

そこで、私たちの兄弟たちは孤軍奮闘して、二十世紀最大の、最も勇敢な戦いを続けている。その戦いは、初代教会の、英雄的で大胆な献身に匹敵するものである。そして自由諸国の教会は、彼らの戦いと苦悶を忘れて眠りこけている。ちょうど、ペテロ、ヤコブ、ヨハネが、救い主の苦悶の時に眠っていたのと同じように。キリストにあるあなたの兄弟である地下教会が、福音のために、援軍もなく苦闘しているときに、あなたも眠っていてよいのだろうか。

私たちのメッセージを覚えていただきたい。

「私たちを思い出して、助けてください！」

「私たちを見捨てないでください！」

ここに私は、共産主義国の忠実な殉教の地下教会から――無神論の共産主義の束縛の下に苦しみにあずかっているあなたの兄弟姉妹たちからのメッセージをお伝えしたのである。

×　×　×

読者は、次のあて先で著者に通信を出してもよい。

□東京都荻窪郵便局私書函三五号

□自由救済運動　宛

共産圏の宣教の働きやクリスチャン受難者の家族への援助のためのささげ物も、同じあて先に送っていただきたい。ただしその場合、「共産主義世界のための基金」と指定をしておいていただきたい。

地下運動の声

¥480

昭和45年8月10日発行
昭和50年12月15日6刷

著者　リチャード・ウォムブランド
訳者　栗原督枝
発行　いのちのことば社出版部
印刷　このちのことば社印刷部
発行所　いのちのことば社
160　東京都新宿区信濃町6
落丁乱丁はお取り替えします

B—142
© いのちのことば社　1970